
暗黒球場

馬河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒球場

【Nコード】

N9590E

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

野球界に渦巻く陰謀と欲望。監督となった往年の名選手が旋風を巻き起こす。

1 回表

「四番 サード 王嶋 背番号5」

大歓声が東京ドームに響き渡る。九回裏、2対2の同点で打順は私・王嶋茂治に廻ってきていた。おそらくこれが現役最後の打席だろう。

私にとって今日は選手として最後の試合・すなわち引退試合だった。東京スターズに入団してから既に二十年の歳月が流れていた。いつまでも若くはない……。高卒ルーキーとしてプロ入りして、もう三十八歳だ。

思えば長いようで短いプロ生活であつた。入団当初はピッチャーだった。今では誰も覚えていないかもしれないが、高校三年の夏には甲子園で優勝投手にもなっている。勿論卒業後はプロ入りする意志を持っていた。だから幼い頃から憧れていた東京スターズにドラフト一位で指名された時は、天にも登る心地がしたものだ。

東京スターズは常に優勝争いを演じ、その名の通りスター選手をたくさん抱えるチームだった。地元ということもあり、私は物心ついた頃からファンになっていた。小学校で野球を始めたが、将来は絶対にスターズの選手になるんだと心に決めていた程だ。そして中学高校と進むにつれ才能は開花し、念願の入団まで漕ぎ着けたのだ。

しかしプロは想像以上に厳しい世界だった。私はピッチャーとしては通用しなかった。いかんせん球種の少なさと速球のスピード不足は三年間頑張っても克服出来なかった。さらにスター揃いで選手層は厚く、私程度の投手は二軍に幾らでもいた。

そう、投手時代、私は一度も一軍に上がる事はなかった。夢見ていたプロ野球選手、それも憧れのスターズの一員になったものの、早くもプロ失格の烙印を押されたのだ。

そんな折り、投手を諦め、打者にならないかと進言してくれた人がいた。当時のスターズの看板打者、そして現監督の下川鉄春さんだ。下川さんは入団当初から私をかわいがってくれ、とても面倒見のいい人だった。その下川さんが私の打撃センスを買っていてくれたのだ。確かに高校でも四番でピッチャーだったから、打撃に自信がない事はなかった。しかし打者転向など思いもつかなかった。今の時代は結構そんな選手もいるが、当時としては極めて異例の事だったのである。

三年目のオフシーズン、私は下川さんと自主トレを行い、打者として生まれ変わるために猛特訓をした。スターズの四番、球界を代表する大打者の下川さんが私ごときに付き合ってくれたのだ。

「お前は下半身の馬力があるから、必ず凄いホームランバッターになる筈だ。今年、俺の前の三番を打つのはお前だぜ」

下川さんはそう言うて励まし、鍛えてくれた。私も投手としてはもう通用しないことは悟っていたし、これで駄目なら引退だと心に決めて、死に物狂いで練習した。

そしてプロ四年目、私は打者としてようやく開幕一軍入りを果たした。勿論、最初は代打専門だった。しかし出場した試合で私は打ちまくった。特訓の成果なのか、すこぶる調子が良かった。オールスター前には下川さんの予言通り、三番を打っていた。

自分で言うのも何だが、私は投手よりも打者としての素質の方があったのだろう。下川さんの言葉通り、下半身の力は人並み外れてあったし、目も動態視力を含めてかなり良かった。打者転向一年目にして、下川さんとホームラン王争いをするまでになっていた。結局、その年はキングの座を譲ったが、打者としてやっていける自信を得た一年だった。

翌年からは三番サードのレギュラーの定位置をものにしていった。下川さんとのSO砲は他球団にとって脅威の存在となっていた。打撃タイトルは私達で独占し、スターズとしても繁栄期を迎えていた。リーグ優勝は当たり前、日本シリーズに勝つ事が毎年の目標となる

くらい強かった。日本シリーズは勝ったり負けたりだったが、スターズ黄金時代は目前に迫っていると思われた。

ところが私が入団して十年目、スターズ栄光の四番打者下川さんが引退した。三十五歳という年齢で、自分の思い通りのバッティングが出来なくなったとの理由でだ。そしてその時から私がその後釜、スターズの四番に座ることになった。それから三年間、チームは低迷した。私は三冠王など個人的に成績は残していたが、チームとしては下川さん引退の影響か、何となく乗りきれず、リーグ優勝すら逃していた。

しかしそれを救ったのはやっぱり下川さんだった。引退から三年後、三十八歳の若さで監督としてスターズに帰ってきたのだ。下川さんの復帰からチームは黄金時代を迎えた。なんと日本一六連覇を達成したのだ。下川監督はチームの雰囲気をよくすると共に投手陣の整備、私の前を打つ新三番の育成など活性化を行なった。それだけではない。下川さんはサインを見破る達人だった。大事な局面で相手のサインを見破り、数多くの勝利をものにしてきた。私は改めて凄さを感じたものだ。

V6の間、私自身も打ちまくった。ホームラン王は毎年のこと、三冠王もその間に三回なった。ただ『ミスタースターズ』などと呼ばれ、いい気になっていたのかもしれない。そのツケが回ったのか、今年のキャンプ中、私は腰痛を患った。すると途端にフルスイングが出来なくなってきた。腰が気になり、バットを思い切り振れなくなったのだ。それでもそれなりには打っていたが、例年に比べ活躍していないのは事実だった。四番がこのザマではチームの士気も上がらない。今シーズンは二位にはつけているものの、首位大坂ナンバーズには大きく水を空けられていた。

私は今シーズン限りでの引退を決意した。下川さん同様自分のバッティングが出来なくなっただけで、連覇を途切れさせた責任を取る気持ちもあつた。年齢的にももう三十八歳、下川さんより三年も長く現役としてやってきた。ここらが潮時だろう。下川監督にも了承を

頂き、今シーズン限りで引退する運びとなった。

そして迎えた最終戦。同点で2アウトランナー一塁の場面で、今日引退する私に打席が巡ってきた。

「タイム」

自軍から声が掛かった。下川さんが手招きしている。呼ばれるままベンチに向かった。

「何でしょう監督？」

「シゲ（私・王嶋茂治の愛称。下川さんはずっと私をこう呼んでいる）、ここは打つしかねえぞ。打ってミスタースターズとして華々しく引退するんだ」

下川さんは私に気合いを入れる為、ベンチへ呼んだらしい。

「わかりました。絶対打ちます」

私も珍しく『絶対』などという言葉を使った。現役最後の打席には今までにない雰囲気が漂っていた。

「いいか、初球を狙え。一球目は必ずカーブを投げてくる。それを狙うんだ」

下川さんは得意のサイン見破りなのか、そう言い切った。

「はいっ」

私は思い切り返事をした。今までお世話になった先輩の助言だ。このタイムをかけてのアドバイス、わざわざ私の事を考えていてくれたようで嬉しかった。下川さんの言う事が間違いである筈がない、初球カーブを信じるしかない。

打席に戻った私は相手ピッチャーを睨みつけた。ここは打つしかないと己れに言い聞かせ、構えを取る。

心臓が激しく鳴っているのが自分でもわかる。こんなことは珍しい。プロ最終打席ということで自然と緊張感が高まってきているのだ。

「タイム」

一度打席を外した。心を落ち着かせる為だ。このままでは打てな

い。（落ち着け、最後の打席なんだぞ）再び自分に言い聞かす。そして両手で頬を叩いた。

「よしっ」

気合いを入れ直し、再びバッターボックスに入る。

「プレイ」

球審の声が響く。サインの交換が終わり、ピッチャーが投球モーションに入った。闘志を剥き出しにして投げ込んでくる。

「カ、カーブだ！」

下川さんの言葉通り、初球にカーブが来た。何も考えずに強振する。次の瞬間、打球は放物線を描いてレフトスタンドに突き刺さっていた。

審判が腕を回すと同時に、ドームは割れんばかりの歓声に包まれた。球場内の全ての観客が私を讃えてくれているようだった。引退式用に準備したのか、紙テープや紙吹雪が舞い散らかった。

ダイヤモンドを一周する私は夢遊病者のようだった。引退試合に劇的なサヨナラホームランを打つなんて、本当に夢のようだ。ベースを周る間に今までの野球人生が次々と頭に思い浮かんできた。いろいろな事があった……。しかし、今のこの瞬間に勝る体験はなかった。私は今、野球選手として最高の瞬間を迎えていた。そして、もうすぐ二度と味わえなくなるのだ。嬉しさと淋しさが混じり合ったような感覚を抱きながら、最後のホームベースを踏んだ。

途端にスターズの選手がベンチから飛び出して来た。そして感慨に耽っていた私の全身を叩く。痛いけれど最高の気分だった。チームメイトも皆、私の引退を知っているので名残惜しそうに祝福してくれていた。

「やったな、シゲ」

サヨナラ騒ぎが一段落したところで、下川さんが声を掛けてきた。「下川さん、いや監督のおかげです。ここまでやってこれたのも、そして今日サヨナラホームランを打てたのも」

私は感謝の意を込めて一礼した。

「止めるよ、そんな真似するのは。お前に力があつたからだよ。実力のない奴じゃ三冠王はおろか、スターズの四番にだってなれっこなかったさ」

「下川さん…、本当にありがとうございました」

「おう。本当に長いプロ生活御苦労様だったな。ほら、引退セレモニーの場が用意されているから、とりあえず行つて来いや」

下川さんはそう言う私の尻を軽く叩いて、マイクの置かれているホームベースへ送り出した。

私は準備されていたマイクの正面に立った。それと同時に球場内から今まで聞いたこともないくらいの凄まじい歓声が沸き起こった。「やめるな！」

「まだ続けられるぞ！」

嬉しいことに私の引退を惜しむ声が、ドームの屋根に反響してこだましていた。いつまでも止みそうにない歓声を前にして、とにかくマイクを掴んだ。すると場内は静まり返り、約五万の観衆の目が私一人に向けられた。

「ファンの皆様、今までの御声援、本当にありがとうございました」と言つて私は四方に向かつて一礼した。途端に場内が再び騒がしくなった。

「王嶋あ、お疲れ様！」

「最後に夢をありがとう！」

ファンは暖かい言葉を投げ掛けてくれた。再び私はマイクを手に取り、話を続ける。

「長いようで短い二十年間でした。プロに入つてここまでやれるとは、夢にも思いませんでした。これも諸先輩、並びにチームメイト、そしてファンの皆様の声援のおかげだと思っております。私は本日をもって引退をいたしますが、これからも東京スターズへの御声援をよろしく願います」

私の言葉が終わるやいなや、今まで以上の大声援が巻き起こった。

「ミスタースターズ、また帰って来いよ！」

「今度は監督だ！」

私は引退を決意した時、いつか監督としてスターズに戻って来たいと考えていた。だから今の『監督としての復帰』の声には応えたい気持ちが湧いてきた。再度、マイクを握り締め、スイッチを入れた。

「必ず帰って来ます！監督として、絶対にスターズに戻って来ます」私は興奮して叫んでいた。この予定外のパフォーマンスにドーム内は最高潮の盛り上がりを見せた。

引退の言葉を終えた私は場内を一周し、ファンに最後の挨拶をした。TVや新聞の取材も殺到し、挙げ句の果てに観客までがフェンスを乗り越え握手を求めてきた。球場内は多くの人間が入り乱れて訳がわからない状態だった。私はそのたくさんの人間のターゲットだった。無数の人々にもみくちゃにされ、どうすることも出来なくなっていた。しかし気分は悪くない。みんな私の引退を惜しみ、最後のサヨナラホームを祝福してくれていた。プロ選手最後の日に最高の体験を味わうことが出来、私は本当に幸せ者である。

騒動が一段落し、私は監督室で改めて下川監督と向き合っていた。「凄い人気振りだったな。引退するのが惜しくなったんじゃないかな？」

ファンに殺到され頭からユニフォームまでボロボロになった姿を見て、下川さんが言った。

「いえ、もう今日で完全燃焼しました。悔いはありません」

「そうか。御苦労だったな。それでこれからどうするんだ？」

「引退式でも言ったように監督を目指します。そのために来年からは解説者として一から野球を勉強し直す気です」

「ふむ。スターズに帰って来たいって言ったな」

「はい。そのつもりです」

「だが俺はそう簡単に監督の座を譲らんぞ。四番のお前がいなくな

つても、また来年から新しい黄金時代を築くつもりだから」

この時ばかりは下川さんの表情が真剣なものになった。監督の座には相当な執着心があるようだ。

「わかっています。私だってそんなに慌てて監督になりたいとは思ってません。それに下川さんが今年の雪辱を果たすと予感しています。私の出番なんてずっと先の事です」

私は下川さんの顔つきが険しくなったのを見て、とりあえず相手を立てておいた。

「まあ、いずれはお前がスターズの指揮を取ることになるだろう。それまでは俺に任せておけ」

と言って下川さんは私の肩を叩いた。

「はい」

「これからは新しい第二の人生だ。何か困った事があったら、いつでも俺のところへ相談に来いよ」

「はい、相談させていただきます。本当にありがとうございます」

私は頭を下げて背を向け、部屋を出て行こうとした。

「シゲ」

出て行く私を下川さんが呼び止めた。

「は？」

「頑張れよ。お前ならこれからの人生、きつとうまくいくさ」

「ありがとうございます。頑張ります」

そう応えると監督室を後にした。

下川監督やチームメイト、球団関係者への挨拶も終わり、私は車に乗り帰路を急いでいた。真つ暗な夜の道路を運転している間、色々な事が思い出されてきた。スターズに憧れた少年時代、甲子園の優勝マウンド、スターズに指名されてプロに入団、投手としての挫折、下川さんとの特訓での打者転向、三番サードのレギュラー獲得、SO砲としての活躍やタイトル争い、下川さんの引退で四番になったこと、三冠王の獲得、下川さんの監督就任からのスターズ黄金時

代V6、腰を痛めての引退決意、そして今日の引退試合サヨナラホームラン。プロ野球選手として恵まれた生活が送れたと思う。

しかし、この後の人生どのように過ごすのだろうか。ふとそんな思いが胸の奥から湧いてきた。勿論、目標はスターズの監督だ。だが、その道程は甘いものではない。現在は下川さんが名監督として君臨しており、当分の間御鉢は回ってこない。しかもそれ以前に指導者たる知識は皆無に等しい。これから相当な修業が必要となろう。本当に楽ではない、苦しい日々が続くかも知れぬ。何か重苦しいものが私の胸を支配していた。

1 回裏

プップー！突然、警笛が響き、我に返らされた。見ると私の車は対向車に激突する寸前であつた。考えに浸つていて、全く気付かない間に蛇行していたのだ。これからの事どころか、今、危うく死ぬところだつた。選手引退の日に死亡なんて、恥ずかしい事この上ない。

対向車のドライバーは車から降りて、こちらへ向かつて来ていた。これはまずい、と思つた私はすぐさま運転席から出て、相手に頭を下げた。

「どうもすみませんでした。ついブーツとしておりまして……」

「ブーツとしてたあ？そんな理由で済むと思つてんのか、コラ！」

相手の怒りは相当なもので、猛然と詰め寄つてきた。そして私の胸ぐらを掴み、

「どら、面見せて見る」

と言つて髪を引っ張り顔を覗き込んできた。すると、

「あわわ……」

途端に相手は恐れたような顔つきをして、慌て出した。

「あの、どうかしましたか？」

「お、王嶋選手……ですよね？ぶ、無礼な真似をして申し訳ありません」

と言つと彼は土下座して謝してきた。どうやら私がスターズの王嶋であることが、豹変の理由らしい。

「とにかく頭を上げて下さい。悪いのは私なんですから」

私は伏したまま顔を地面に擦り付けている彼の手を取つてとりあえず起こした。

「本当にすいませんでした」

「もう謝るのは止めて下さい。こっちの方がボケつとしていたんですから」

「は、はあ。どうも……」

「こちらこそご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

「い、いえ。あのう……王嶋さん、今日は本当に感動しました。引退試合にサヨナラホームランを打つなんて。さすがミスタースターズです」

彼はもはや事故の事など頭から消え去ったかのように私を褒めちぎった。

「ありがとうございます。でも、もう私は選手じゃありません」

そうだ、今日をもってプロ野球選手ではなくなるのだ。そうなた私は何者でもない。

「ええ、でも貴方はみんなの英雄です。絶対、監督としてスターズに戻ってきて下さい。みんな待っていますから」

彼はそう言って私の手を両手で包み込むように握ると、深々と頭を下げて、自分の車に乗り込み去って行った。

彼が去った後、私は自分の車に戻って、またしばらく放心していた。今までは先程のように周りにもてはやされていたが、これから何の肩書きも持たなくなればどうなるのだろう。監督になると言っても、実現できるのは何年先のことか。「騒がれている内が花」とはよく言ったものだ。私も間もなく世間から忘れ去られていくのだろうか。そう考えると、今の事故未遂は不安を増殖させた。

自宅に辿り着いた時は夜の十二時を回っていたが、家族は全員起きて、帰りを待っていてくれた。私は湿っぽいのは苦手なので、皆を球場へは呼ばなかったのである。

「パパ、御苦労様」

五歳になる次男の克典が花を持って玄関まで駆け寄ってきた。

「おお克典、まだ起きていたのか？ありがとうございます」

私は花を受け取ると克典の手を引き居間へ向かった。

「あなた、長い間お疲れ様でした」

妻の亜紀子をはじめ、長男の一茂、長女的美奈が出迎え、私の労をねぎらってくれた。皆、今日のサヨナラホームランに感動したら

しく、帰ってくるまでその話で持ちきりだったらしい。

「それにしてもあの監督宣言はカッコ良かったね」

中学二年の長男一茂がはやし立てる。

「パパ、まだ辞めなくてもいいじゃない。私、パパが有名人で友達にも鼻が高かったのにさ」

小学校でいつも私の自慢話をしている美奈は引退を残念がっていた。

「ハハハ、そうかそうか。みんなわざわざパパが帰ってくるのを待っていてくれてありがとう。もう遅いからベッドに入って寝なさい」
「はい」

三人の子供達は返事をするや寝室へ向かった。

居間には私と妻の二人になった。

「あなた、何か浮かない顔をしているわね。引退したから……？」

「ああ、不安なんだ。これからどうなっていくかが。今までのように野球をして生活する訳じゃないからさ」

私は妻に胸の内を正直に吐露した。すると彼女は寄り添ってきて「大丈夫よ、あなたなら何だって出来るわ。今までだってずっと成功してきたじゃない。スターズの監督にだってきつとなれるわ」と励ましてくれた。

「ああ。そうだな……。きつと、なってみせるさ」

妻は私にとつてかけがえのない理解者である。その言葉を聞いて、少しばかりの自信を心に復活出来た。

翌日から私の元にはスポーツ紙やTV局が評論家としての就任要請を行なってきた。ギャラは各社そう変わりがなく、こちらの気持ち一つで何処でも雇って貰えそうだった。まずは第一候補として将来の為にスターズの親会社、読日グループの新聞やTV局に所属する事が考えられた。しかし正直なところ、それは遠慮したかった。何故なら読日グループ入りは、いかにもそのコネを使って将来を見据えているようで、世間体的にも嫌だった。どうせなら実力でスタ

ーズ監督の座を手にしてみたかった。

そんな間にも引退した事でTV出演を繰り返していた。各局の二ユース番組のスポーツコーナーなどが毎日のように私を呼んだのだ。「引退を意識されたのはいつ頃だったのですか？」

「最後のホームランを打った瞬間、どんな気持ちになりましたか？」
「ズバリ、将来は監督として戻って来られますか？」

などと、同じような質問を何処の局でもされて、受ける側のこちらは食傷気味になっていた。そして終了後は解説者としての勧誘。マスコミ各社の代わり映えのしない態度にうんざりする程だった。ただ思った以上に自分への注目度が高く、少し安心したのもまた事実だったが。

結局、私はM H Kの解説者になる道を選択した。最も歴史の深い放送局であるM H Kは一番中立的なイメージがあつたし、派手な民放各局に比べて余計な煩わしさから解放されると思えたのだ。何にせよ、職にありつけてようやく安心出来た。

私は解説者になる上で、改めて野球を勉強し直す事にした。今までの私はどちらかと言えば肉体を鍛えて、感覚で打ったり守ったりしていた。目が良かった為に相手ピッチャーの投げる球種がリリーポイントでわかつたりする事はあつたが、あとは独特の第六感のようなもので打撃や守備をこなしていた。自分で言うのも何だが、才能に頼った選手生活であつたと思う（当然、それに伴う努力は欠かさなかつたが）。

実際、「来た球を打つ」という言葉が当て嵌まるような打撃をしていた。下川さんのサイン見破りなどはあつたが、基本的には配球を読んだりはしなかつた（勿論、前述のように相手の握りで球種がわかる事はあつたが）。とにかく自分の打てる地点に球が来た瞬間に（それがストライクであろうとボールであろうと）、居合い抜きのようにバットを振り切る。それは投げ込まれるボールという点と、バットの真心という点を結ぶようなイメージである。その為、人並外れたスイングスピードをしていたと思う。これを他の選手に説明

しろと言っても難しい。

従って確たる理論がないのだ。今後、解説を行う為に、恥ずかしくないだけの理論で武装する必要があった。それはひいては将来の指導者への絶対条件でもある。

私はルールブックを紐解き、まず野球のルールを再度頭に叩き込んだ。それからバッティング・ピッチング・守備のメカニズムを知り合いの体育大教授と共に研究し始めた。こうしてみると、如何に自分が感覚だけでプレーしていたかがよくわかった。勿論、プロにもなればある程度そういうものは必要だろうが、何の理論にも裏打ちされておらず薄っぺらな野球頭だった事が後悔される程だった。現役時にこれだけの知識があれば、不調時にどんなに役に立ったとか。もっと成績を伸ばす事だって出来たかもしれない。

それと、栄養学や肉体作りの為のトレーニング方法も自ら実践して学んだ。食事一つ取っても筋肉をつけるのに必要なタンパク質量の摂取など、全然考えてこなかった事が思い知らされた。それだけでなく選手時代は栄養の偏りなども気にせずに焼き肉やすき焼き、ステーキなどを好んで食べていたのが情けなく思われる。私は腰を痛めた事で引退を決意したが、もう少ししっかりした生活やケアを行なっていれば、それを未然に防げたかもしれない。

そうこうしている内に年が明けた。同時に、本格的に解説者として活動する時がやってきた。各球団のキャンプが始まるからである。スポーツ新聞にも連載記事を持ち、現役時代の回顧などを書いていたが、ついに二十年振りに現役以外の境遇でキャンプを迎えることになり身の引き締まる思いがした。

私は一路、宮崎へ向かった。ここで東京スターズがキャンプを行なっているのだ。ただ先に行ったのは同じく宮崎県西都市の新潟フエニックスのキャンプだった。まずこちらの様子を見てからお望みのスターズキャンプへ足を運ぶつもりであった。

「よお」

フエニックスの練習グラウンドに足を踏み入れた途端、声が掛か

った。

「やあ、久しぶり。キャンプのリポートをさせてもらうので、よろしく頼みます」

と言つて私が頭を下げた男は、自分と同期にプロ入りした星本浩一だった。彼は入団からずっとフェニックス一筋の男で、二年前に現役を退いてからも投手コーチとしてチームに残っていた。特にスターズに対するライバル意識は並々ならぬもので、私や下川さんに対しては鬼のような形相で投げ込んでくる投手だった。

「あんたも引退して解説者か。お互いに年を取ったものだ……。もつとも俺がコーチだもんなあ」

「全くだ。ついこの前、入団したばかりみたいなのにね。今回は勉強させてもらうんでよろしく」

「ああ。好きなだけ見ていってくれ。批判があるならハッキリ言ってくれた方がいいし。ただし、スターズに情報を横流ししたりするなよ」

「そんな事はしないよ。ひどい言い草だなあ」

「冗談、冗談。未だ対抗意識が抜けないのだよ、あんたもスターズだったからさ」

「そうだったな。君はスターズ戦となると凄い対抗心を燃やしていたもんな。何度、その気迫に吞まれそうになったことが……」

「実を言つとな、俺はスターズファンだったんだ。だから俺じゃなくであんたを指名したスターズを根に持っていたのさ」

「そうか。それであれ程までの気合いが籠もっていたんだな」

「おいおい、そうは言うが対戦成績はそっちの圧倒的勝利じゃねえか。俺は毎回、ベンチ裏で悔しがったものさ」

「はは、そういう君のような好敵手がいたから、こちらも燃えていい成績を収める事が出来たんだよ」

これは決してお世辞ではなく本当の事だった。『名打者が名投手を育てる』なる格言があるが、その逆もまた真なり。星本のような好投手を打ち込もうと練習を積み重ねたお陰で、今の私があるのだ。

「ぬかせ。まあいいや、あんたのいなくなったスターズなら勝てそうだしな。仕返しは今年ウチのチームを躍進させることで済ますとしよう。何せ球団創立以来、優勝経験がないのはウチだけだから……」

星本の言う通り、新潟フェニックスは超弱小球団で、唯一優勝を味わっていないチームだった。彼の全盛期に我らスターズと何度か優勝争いを繰り広げた事はあったが、結局それは全部スターズが勝利したのだった。

「頑張ってくれよ。公平な目で見させてもらおうので」

「おう、それじゃまた後でな」

手を振って星本はブルペンの方へ駆けて行った。

新潟フェニックスのキャンプには正直驚かされた。私が最近勉強した事をいくつか実践しており、それが選手に浸透している様子がうかがえた。例えばノック一つとっても真正面のゴロ中心に行なわれていた。大リーグでは主にこの方法が採用されており、基本を徹底的に鍛えている。基本が出来上がればあとはダッシュ力をつける事で、左右に散らそうが、ファインプレーだろうが、いくらでも可能だという考えである。フェニックスではまさにその通り、コーチが真正面の優しいゴロをみっちりと野手に打っていた。話を聞いてみると、この練習の狙いはまさに私の考えと一致していた。

食事にも驚いた。牛・豚肉は余分な脂肪がつきやすいので、選手のメニューは鳥肉中心だという。選手も勝つ為に我慢して、受け入れていたとの事だ。さらに個人個人の身体の状態に合わせたメニューが採用されているという。新人・若手・ベテランでは必要な栄養素の量も違う。そこに目をつけた球団は、個人的な体力測定や健康診断を通した上で個々のメニューを作成することにした訳だ。

「やあ、どうですか？今年のウチはいけそうですね？」

フェニックスの姿勢に一人感嘆している私に声が掛かった。

「や、これはオーナー、ご無沙汰しております」

相手はフェニックスのオーナー、熊沢氏だった。この方は根っか

らの野球好きで、私も何度かお話をさせていただき、頼まれてサインをした事などもあった。

「球界の至宝とも言えるあなたに来ていただけたとは光栄ですぞ」

「いえ、お邪魔させていただいております」

「で、どうです、今年のウチは？」

「正直驚きました。まだ他球団を見ていないので何とも言えませんが、かなり質の高い練習を行なっていますね。誰かいいプレーンでもお入れになったのですか？」

「いやあ、お恥ずかしい…。私の入れ知恵ですわ。一度でいいから優勝して欲しいという願いから、ちよつと大リーグを始め、運動生理学や栄養学などを独自に研究しましてな。その成果をシーズン終了後、監督やコーチに伝えたんですわ。その中で即使えそうなものをこのキャンプから導入している次第です。まあ結果が出るかはわかりませんが」

「そうだったんですか。オーナー自らとは凄い……」

「本当にいい加減優勝して欲しいですからな。私ももう七十歳、生きていく内に一度でいいから、優勝をこの目に焼き付けておきたいんですわ」

そう、熊沢オーナーは自分の球団がただの一度も優勝していない事をいつも悔しそうに語っていた。現役時代、「王嶋さんのような選手がいたらウチも優勝出来るんだがなあ。来年あたり来てくれませんか？」などと冗談混じりに言われた事をよく覚えている。

「今年はいいとこまで食い込むんじゃないでしょうか？今の状態を維持出来れば台風の目になるかもしれませんよ」

「まあ正直、優勝はスターズかナンバーズじゃないかと思ったります。今年はAクラス入りが出来れば万万歳ですな。勿論、選手にそんな事は言いませんが……。本当の勝負は来年だと思っていますよ。今年は土台作りということ……。一年で優勝なんてさすがに甘くはない筈です」

この発言にも驚かされた。本音を言えば私も同じように思ってい

ただ。オーナーの何と眼力の鋭い事が……。

「さすがですね」

「いやいや。それより王嶋さん、その勝負の来年、ウチの監督をやってくれませんか？」

「えっ？」

「私は敵味方を越えてあなたという選手が大好きだった。あんなに物凄いスター性を持った選手はもう出ないかもしれん。あの最後のサヨナラホームランなんて感動しました。ウチのチームを盛り上げるに充分過ぎる存在だ。あなたが率いるフェニックスなんて想像しただけでも胸が騒ぐ。そして最近のあなたを見る限りでは、相当指導者への修練を積んでおられる御様子……」

「そんな、買い被り過ぎですよ」

「本当を言えば今年お招きしたかったくらいなのだ。ただ、現監督の任期もあるし彼は育成には定評がある。だからその後釜としてあなたを招き、優勝して欲しいのですよ」

「あ、ありがとうございます。そこまで言うただけで光栄です」
「勿論、あなたがスターズの監督をしたいと思われているのは承知しております。ですが、ウチで監督をして経験を積むというのもよろしいのでは？それからスターズに戻られても遅くはなかるうて」

「は、はあ……」

私は困惑していた。ここまで自分を買ってくれていたとは思ってもよらなかった。

「はっはっは。まだ今年のペナントも開幕していないのに、気の早い話でしたな。ただ私は本気でそう思っているのですよ。あなたの心の中にでも留めておいて下さればありがたいのだが」

「はい」

「ごゆっくり見て行って下さいよ。悪い所があれば遠慮なく書いていただいてよろしいですからな。はっはっは。それでは来年待っていますぞ」

オーナーは言うだけ言うと言って去って行った。私は呆然としてそれを

見送った。冗談でも他球団の監督を要請されるなど、全然頭でない事だった。何処まで本気かはわからないが、ありがたい申し出ではある。ただ「フェニックスの監督か……」という気がしないでもなかった。

2 回表

私は取材を生かし新聞・テレビでフェニックスのキャンプを絶賛した。「今年、間違いなく台風の目となる球団です」と自信を持って発言した。それがまた注目を浴びたようで「王嶋、フェニックスキャンプをベタ褒め」などとあちこちで言われることになった。

そしてようやく待望のスターズキャンプへ乗り込む時がやってきた。キャンプは既に第二クールに入っており、練習にも熱がこもっていた。人気球団だけあって、報道陣やファンの数もフェニックスとは比べものならず、大量の人間がフェンスの外に群がっていた。私は視察する上でまず、下川監督に挨拶に行った。

「おう、シゲ来たか」

「下川さん、いや監督、よろしくお願いします」

「おう。好きなように見て行ってくれや。ここはお前の庭のようなものだからな。練習の邪魔にならなければ選手個人に話を聞いてもいいぞ」

「ありがとうございます」

「何の何の。それよりフェニックスはどうだった？お前がベタ褒めらしいが……」

下川さんはさすが指揮官、対戦相手の情報が気になるようだった。「質の高い練習をしていましたね。今年は去年のようにはいかないかもしれません……」

「昨年はウチのお得意様だったからなあ。星が減るとなると痛いわな。ま、こちらにも負けるつもりは毛頭ないが」

「多分、総合力ではスターズの方が上でしょう。横綱相撲を取れば問題はないかと思いますが」

「ふふっ」

突然、下川さんが笑いを見せる。

「ど、どうかしましたか？」

「お前もまだまだスターズの選手の気分が抜けてないな。解説者は公平に物を見ないといかんぞ」

「そ、そうですね……」

「まあ嬉しい事だよ。お前みたいな奴がいてくれて。スターズの将来も安泰だな」

「はは……。だいいいですね。私は本当にこの球団が好きですから」
「大丈夫さ。俺の後をお前が継いで黄金時代が続いていく。球団の力の入れようだって半端じゃない。今年だってお前の後釜にサーモンズからFAで衛藤を獲っているし、さらに現役大リーガーのガンズを七億円出してまで獲得しているくらいだから」

「球界の盟主として勝とうという姿勢があらわれていますね」

「そうさ。そんな球団だから、俺だって二年連続で優勝逃したりしたら大変だ。今年はやるぞ。お前もその辺り、よく見ていつて今後の参考にしてくれ」

「はい、勉強させてもらいます」

下川監督の元を後にした私は、早速練習を見る為グラウンドに足を運んだ。各選手がきびきびとした動きで内外野を駆け回っていた。そんな中、注目はやはり自分の後釜を努める衛藤やガンズのバッティングだった。

「王嶋さん、ガンズ凄いですね。これなら充分に王嶋さんの抜けた穴は埋まるんじゃないですか？」

フリーバッティングを見ている際に知り合いの記者にそう言われたが、同感だった。さすが大リーガー、柵越えを次々に連発していた。飛距離に関しては私の及ぶところではなかった。あとはストライクゾーンの認識と、日本人投手の微妙なコントロール・多彩な変化球に対応出来れば、ホームラン王のタイトルを獲れそうな選手であつた。

そしてサーモンズから来た衛藤も大暴れしそうな雰囲気を持っていた。元々、同一リーグの選手なので新しく他球団の投手を研究す

る必要はないし、それでも力はある。打率も良いので、昨年の私以上に活躍するのではないかと思われた。

こうして外から改めて見てみると、やはりスターズは強いチームである事がわかった。練習の質で言えば確かにフェニックスの方が優っているようにも思えたが、何よりも選手の力量が違う。フェニックスで最も優れている選手と同レベル以上の者が、ここには五人はいる。投手陣にしても二段階くらい差がある。あちらはエースが一人という感じだが、こちらにはエース級の二ケタ勝利を期待出来る者が三人揃っている。その上、名将下川さんが率いるとあっては隙がなく、優勝候補筆頭間違いなしと言えた。

その後も各地で他球団のキャンプを見て回ったが、スターズの牙城を崩せるようなチームは見当らなかった。フェニックスのように練習の質が高い球団は二、三あったが、選手のレベルが違う。何処も善戦はしても、優勝を争うまでの力を持っているとはとても思えなかった。したがって、私はキャンプ中ながら異例の発言をした。「ケガ人が続出でもしない限りはスターズの優勝は間違いない」と。

この発言は小さな波紋を呼んだ。反発する球団や解説者も出たし、逆に同調して乗ってくる者達も多数いた。私は出席しなかったが、民放でそれに関する激論番組まで放送された程だ。ただ私個人に対する非難はなかったし、むしろ球界が盛り上がったと、一部の方からは感謝された。

「やってくれるじゃないかシゲ、こりやお前の名誉を守る為にも優勝せにやならんな」

とは、下川監督の弁。他にも

「いやはや、さすがですなあ。王嶋さんがあそこまで言いなさるとは……。ウチもチャレンジャーとして頑張らせてもらいますわ」

と言うフェニックス熊沢オーナー、

「よくぞ言ったぜ。でもな、勝負は下駄を履くまでわからない。恥

をかせてやるぜ」

と意気込む同じくフェニックスの星本コーチなど、様々な人が意見を交わしてきた。

その予想通りスターズはオープン戦から絶好調。衛藤やガンズを中心に打線が爆発、投手陣も相次ぐ好投、と言うことなしの出来で、ぶつちぎりのトップを走っていた。その圧倒的な勢いは他チームの追隨を許さず、そのままペナントレースも独走する様を予感させた。

2 回裏

そしてシーズン開幕直前、解説者にとっては恒例の順位予想をすることになった。初めて予想をするにあたって私は、絶対に全ての中させる意気込みで臨んだ。この予想一つとっても解説者としての威信に関わる、ひいては将来に繋がると考えたのだ。どういう場であれ、自分の実力を示し、認められなければならない。スターズの監督を夢見る私はそんな気持ちで解説の仕事に従事していた。さて、その私の予想だが……

セントリーリーグ

- 1位 東京スターズ
- 2位 新潟フェニックス
- 3位 大阪ナンバース
- 4位 名古屋シャチホコズ
- 5位 広島サーモNZ
- 6位 横浜ドルフィンズ

セントリーリーグは昨年までプレイしていたので、比較的予想が立てやすかった。それでなくともスターズの圧倒的なまでの戦力プラス下川さんの采配を考慮すれば、当初の宣言通り優勝候補に押すことは難くない。二位にフェニックスを持ってきたのはやはりキャンブを見ての印象だ。それだけのチーム作りをしている事が読み取れた。優勝は考えられないが、上位に食い込む可能性は充分だ。スターズの独走状態になれば、二位に躍り出る可能性は高いと思う。三位のナンバースは実力的には妥当なところ。歴史あるこの球団は、本来ならライバル関係のスターズと優勝争いを繰り広げるべきなのだが、今年の戦力を分析するととても互角とは思えないし、フェニックスを押す分だけ評価を下げた。四位以下は昨年までのデータと

今年のキャンプを見た上で決めた。以上、セントリーグに関してはかなり自信のある予想だと言える。

パワーリーグ

- 1位 福岡イーグルス
- 2位 埼玉ライオネルズ
- 3位 神戸ビッグウェーブ
- 4位 日本ウイナーズ
- 5位 大阪バイソンズ
- 6位 千葉ガンマーズ

一方、パワーリーグの方は、数名知っている選手がいるとはいえ日本シリーズやオールスター・オープン戦でしかまともに対戦した事はなく、しっかりしたデータは一切頭に詰まっていなかった。その為、昨年の戦いや今年のキャンプを基に順位予想を立ててみた。一位に推した福岡イーグルスは過去に黄金時代があったものの、ここ三十年近く優勝から遠ざかっている球団である。しばらくBクラスを彷徨っていたが、三年前に監督が変わってから徐々に盛り返し始め、昨年は二位に入っていた。キャンプ・オープン戦での選手の上々な仕上がり具合を見て、今年は優勝するのではないかと判断した訳である。二位以下は、確証はないのだが、キャンプを見た上で経験に基づく勘で決めた。ただし下位に挙げたチームに関しては若干の自信がある。下位二球団はキャンプを見た限り、勝つ為の要素が整っているとは思えなかった。選手が隅の方でサボっていたり、コーチが意味のない練習を繰り返したり、監督の意図する所が読み取れなかったりと、見ていて理解に苦しむ場面が多かったのだ。勝負はやってみないとわからないが、私の考えではこういうチームは勝てないと思わざるを得ない。

以上のような順位予想をTVで披露したのだが、同じ予想をする解説者は他に一人もいなかった。新潟フェニックスの二位と福岡イ

ーグルスの首位を予想した者が一人としていなかったのである。おかげで周囲からは「大胆な予想」などと言われて、奇異な目で見られた。こちらとしては全然奇をてらったつもりはないのに、全く失礼な話である。

開幕前は解説の他、金メダリストやサッカー選手との対談、アメリカのスポーツ観戦取材などを行い、いろいろと吸収させてもらった。バラエティー番組などにも誘われはしたが一切出演せず、己れを磨く事に努めたつもりだ。公共放送のM H Kを選んだおかげで、その辺は助かった。

そしていよいよペナントレースが開幕した。私もM H Kの中継での解説、「王嶋の目」なる新聞連載記事など、忙しくなってきた。私の解説は視聴者や読者にもおおむね好評のようで、特に「わかりやすい」という意見をたくさん頂き、勉強をした甲斐があったものだと感じた。

その勉強の成果は予想にも生きていた。ペナントレースは私の睨んだ通りの展開になったのだ。センターリーグは東京スターズが打の爆発・投の充実で独走し、二位以下が混戦状態、パワーリーグは私がペケ印を付けた球団が早くも脱落し上位球団のみで優勝争いとなっていた。あまりにピタリとはまったので、自分でも驚いたものだ。

前半戦が終わり、オールスター前に下川さんにインタビューする機会を得た。チームは首位をひた走っており、余裕の会見となった。「下川監督は今シーズンの独走の要因をどうお考えですか？」

「ははっ、そんな事はシゲの方がよくわかってるだろう？ お前、あれだけウチを推していたじゃないか」

「ははは……」

「まあ新戦力が思い通りに活躍してくれたのが大きいわな。特に衛藤とガンズ、あの二人の加入だな」

「二人でもう五十本塁打ですからね、凄いですよ」

「そうそう。シゲの抜けた穴を十二分に埋めてくれた訳だ」

「私もいい時に引退しました」

「バカ言え、もう三年はウチの四番をはれたわ。如何に衛藤やガンズが打とうともお前には及ばんよ。何よりスター性が違う。豪快な空振り一つで客を湧かせる事が出来たのはお前くらいのもんだ」

「最大級の賛辞を頂き、ありがとうございます。そう言っていただけて嬉しいです」

「お前級の打者はもうなかなか出てこないだろうなあ」

「はは、もうその辺で。話を戻しますが、他にはどんな要因が？」

「そうだな、ウチがいいのは勿論だが、他が潰し合いをしてくれたのがあるな」

「そうですね、スターズ以外の五球団はほぼ同じくらいの勝率ですからね」

「ウチを単独で追ってくるような相手がない訳だから助かっているな。ただシゲの予想した通り、フェニックスは強くなっているよ」
「そうですね。確かに負け越しているとはいえ、スターズとの対戦成績が一番良いのもフェニックスですね」

「ここまでスターズは全球団に勝ち越しており、フェニックスの八勝十敗という成績が最も食い下がっている状態であった。」

「そうだ。シゲはなかなか見る目がある。キャンプの出来がいいつて言っていたが、ちゃんと仕上がってきているよ、フェニックスは。去年と格段の違いだ」

「後半戦最もマークする球団になりますか？」

「いや、もうこうなると何処をマークというよりも、自分達が如何に戦つかだろいうな。前半同様、投打の歯車が噛み合えば優勝は見えてくるだろう」

「そうですね。さすが下川監督率いるスターズ、横綱相撲さえ取れば負けはないという事ですね」

「そういう事になるな。まあ蓋を開けてみんことには勝負はわからんがな」

「私は古巣という事に加え、スターズ絶対優勝の公約もあるので期待しています。本日はありがとうございました」

といった内容の取材だったのだが、その帰り、下川さんの誘いで久々に夕飯を同席する事になった。銀座の高級料亭に二人で入り、日本酒を注ぎ合った。こんな風に下川さんと二人で食事するのは現役時代以来だった。お互い頬を真っ赤に染めながら、料理に箸を延ばしていた。

「シゲ、一年目にして早くもいっぱしの解説者になったなあ。さっきのインタビュー受けていて感心したぞ」

「いやあ、そんな……。毎日勉強です」

「じゃあ随分と勉強したんだろう？今シーズンここまでお前の読み通りじゃないか」

「たまたまですよ」

「いや、たまたまでは無理だよ。ある程度見る目を養わないと出来ないレベルだ」

「恐縮です……」

「さすがに俺の後釜狙っているだけの事はあるな。現役時代とは打って変わって理論派になっているじゃないか」

「いえいえ」

「聞いたぞ、フェニックスの熊沢オーナーから早くも監督就任を依頼されているそうじゃないか？」

「いやあ、あれはあの方のリップサービスですよ」

と私は言いながらも、下川さんがその話を知っていたことに内心驚いていた。

「何で俺が知っているのかって怪訝そうな顔しているな？」
「い、いえ」

「実はな、ウチの球団の方に熊沢さんから連絡があったらしいんだわ。来期、王嶋さんを監督にお迎えしたいのですが、とな」

「えっ、本当ですか？」

「ああ。それでスターズの方で何か問題があると困るので、あらか

じめ確認しておこうと思ったんだとさ。大したもんだよ」

「そうだったんですか……、そこまで考えておいでとは思っていませんでした」

「どうするシゲ？本気だぞ、あの人は」

「どうすると言われても、まだ正式に要請された訳じゃありませんし……」

「そうは言うがな、スターズにまで連絡が来ているとなると、もうこれは本格的な話だぞ」

「うーん……」

「俺はやる方を勧めるぞ。確かにお前はウチのチーム一筋なんだろうが、他で勉強してくるのもきつといい経験になる筈だ。ウチの監督するのはそれからでも遅くないぞ。まだ俺もいるしな」

「ええ……」

正直私は戸惑っていた。水面下でそこまで話が進んでいるとは思っても寄らず、解説者になったばかりなのに急に監督という話が近付いてきても実感が湧かなかった。この後も下川さんと球界に纏わる話で飲み明かしたが、失礼ながら私は「心ここにあらず」といった風で、ずっと監督要請の事を考えていた。

3 回表

数日後、オールスターゲームが新潟市鳥屋野球場で開催され、私は球場へ取材に出掛けていた。センターリーグの有名選手の多くは顔馴染みなので、グラウンド内で出会っていると自然に話も弾んだ。

「王嶋さん、解説評判ですよ」

「背広似合うようになったね、へへっ」

「ウチのチームにももっと取材に来て下さいよ」

リーグを代表する名プレイヤー達から次々に声を掛けられ、悪い気はしなかった。

そんな中、私はあの熊沢オーナーに会った。試合開始直前、解説席に向かおうとしていた時、ちょうど反対側通路からオーナーが歩いて来たのだった。

「おお、王嶋さん」

「あ、熊沢オーナー、ご無沙汰しています」

「ちょうど良かった。一度お電話を差し上げようと思っていたんですよ」

「はあ……」

「キャンプの時に言いましたよね、来年ウチの監督就任をお願いしたいと。あれは本気です。時期尚早と言われるかもしれませんが、正式にお願いに上がろうと思っていますよ」

「こ、光栄な話です……」

「実は先走りして失礼だとは思いましたが、スターズの方にも連絡して了承を取ったのですよ。もしスターズさんが王嶋さんを来期コーチに要請されたり、外へ出す事に反対されるようならばウチは遠慮しますが、とね。そうしましたらスターズさんの方には異論はない、あとは王嶋さん本人の意志だと言われましたのでね」

「ええ、それは下川さんと対談した際に伺いました」

「そうでしたか、でしたら話は早い。如何ですか、考えて頂けませ

んか？」

「はい……」

「勿論、すぐに返事が欲しいという訳ではありません。そうですね、九月一杯までに結論を出して頂ければ……」

「わかりました」

「私としては如何なる結論を出されようとも感謝こそすれ、恨んだりしませんので、どうかじっくりとお考えになって下さい。契約金その他は、もし引き受けて下さるのなら、充分な額を提示させていただきますので」

「はい。よく考えさせてもらいます」

「ははっ、よろしく頼みますよ。それにしても今シーズンのスターズは強いすなあ。王嶋さんの予想通りだ。ま、ウチも健闘しているが……」

「そうですね。スターズが良過ぎるんですよ。フェニックスは絶対に力を付けています」

「うむ。何とかあなたの予想した二位につけてくれるといいのだが……」

「球宴後、うまく波に乗ればいけると思いますよ」

「そして、そのチームを来年あなたが率いてスターズに挑戦する、となれば最高ですがなあ。監督としてのSO対決は球界を活性化させると思うんだが。はっはっは、また気が早過ぎましたな」

「オーナー……」

「とにかくよろしく願いしますぞ。これは正式な依頼ですからな。それでは」

「失礼します」

そのまま互いに反対の方向へ進んで行き、会見は終わった。私は快活なオーナーの迫力に圧倒され放しだった。そして少し心がぐらつき始めていた。あそこまで熱心に誘ってくれる熊沢さんの熱意に応えたい、と思う自分が心の中に出現してきた。

オールスターゲームはセンターリーグの連勝に終わった。ここで

もスターズ勢が大活躍で、ガンズ・衛藤がアーチの共演、エース下原が三回をパーフェクトピッチングと、前半戦の勢いをそのまま見せた形となった。

仮に来年フェニックスの監督を引き受けたとしたら、このスターズの強者共を抑えられるだろうか？私は自分に問い掛けてみた……「否！」

正直言つてその自信はなかった。それでもスターズは下川さんが率いて隙のない集団に仕上げられている。私が監督をしたところでフェニックスを優勝させる事は出来ない……。

だが、こうも考えた。下川さんのスターズに挑戦して勝つ事が出来れば、自分の株も上がるのではないかと。何よりフェニックス監督就任は、勝負師の血が騒ぐような挑戦でもあった。今回の熊沢オーナーの誘いは、私を悩ませるに充分な話であった。

私の揺れる胸の内もよそに、ペナントレースは再開し、相変わらずスターズは勝ち続けた。止まらぬ勢いで連勝し、八月の終わりにはマジックが点灯してしまった。他の五球団はこぞってエース級の投手をぶつけるのだが、衛藤やガンズに無残にも打ち込まれて、敗退を喫していくのだった。

そんな様子を解説席から見ていた私は、古巣スターズの勝利を喜ぶ以前に、如何にして強力打線を封じるかを考えている自分に気が付いた。試合を観戦しながら、何時の間にか衛藤やガンズのウィークポイントや得意コースを探っているのだった。半ば無意識の内にスターズと対戦したい気持ちが沸き上がってきたのだろうか。

私は自分では判断しかねて、まず妻に相談を持ち掛けた。子供達も寝静まった深夜の寝室で、今までの経過を話した。

「……という話なんだ。君はどう思う？」

「私は、何処だろうとあなたに付いていきますわ。ですからあなたの思ふ通りにやって下さい」

「でも新潟へ行けば、子供達の学校の事もあるんだぞ」

「ほほほ、そんな心配は無用ですわ」

「えっ？」

「子供達はね、誰よりもあなたのユニフォーム姿を望んでいるのよ。確かに転校してお友達と離れてしまうのは辛いでしょうけど、それ以上にあなたが再びユニフォームを着る事を喜ぶでしょうよ」

「そ、そうなのか？」

「ええ、今年から背広を着て出掛けて行くものだから、あの子達も寂しそうで……」

「そうか。じゃあ家の方は問題ないって事だな」

「ええ、どうかあなたの思いのままにやって下さいな」

「わかった。ありがとう、亜紀子」

言葉と同時に私は妻を抱き締めていた。

九月上旬、私が決意を固める前に、東京スターズはセンターリーグ優勝を決めてしまった。シーズン当初からの圧倒的な勢いは衰える事無く、そのまま優勝まで突っ走っていったのだ。私は解説席から下川さんが胸上げされるのを見た。そしてこの瞬間、意志は固まった。

私はまだシーズン中ではあるが、スターズの球団幹部と会見した。優勝も決まり一区切りがついたのか、さして忙しそうな様子もなくオーナーを始めとして社長や代表も交えてお会いする事が出来た。「オーナー並びに皆様、今シーズンの優勝おめでとうございます」「ありがとう。王嶋君が抜けた事で一時はどうなることかと思ったが、補強がうまく当たって良かったよ」

オーナーの渡部さんが私の言に応じた。

「ところで王嶋君、本日の来訪は例のフェニックスの監督の件かね？」

氏屋球団社長が早速話を切り出してくれた。

「はい」

「それでどうする事にしたんだね？」

「ある程度、決意は固まりましたが、その前に皆様の意見をお伺いしたいと思ひまして」

「そうですね。この件に関しては、我々の方でもフェニックスの熊沢オーナーから電話をいただいた時に協議しました」

社長はここで一度、話を区切った。

「それで？」

思わず私は続きを催促した。

「私達としては全てあなたの意志を尊重するということとでまとまりました。確かに中にはミスタースターズの王嶋君を他球団に出すなんてもつての他だ、という意見もありましたが、それ以上にあなたの為になるのではないかと判断したのです。ひいては今後のスターズの為にも」

「では……」

「球団としてはむしろフェニックスの監督就任を勧める次第です。勿論、それを決めるのはあなた自身ですが……」

「そうですね、これで私も決心が着きました。来期、新潟フェニックスの監督を引き受けるつもりです」

「おお、そうですね。それはめでたい」

オーナーの言と共に、場の全員が拍手した。それを受けた私は四方に礼をして、暖かく送り出してくれたスターズ球団に感謝した。

「それでは来シーズンからは敵味方に分かれる訳ですな。容赦しませんぞ」

「胸を借りるつもりでぶつからせてもらいます」

最後はこんな軽口まで叩いて、会見は終了した。

3 回裏

決意を固めた私だが、熊沢オーナーに連絡する前にまだすべき事が残っていた。恩人でもある下川さんへの報告だ。下川さんはリーグ優勝を決めたとはいえ、日本シリーズを控えた忙しい身体。私は電話でお知らせする事にした。

「おう、シゲか。どうした？」

「この度は優勝おめでとうございました」

「おう、そのセリフはTVでも聞いたぞ。お前の予想通りになって良かったよ。それより電話してきたって事は何か用があるんだろう？」

「はい」

「何だ、どうしたあ？」

「実はフェニックスの監督を引き受ける事にしたのでご報告を、と思ひまして」

「そうか、やる気になったか。俺もその方がいいと思っていたんだ、今後の為にもな」

「自分もそう思いました。そしておこがましいのですが、今年のスターズを見て挑戦してみたいとも」

「そうか、勝負師の血が騒いだか？まあいい、そうなると来年からは敵だ。一切情けはかけんからな」

「はい」

「それじゃ俺が日本シリーズ終わったら一度会つか？話したい事もあるしな。こちらからまた連絡するよ」

「わかりました。それではシリーズの勝利を願っています」

「おう、またな」

電話は切れた。下川さんへの報告を終えた私はこの晩、家族にもフェニックスの監督をやる気である事を知らせ、拍手喝采を浴びたのだった。

翌日、アポイントを取って新潟まで出向き、熊沢オーナーと会見した。電話でお答えするのも失礼だし、何より監督になる気なので、直接お会いして話したかったのだ。

「わざわざ新潟までおいでいただき、ありがとうございます。それで監督の件ですが……」

私の意志を知らないオーナーの顔は、決断を心配して少しばかり強ばっているようにも見えた。

「お世話になります」

「い、今、何と？」

「未熟ではありますが、フェニックスの監督を努めさせていただきたいと思います。よろしく願いします」

「ほ、本当かね？」

「勿論です。わざわざ冗談を言いに新潟まで来ませんよ」

「ああ……、ゆ、夢じゃなからうか……。律儀なあなたの事だ、わざわざ新潟まで出向いてくれて断られるのかと思っていましたよ」

「今年のスターズを見て燃えてきたんです。自分のいなくなつたあのチームに挑戦してみたいと。そしてオーナーの熱意に打たれました。男としてそれに応えたいと思いました」

「ああ、ありがとう……。ありがとう、王嶋さん」

オーナーは歡喜の表情をして、何と抱きついてきた。

「オ、オーナー……」

「私は以前からあなたが自分のチームに来てくれるのを夢見ていた。あなたのようなスター性のある選手が来てくれたらどんなに盛り上がるかと……。ずっとずっと思っていたのです。そしてその時こそ優勝を狙える時だと。確かにスターズには劣るかもしれませんが、今のあなたでしたら、充分に渡り合えるだけの力量を持ち合わせている筈です」

「そ、そこまでの自信はありませんが、とにかく精一杯やらせても

らいます」

「ああ、天にも昇る心地だ……。あなたがフェニックスに来てくれるなんて……。今日は球団を設立して以来、最高の一日になりました」

オーナーは私の監督就任が本当に嬉しかったようで、心から喜んでくれていた。私もその笑顔を見て、良い決断をしたと感じた。

この後、条件が提示され契約が交わされた。一年契約で、年俸は何と二億円！これにはさすがに驚き、

「ち、ちよつと待って下さい。そんなに貰えません」

と言わざるを得なかった。

「いや、これは正当な評価です。あなたがウチのチームに来る事は、兼ねてからの私の夢だったのです。夢にお金を投資するのは当たり前です」

「しかし、こんなに貰っては選手やコーチに良く思われません」

「いやいや、あなたの実績を考えたらそんな事は誰も言えませんよ」
「ですが……」

私は固辞した。こんな金額をチームの人間が知れば、憤懣やる方ない筈だ。星本あたりは黙っていないだろう。

「わかりました。でしたら出来高という事では如何です？」

「出来高……ですか？」

「とりあえず年俸は一億円として、リーグ優勝を成し遂げられた場合、もう一億上乘せする。これでどうです？ウチのチームは一度も優勝していない。それを達成されれば一億くらい安いものだ」

「リーグ優勝……」

「如何です？」

「よしやりましょう。それでお願いします。それだったら正当報酬という事で励みにもなりますし」

「それじゃあ一年契約の年俸は一億円、それに優勝出来高一億円という事で」

「ちよつと待って下さいオーナー、一年契約という事です……」

私はこれが腑に落ちなかった。あれだけ熱心に誘っておいてたった一年の契約でいいのか。

「ええ」

「こういう言い方は何ですが、私は一年間でいいんですか？」

「あつ、そういう風に解釈されましたか……。それはこちらが舌足らずでした」

「と言いますと？」

「王嶋さんはスターズの監督になるのが最終目標でしたよね？」

「いえ、その……」

「ははは、正直に言っておさつて結構ですよ。無理を言つて監督をお願いしたのはこちらの方ですから」

「す、すいません」

「こちらとしましては、なるべくあなたの将来に差し障りがないようにと考えての一年契約案だったのですが。例えば再来年、もしあなたにスターズの監督を務める機会が回ってきてもウチと複数年契約しては話が簡単に済まなくなるし、何よりあなたにご迷惑を掛けてしまう、そういう事態を避ける為、単年とさせていただきますのです」

「そうだったんですか、そこまで考えていて下さったとは……。変な勘繰りをして申し訳ありません」

「いえいえ、一年契約に疑問を持つてくれて、こちらとしてはかえって嬉しいくらいですわ。本音を言えば何年でもやって欲しいくらいですから」

「ははは、でも一年契約、燃えてきました。後がない背水の陣を敷いているみたいです」

「さながら王嶋さんは斉の韓信ですな」

オーナーは私の『背水の陣』という言葉を取つて昔の中国の英雄になぞらえる。

「じゃあオーナーは高祖ですね。漢の国と一緒に建国しましょうか」
「はっはっは、私は『狡兔死して走狗煮られる』なんて真似はしま

せんからな、とにかくあなたを信用しますよ。存分に腕を振るって下され」

「やります。見ていて下さい」

私はオーナーに優勝を誓い、契約を済ませた。

ペナントレースは終了した。何と両リーグの順位は私の予想とピッタリ。これには自分でも驚き、昨オフの勉強が実を結んだと実感した。M H Kのスポーツニュースでそれが披露され、視聴者からお褒めの手紙やファックスをいただいた。この一年で最も嬉しい出来事であり、来年への自信に繋がる成果であった。

私のフェニックス監督就任は、日本シリーズ終了まで伏せておく事にした。そんな話題でシリーズの盛り上がりには水を差しては申し訳ないと思ったのだ。そして幸いにもその動きは報道陣には感付かれていないようだった。

そんな中、日本シリーズは始まった。私も解説や取材で球場に向いたが、そこで見たのは圧倒的なスターズの強さだけだった。激戦の末、パワーリーグを制してきた福岡イーグルスがまるで子供扱い。エースは強力打線に打ち込まれ、クリーンナップは完璧に抑え込まれる始末。まるで大人と子供程の差がそこにはあった。結局スターズの四連勝で、あっさりと勝負を決めてしまった。

このとんでもない強さのスターズを見せられて、私の闘志に火が付いた。今シーズン、何処の球団も歯が立たなかった相手を自分が封じる事にこそ意味がある、そう思った。日本一を決めて浮かれ騒ぐスターズの選手達を見ながら、誓いを新たにしたのだった。

日本シリーズから二日後、新潟フェニックスは重大発表があると云って報道陣を球団事務所に集めた。熊沢オーナーと球団広報が用意された席に腰掛けて記者連中と対峙した。取材陣も何の発表かわからず、訝しそうな表情をして、席上のオーナーから発せられる言葉を待っていた。

「報道関係の皆様、寒い中ご苦勞様です。本日、お集まりいただいたのは、新監督を発表する為です」

オーナーの言葉に報道陣がどよめく。それもその筈、フェニックス球団はシーズン中から現監督の留任をほのめかしていたのだ。そしてそれは彼の了承の上で言い続けられていた。

「それは驚きました。てつきり監督は来期も代わらないものと思っ
ていましたから。それで、一体どなたに就任要請を？」

代表して一人の記者が質問を浴びせ掛ける。

「ある大物に依頼して、快諾をいただきました」

「大物？それは……」

「紹介しましょう、王嶋茂治新監督です」

オーナーに名前を呼ばれると共に、私はカーテンの内からフェニックスのユニフォームに身を包まれた姿を現わした。途端に会場全体が騒つき、歓声が上がる。

「お、王嶋、ミスタースターズの王嶋がフェニックスの監督に！」

「ほ、本人だ！」

「何で突然フェニックスに？」

報道陣の騒めきはなかなか収まらなかった。私が席に着いた時、ようやく静かになり、その場にいる全ての人間の目が己れに集中しているのがわかった。

「皆様、ご苦勞様です。只今、熊沢オーナーの方から発表がございましたように、私、王嶋茂治が来期の新潟フェニックスの監督を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願い致します」

言葉が終わるか終わらぬかという内に、記者団の方から質問が殺到した。

「王嶋さん、何故、フェニックスの監督を？」

「スターズとの関係はどうなっているんですか？」

「いつ頃、決心なさったのですか？」

あまりの騒ぎに收拾が着かなくなり、たまりかねた球団広報が立

ち上がって、

「すみません。皆様、質問は一つずつ順番にお願いします」

と言う程だった。これでやっと記者達も落ち着き、代表者が立つて一人ずつ私に問い掛けてくる運びとなった。

「フェニックスの監督になると決心したのは、今シーズンのスターズの優勝を見てからです。それまでに熊沢オーナーの方から熱心にお誘いいただいていたのですが、まだ迷っている段階でした。強いスターズを見て勝負師の血が騒いだというか、まあとにかく挑戦してみたいと思った訳です」

「私は現役時代から王嶋さんにウチのチームに入って欲しいと願っていたのですよ。そして選手としては昨シーズン引退してしまわれた。そこでこれは好機とばかりに口説きまくったのです。監督としてウチのチームに来てくれと」

オーナーが私の言葉に続いた。

「しかし、王嶋さんはスターズの監督を目標としていたのではないですか？」

「はい、それは今も変わりません」

「ということは腰掛けでフェニックスの監督をなさるのですか？」

「ちよつと、それは失礼でしょう。王嶋さんは私のしつこい勧誘に応じてくれた訳で、こちらとしても将来的な道は保障しております。それが故の一年契約であり、決してフェニックスの監督を腰掛けでやってもらうようなつもりはありません」

とオーナー。

「オーナーの言う通りです。確かに将来の目標としてスターズの監督がありますが、現時点ではフェニックスの監督を精一杯務めさせて頂く事以外考えていません。ただ、そんな先の事まで考慮してくれ、スターズともうまく話をして下さったオーナーには本当に心打たれました。その為にも一年目から優勝を狙っていききたいと思います」

「優勝……ですか？今年のスターズを解説席から見て、死角はある

と思いますか？王嶋さん本人も今年はかなり推されていましたか？……」

「死角はないです。相手の弱点云々以前に、まずチームの力を底上げしたいと思っています。そうすれば勝負に絶対はありませんから、勝機も見えてくると……」

「なるほど。王嶋さんの手でチームそのものを強くしていこうという事ですね？」

「そのつもりでいます。今年優勝したスターズの胸を借りたいと思います」

「具体的な方針はあるのでしょうか？」

「そうですね、まだフェニックスの選手を直に見ていないのではつきりとは言えません。秋季キャンプで選手の力を見極めて、それからになりますね」

「下川さんとのSO対決についてはどう思いますか？」

「スターズ」下川さんのチームだと思っていますから、先程も申しましたように、胸を借りるつもりでぶつかっていききたいです。それと、SO対決と言われて球界が盛り上がるのでしたら大いに喜ばしい事です。その話題性に負けずに頑張りたいと思います」

「新潟フェニックスというチームについての印象は？」

「現役時代、何度か優勝争いしているので力はあると思います。現在コーチをやっている星本君との対戦は特に印象に残っています。昨年のキャンプを見せていただいた限りでは彼を筆頭に、チームとして強くなるうという気持ちを持っているので有望だと思っていますが」

「その星本さんとはうまくやっていけそうですか？」

「チームに残ってくれる以上は大丈夫でしょう。別に互いに憎しみを持っている訳ではありませんから。彼とは現役の時からいいライバル関係でした」

私はここでハンカチを取り出して額の汗を拭いた。それを見た球団広報が、

「申し訳ありませんが、質問は以上とさせていただきます。本日は遠いところをお集まりいただき、誠にありがとうございました」

とこれで質問を打ち切った。記者達の熱は冷めそうになく、キリがないと判断したのだろう。その判断は正しかったと思う。記者連中のしつような質問攻めに、私も辟易し始めていたくらいだ。そのまま記者会見は終了し、我々はバックステージに引き下がり、報道陣も帰っていった。

「いやはや大変でしたな。王嶋さんが出てきた途端にあの騒ぎだ。やはりあなたの人気は凄い」

報道陣の去った後、オーナーは騒ぎ立てるように言った。

「はあ、自分でも驚きました。まさかあんな質問攻めに会うとは…

…」

今だに流れ落ちる汗を拭いながら応える。さすがにくたびれた。

「いや、それがあなたの人気ですよ。そのスター性に私は惚れたんですから。あなたには自然と人を引き付ける魅力がある」

「そんな、褒め過ぎですよ」

「いやいやもつと自分に自信を持って下され。あなたはそれだけの人なんですから」

「そうですね。私が弱気では選手も意気消沈してしまいますからね。そんな話の最中、我々のいる部屋のドアが開いた。

「失礼します。王嶋新監督がいらっしゃっていると聞きました……」

「星本君……」

それは星本だった。

「やあ、まさかあんだがウチの監督になるとは思ってもいなかったよ」

「私が密かにずっとお願いしていましたね。やっと王嶋さんの承諾を得たのですよ」

オーナーが口を挟んだ。

「一生懸命やらせてもらうよ。よろしく」

私はそう言って手を差し出したが、星本はそれを払い除けた。

「ほ、星本君……」

「あんたにフェニックスを私物化させる訳にはいかない。このチームは俺の故郷なんだ。それだけは覚えといてくれ」

現役時代を彷彿させるような鋭い目付きで睨みつけてくる星本。私を外敵か何かだと認識しているようだ。

「言いたいのはそれだけだ。失礼しました」

頭を下げて彼は部屋を出て行った。まるで風のように来て風のように去って行ったのだった。

「困りましたな。星本君があんな挑発的な態度を取るとは……」
オーナーが心配気な顔をして呟いた。

「彼は生粋のフェニックスの選手ですから。気持ちはよくわかります。突然、私のような外様が迎えられたら面白くないでしょうし、チームを守りたいと思うのも無理はないでしょう」

「な、何か王嶋さん、嬉しそうな顔をしていますな。早速、問題が起こったというのに……」

「今の星本を見たら、何だか現役に戻ったような気分になりまして。現場復帰するのがわくわくしてきましたよ」

「それでこそ王嶋さんだ。期待してよろしいんですな？」

「任せておいて下さい。やりますよ」

私はオーナーに来期の奮闘を誓ったのだった。

4 回表

監督としての初仕事はドラフト会議だった。自分がくじを引かれた事はあっても引く方は初めての経験、しかも記者会見以来監督として初の公の場への出席とあって、私は少なからず緊張していた。

「よおシゲ、監督初仕事だな」

席上、下川さんいやスターズ下川監督に声を掛けられた。

「下川さん、よろしくお願いします」

監督就任が決まってから下川さんと言葉を交わすのはこれが初めてだった。お互いが監督という立場での接触到、何ともいえぬ緊張感を覚えた。互いが一軍を率いる将として向かい合う事で、身震いするような感覚が身体の奥底から湧いてくるのだった。

「おう、容赦しないからな、覚悟しておけよ」

そう言うつと下川さんは手を振り、スターズのテーブルへ向かった。それを見て私も『新潟フェニックス』の札が置かれたテーブルに就いた。

「いよいよですな。どうです、初仕事の気分は？」

先に席に就いていた熊沢オーナーが言う。

「緊張しますね」

「頼みますよ、現役時代の勝負強さをここでも見せて下さい。何としても酒井君を取りたいですからね」

「ええ、頑張ります」

酒井とは今年の高卒目玉ルーキーで、数球団が指名すると噂されていた。夏の甲子園大会において全試合を完封で優勝し、高校生ながら即戦力として注目される逸材なのだ。何よりも体格が高校生離れしていて、195cmの長身にがっしりとした上半身は、下手な大卒の投手よりも身体が出来ている。その長身から投げ下ろすMAX155km/hの剛球と高速スライダーは高校生のレベルで打てるものではなかった。

この酒井に何球団が競合するのかわからないが、彼の指名権を獲得するのが私の初仕事だった。幸いにも酒井は「指名されればどこの球団でも行きます」と明言しており、交渉権さえ勝ち取ればフェニックスに来てもらえるのは間違いなかった。来シーズンから監督となる私にとっても、絶対に欲しい選手であった。

会議が始まった。司会が「第一回選択希望選手……」と各球団の指名を読み上げていく。何と、酒井を指名したのは我々を入れて八球団にも及んだ。全球団の一位指名が出揃ったところで、抽選が行なわれる。酒井を指名した八球団の監督が席を立ち、抽選箱の前に集結した。

「シゲ、早速対決だな」

東京スタース下川監督も抽選者の中に混じっていた。その言葉通り、早くもSO対決の番外編が勃発したのだった。

往年の名選手であった監督の面々が順にくじを引いていく。下川さんが引き、最後に私の番が回ってきた。残ったくじを引くだけなのだが、勝負している気分は抜けなかった。

「それでは一斉にお開けください」

司会の声が会場全体に響き渡り、皆が封を開く。私も周りの動きに合わせて開封した。中に折り込まれた紙を開くと、そこには「選択確定」の文字が！

「よしっ！」

私はあの引退試合のサヨナラホームラン以来なかった大きな興奮を覚えていた。勝負に勝った。監督としての初仕事を飾れた事に、身体が高揚していた。

「王嶋さん、ありがとう。やってくれると思っていましたよ」

熊沢オーナーも手放して喜んでくれていた。期待に応える事が出来て満足だった。

その後の指名も当初の予定通り、順調に進んだ。三位指名でも他球団との競合になったが、くじを引き当て交渉権を獲得した。

「シゲ、さすがの勝負強さだな。だが本番では負けないぜ」

帰り際、下川さんがそう言ったように、私は初仕事を満点で終える事が出来たのだった。

一位指名の酒井にはすぐに球団が指名の挨拶をして、好感触であったとのこと。当日見たTVでも彼はフェニックス入りに前向きな姿勢を見せており、ひとまず安心した。

翌日、私はすぐに動いた。球団に早々に契約条件を決めてもらい、自ら酒井を訪ねるつもりでいた。熊沢オーナーと直々に話し、契約金一億二千万、年俸九百万の条件を片手に愛知にある酒井の自宅へ向かった。

「こ、これは王嶋監督！まさか監督自らいらつしやるとは……」

驚く酒井の父。邸内へ通してもらう前に、私の現役時代大ファンだったという話を聞かされた。

居間へ通された私は、酒井と初対面した。やはり高校生離れした体格の持ち主だ。フェニックスのエース吉田もいい体付きをしているが、それに優るとも劣らない体格である。今すぐにプロで通用するという触れ込みも嘘ではないようだ。

「やあ酒井君、指名させていただいた新潟フェニックス監督の王嶋です。よろしく」

「王嶋監督、ずっとファンでした。まさか入団交渉の場に来てもらえるとは思っていませんでした、感激です」

そう語る酒井の表情は確かに何処となくあどけなさが残っており、高校生である事を納得させられた。マスクも凛々しく、間違いなくスターになる要素を兼ね備えていた。

「単刀直入に言います。この条件でフェニックスに入団していただけませんか？」

私は契約条件を書いた紙を見せた。すると酒井は大して目も通さず、

「お世話になります、よろしく願います」と返答してきた。

「えっ、契約条件をよく見てないようだけどいいのかい？」

「ええ、何処の球団でどんな条件であろうと、ボクの目標はプロでした。その上、王嶋監督自ら来ていただいただけで充分です。ですからお世話になります」

一礼する酒井。私はその手を取り、両手で包み込むように握手をした。何と気持ちの良い青年であろう。私が監督となつて一人目の新兵卒が、それも頼もしい戦士が加わった瞬間であつた。

翌日の朝刊の一面は各紙が「酒井、王嶋詣ででフェニックス入り即決！」といった見出しで騒いでいた。

ドラフトも一段落し、次の仕事は秋季練習の視察だつた。ここで全選手の力量を把握するつもりだつた。技術・体力は勿論、選手のやる気も含めて。

フェニックスの秋季キャンプは毎年、熊沢オーナーが広大な土地を所有する伊豆で行なわれている。今年は若手からベテランまで全選手が参加していると耳にして、選手のやる気を感じて嬉しく思っていた。普通ベテランはシーズンの疲れを取る為にも休んだりするのだが、やはり監督が替わるという事で奮起したのだろうか？

グラウンドに足を踏み入れた瞬間、忘れ掛けていた高揚感が身体の奥底から沸き上がってくるのを感じた。そしていても立ってもいられなくなり、私は選手のランニングの列に加わった。

「あつ、監督」

「お、おはようございます」

皆、突然の私の所業に驚いたようで、呆氣に取られた表情のまま走り続けていた。

「やっているな。だが、この時期、あまり飛ばすなよ。身体慣らしとボールの感触を掴む程度でいいんだから」

私は選手の張り切っている様に危惧を抱き、注意を促した。

「はい」

「よしみんな集合だ。監督がいらっしゃったんで挨拶していただ

こう」

今季、主将を務めた四番の西沢が号令を掛ける。すると散らばっていた選手達が軍隊のように集合した。

「監督、お願いします」

西沢にお膳立てされ、私は選手の前に立った。居並ぶ男達を前にして、ようやくフェニックスの監督になった実感が湧いてきた。

「みんな、おはよう」

「おはようございます」

「来季から監督を務めさせてもらう事になった王嶋です。よろしく」
「よろしくお願いします」

先程から挨拶する選手の声が揃っている。良く統率が取れているのがうかがえる。二位に入ったのもダテじゃないようだ。

「まあ、詳しい抱負や考え方は春のキャンプで話すとして、先程も言いましたが、この秋季練習では身体を慣らすのとボールの感触を掴む事、これを意識してやって下さい。私はずっと皆さんの様子を見ているんで、何かあれば遠慮なく聞いて下さい」

「はいっ」

「よし、じゃあ練習再開だ」

西沢の声が再び掛かると、選手は蜘蛛の子を散らすように離散した。

再開直後、選手はきびきびと動きだしたが、まもなく私の周りに殺到し始めた。

「監督、スイングの軌道が定まらないんですが、どうしたらいいんでしょうか？」

「どうも内角球に差し込まれます。どうやったら良くなるんでしょう？」

「送球が安定しません。何かコツはないでしょうか？それとも何処が悪い癖でもあるんでしょうか？」

などと、選手が個々の悩みを持ち込んでくるので、全員の視察をする筈が、野球教室みたいになってしまった。

ただ、ここで昨年の勉強が生きた。選手の相談にも明確に答え得る材料が私の中に出ていたのだ。一人一人見てやったので時間は掛かったが、その分皆が納得顔で己れの練習に戻って行く様子が自分でもわかった。こういうのは嬉しいものだ。指導しながら、

「ずっと尊敬してました」

「ウチのチームの監督になるなんて感激です」

などと、目を輝かせながら言われると恥ずかしくもなった。

結局、最後まで私の周りに選手が群がり、遠目に全員を視察する当初の目的は達成出来なかった。ただし、その分選手個人をよく見る事が出来たので、まさに怪我の功名であった。この日だけで各選手の特徴や性格的なものまで、垣間見られたのは大きかった。

一番バッター俊足好打の吉原は運動神経はいいが神経質である、エース吉田は速球を投げ込む才能は凄いが気分屋で頭を使うのが苦手であるなど、傍目からはわからなかった事が身近に接してみてよくわかった。私としても、出来る限り選手とのコミュニケーションを取ろうと考えていた矢先の事だったので本当に助かった。

こうして秋季キャンプに毎日顔を出し、全選手を頭にインプットした。その内の何名かは今まで使われなかったものの、高い潜在能力を秘めている事がわかった。私は秋季キャンプ中はあえて何も言わず、聞かれた事に答える以外は選手の自主性に任せた。従って、そういった埋もれていた選手達へも特別に指導したりはしなかった。全ては春のキャンプが開始してから、そう心に決めていたのだ。

私の見たフェニックスの選手の印象はよく言えば素直、悪く言えばお人好し過ぎる、という感じであった。人の話を聞く姿勢はとても良い。だが、そこからの発展が今一つ見られないのだ。例えば、東京スターズというチームに対してのライバル心がとても低い。球界の盟主であるスターズに対し、畏敬するような気持ちを持っている選手が多いのだ。その看板選手であった私に対しても必要以上に遠慮する仕草が見られた。星本のようにスターズを敵として認識し、立ち向かっていく闘争心を植え付けなくてはならない。自分も

含めてキャンプではその姿勢を貫くつもりだったのだが……

4 回裏

年末に差し掛ったある日、自宅で家族と共に静養していた私の元に一本の電話が掛かってきた。それは

「シゲ、これから会えないか？監督として相對する前に、どうしても話したい事があるんだよ」

と言う下川さんの誘いだった。そういえば日本シリーズ前に監督就任を電話で伝えた際、「話したい事がある」とおっしゃっていたのを思い出した。もはや敵対チームの監督同士となった二人が仲良く会食している姿を見られる訳にもいかないので、わざわざ変装までして、とある料亭に向かった。

座敷に通された時、既に下川さんは胡坐を掻いて待っていた。酒や料理も運ばれていたが、一切手を付けている様子はなく、いつになく厳しい表情でじっと座っていた。

「来たか、シゲ」

「遅くなりました」

「いや、俺が早く来たんだ。まあ座れよ」

「はい、失礼します」

と言って私は下川さんの正面に座った。

「改めて監督就任おめでとう」

「ありがとうございます。一生懸命やるつもりです」

「とりあえず食べるとうしよげ、ほれ」

下川さんが徳利を持ち、勧めてくる。言われるまま、お猪口に注いだ酒を飲み、料理に箸を延ばす。同様に下川さんも飲食を始めるが、それからは押し黙って一言も発しなくなった。私は何とも言えない重苦しい雰囲気を感じていた。下川さんが人を呼んでおいて何も言わないなんて珍しい。そんなに大事な話なのだろうか？

かといって自ら切り出す気にもなれなかった。沈黙の下川さんはペナントレースを戦っている時のような迫力があり、口を出すのも

憚られた。二人向かい合って黙々と料理を食べるしかなかった。

「なあ、シゲ」

料理も半ば、不意に下川さんが呼び掛けてきた。

「は、はい」

「お前、まだスターズの監督をやりたいと思っっているか？」

「はい、思っています」

唐突な質問に驚かされたものの、正直な胸の内を答えた。しかし次の質問はもつと驚くものだった。

「じゃあこれからフェニックスの監督をやるのと、将来スターズの監督になるのではどちらが大事だ？」

真剣な顔でこちらの表情をうかがう下川さん。返答次第では切れかねない侍のような迫力がそこにはあった。

「そ、それはどちらも大事です。当面はフェニックスを監督として率いる訳ですし、スターズの監督になるのは最終的な目標です」

「ふん、そんなのはわかってる。俺はお前にとってどちらが大事かと聞いているんだ」

「そ、そんな……、比べようがありません……」

「本気でそう言ってるのか？それじゃ俺が死ぬまでスターズ永久監督でもいい訳だな？」「そ、それは……」

何故こんな事を尋ねられるのか合点がいかないが、何となく下川さんが私に「スターズの監督をしたい」と言わせたいのはわかった。この密室裁判の如き状況から逃れるにはそう答えるしかないようにも思えた。

「どうなんだ？」

「それは困ります。私もスターズの監督になりたいです」

「だろう。今日呼んだのはその事についてだ。お前が将来、俺の跡を継いでスターズの監督になれるかどうかのな……」

下川さんの不可解な一言。私が将来スターズの監督になる為に何か条件があるというような口振りである。

「お前、ウチの球団が何故フェニックスに入るのを許したと思う？」

「将来的な指導者としての勉強の為だと……」

「それは勿論そうだが、他にもあるんだぜ」

「そ、それは……」

「その前にもう一度聞く。お前、本気で将来はスターズの監督になりたいと思っっているんだな？」

下川さんが何度もこの問いを繰り返す理由が解せない。まるでスターズへの忠誠心でも確かめているような……

瞬間、閃いた。下川さんが何を話そうとしているかが。信じられない事だが、今までの話振りだと、そうとしか思えない。

「下川さん……」

「どうした？」

「私にスパイをしろと、言うんですか？」

私は思いついた事をそのまま言い放った。

「ぬ……」

下川さんの顔が曇る。

「そうなんですか？」

「ふっ。ふはははは」

「下川さん！」

「ふはははは。シゲ、大した洞察力だな。スパイとは聞こえが悪いが、まあそんな所だ。ウチとの試合に負けるとまでは言わんが、サインだけ全て教えるという事だ」

あっさりと企みを曝け出す下川さん。しかし私にはそう簡単に受け取れる事態でもなかった。

「そ、そんな……」

「ウチの球団は最初からその腹積りだったのさ。お前をフェニックスに送り込んで、指導者として育成すると同時に、チームを丸裸にするってな」

「ほ、本気で言ってるんですか？」

「ああ、本気も本気。冗談でこんな事を言うか？」

「球団がそんな事を考えていたなんて……」

「気持ちわかる。もしお前が拒否するならそれはそれでいい。この話はご破算になる。その代わり、お前はスターズの監督にはなれなくなるという訳だ」

何という目茶苦茶な話であろう。憧れだった監督の座を掴む為に、フェニックスに対して背信行為を働かせようとは……

私は迷った。超満員のファンに引退式で誓った監督宣言、幼い頃からのチームへの愛着（こんな事をする球団でも、試合をするチームは違うと私は思っていた）、目の前の下川さんの異様な迫力、なごに心は揺れに揺れた。何より、再びスターズのユニフォームに袖を通して大観衆の前で試合をしたい気持ちは何物にも代えられなかった。だが、

「たとえスターズの監督になれなくとも、不正には手を貸せません」ときっぱり申し出を拒絶した。

「そうか……」

「下川さん……」

黙りこくった下川さんの様子を見て、私はこの話はこれで終わるものと思っていた。だが、

「ところでシゲ、亜紀子さんは元気か？」

と突拍子もない発言が飛び出してきた。

「な、何を……」

「子供は三人だったか？可愛い盛りだろうなあ？家庭も円満だろうに……」

と言つて下川さんはにやりと笑った。そして指を鳴らすと、襖を開いて三人の黒服の男が姿を現した。奴らの手に何か黒光りしている。銃だ。

「そ、そんな……」

私は啞然とした。そして同時に恐怖した。下川さん、いやスターズは家族の命を人質にしようと言うのか。

「シゲ、どうするよ？本当にやらないのか？」

この時ばかりは下川さんの顔が悪魔のように見えた。もう十年以

上も付き合っているのに、今まで一度も見た事のない姿だった。

返事を待つてくれそんな気配はない。場合によっては本日中に私や家族の命すら危ぶまれる状況に、Noという選択肢は残っていないようにも思えた。

「わかりました……、やります」

私は恐怖に負けた。止むを得ず承諾するしかなかった。SO対決はこの時点で早くも決着が着いてしまったと言っても過言ではなからう。一瞬、熊沢オーナーや星本の顔が頭をよぎったが、それを振り払って要求を飲んだ。

「おお、そうか。そう言ってくれると思っていたぞ」

喜ぶ下川さんは、早速合図をして黒服を部屋から下げた。それを見てようやく私も安堵した。

「いやあ、めでたい。よし乾杯だ」

下川さんは上機嫌になつてかなりの勢いで酒を呷っていた。対称的に私はいくら飲んでも酔えず、自己嫌悪に陥ったのだった。

十一時頃、料亭にタクシーを呼んでもらって、私達は別々に帰った。自宅へ向かう車に揺られながら、私は今夜の事を頭の中で整理していた。スターズ球団が八百長にも等しいスパイ行為を推奨していた事は少なからずショックであった。同時に過去の勝利の数々も疑わしいものになってくる。下川さんは「サイン破りの達人」と言われているが、ひょっとして同じような方法によって、あらかじめ相手チームのサインを知っていたのではないだろうか？そう思うと、今までの栄光が皆偽りのように色褪せてくる。引退試合でのサヨナラホームランでさえ、下川さんの助言から出たものだ。己れの所業の全てが否定される気がして、沈んでいくばかりであった。

あの脅迫行為を訴えるという手段もあるだろう。ただし、同時に私の過去の栄光が全て崩れ去るのは間違いない。下川さんやスターズのやり方が明るみに出れば、今までの私の活躍だって正当な行為の上の成績ではなかったとみなされるだろう。そこまでして正道を貫く勇気はなかった。

それ以前に証拠もない以上、脅迫の事実を信じてもらう事すら出来ないかもしれない。テープに録音でもしてあれば別だが、当然そんな用意はしていない。一番良いのは熊沢オーナーに話す事だろう。だがその方法も、先に言ったように自分の過去に大きな傷跡を刻むのは間違いない。どう足掻いても八方塞がりだ。

それからの数日間は何をするにも気力が湧かず、家で自墮落的に過ごした。さすがに家族は様子がおかしいのに気付き、妻を始めとして皆で心配してくれたが、理由を話す訳にもいかず、空元氣を出して誤魔化す他なかった。フェニックスの監督就任を決めてからはやる氣に溢れていたのに、突然元氣がなくなれば周りが変に思うのも当たり前である。

「パパ、元氣ないね」

などと五歳の克典に言われた時はさすがに堪えた。

だが勿論、自分の選択が間違っているとも思わなかった。何といつても愛する家族の命を犠牲には出来ない。スターズの監督をやりたいという願望も少なからずある。ただ、道徳的に反する行為をしてまで将来のスターズ監督の座を選び、フェニックスを裏切ってしまった自分が嫌になるのだった。かと言ってあの状況下で選択を避けられるものでもなかった。しばらくは悶々として過ごさざるを得ないだろう。

そして十二月三十一日、大晦日の晩、近くの寺で突く除夜の鐘が我が家にも響いてきていた。子供達は「いち、にーい、さーん」などと数を数えてはしゃぎ回っていたが、私はそれを重苦しい氣分で聞いていた。ゴーンという音が一回鳴る度、自分の身体が鐘突きに突かれている氣がした。いっその事、百八回叩かれて罪を清算出来るのならどんなに楽な事か……。重く見えない十字架を背負いながら、私は年を越した。

5 回表

年が明けた。昨年、いや昨晩で私は自己嫌悪を振り払ったつもりだった。もはや考えても仕方がない。下川さんにはサインを教えるとしても、如何にしてフェニックスを強くするか、それを模索する事に集中すべきだと気付いたのだ。極端な話、スターズ以外に全て勝ち越せば優勝も夢ではない。下川さんにだって優勝するなんて言われていない。まさかやる事を行ったのに家族が殺されるなんて事はなかるう。何とか熊沢オーナーの悲願を果たす為にも、やるしかなかった。サインを横流しするからといって、その気持ちだけは変わらない。

私は正月返上で優勝への方策を考える事に没頭した。秋季練習で見た選手の特徴をデータとして整理し、勝つ為に何が必要かを追求した。ポジション、打順から投手ローテーション、コンバート案まで、現時点で考え得るフェニックスの最高の状態をキャンプ前に手にする為、紙と格闘した。勿論、キャンプで実際に選手を見て考えが修正される事は多々あるだろうが、今から準備するに越した事はない。

「あなた、今から無理をして身体を壊さないようにね」

と妻に言われたくらいだから、相当根を詰めてやっていたのだろう。スパイ行為の嫌悪感や家族の命の危機を忘れる為にも無我夢中で何かに取り組みたかったのだ。

門松も取れ、選手達が各々自主トレを開始したというニュースが続々と耳に飛び込んできた。フェニックスの選手は皆、早い時期から精力的に動いているとの情報を聞き、秋季キャンプの意気込みは嘘ではなかったと安堵したものだ。テレビでその様子を見ても澆刺とした姿が伝わってきて、期待が持てた。特に主力選手はいい動きを見せているようで、構想も固まってきた。

二月一日のキャンプインが迫ってくると、私にテレビ出演の依頼

が殺到した。とりあえず各局のスポーツ番組には一通り出演し、バラエティーの類は全て断った。何処でも同じような質問をするのは相変わらずで、

「秋季キャンプで見たチームの印象は？そしてどの選手に最も期待しますか？」

「下川スターズに死角はありますか？」

「一年目ですが、目標は？」

などといったものが中心だった。私は毎回同じように答えた。

「チームは若い選手が多く、まだまだ伸びる要素を持っていると思います。期待する選手は全選手です。誰もがレギュラーになるチャンスがあるので頑張つて欲しい」

「スターズに死角はありません。というか敵云々より自分達が強くなる方が重要だと思っています。勿論、スコアラーから来る他球団の情報は活用しますが、どこが相手でも動じないような力を付ける事を目指します」

「目標は当然優勝です。何処に優勝を目標とせずにペナントレースに臨む監督がいるでしょうか？優勝する気がない時点で、そのチームは脱落していますよ」

ただ、やはりスターズ関連の質問が来ると、内心穏やかでなかった。あの時の下川さんの顔が頭をよぎり、緊張感が全身を包んだ。嘘発見器でも使われたら、針が大きな揺れを示した事だろう。そして後から録画したテープを見ると、大嘘吐いてブラウン管の中に映っている自分の姿は別人の如くとても醜くかった。

そんな中、大体のチーム構想はまとまった。勿論、テレビでも言った通り、誰にでもレギュラーになるチャンスを与えるつもりだし、あくまで現時点で考えられる最強の布陣でしかない。しかしまともに機能すれば、充分に戦える布陣でもあった。

まずレギュラーの打順とポジションだが、一番はセンター吉原。彼は俊足好打で、トップバッターそして守備範囲の広いセンターに適任である。昨シーズンはライトをしていたが、センターへコンバ

ートするつもりだ。バッティングはいい当たりをするのだがフライを打ち上げる癖があるので、そこを矯正して一番としての役割を果たさせたい。秋季練習では、調子が悪くなると悩んでしまうような少し神経質なところも気になったので、メンタル面でも指導していると思う。

二番はセカンド殿村。守備も巧く、犠打もきっちりこなす職人気質の選手。ベテランなので走力が衰えてきているのが難点だが、それを差し引いても十分通用する。性格も真面目なので非常に扱いやすい男である。

三番はライト新外国人ジョーンズ。まだ実際に見ていないので何とも言えないが、球団が三億円も出して取った現役大リーガーだ。広角打法でなおかつ一発もあるという。ビデオを見た限りでは大きな穴もないようで、日本野球に馴染んでくれさえすれば期待出来そう。

そして四番キャッチャー西沢。昨シーズンホームランを二十七本打っているが、私が見たところ、四十本は打てる逸材だ。ただ、彼には致命的な欠点がある。キャンプではそれを克服させたいと思っている。キャッチャーとしても相手の裏をかくような大胆なリードが持ち味なので、ここに細心が加われば、守備の要として大いに期待が持てる。

五番ファースト山下。昨シーズンの彼はホームランこそ十六本と少なかったが、打点が98と多い。まさに「塁上の掃除人」という言葉が似合う選手である。負けず嫌いでそれをうまく生かして緊張感を楽しむタイプだ。非常に勝負強いのも頼もしい限り。

六番ショート須藤。下半身が強いのか、馬力のある打者だ。打率は低いがホームラン二十三本は立派な成績である。守備に粗さがあるが、目をつむるしかあるまい。大雑把な性格がそのまま出ている選手だ。

七番サード丸山。守備は抜群にうまい。二年連続ゴールデングラブ賞を受賞している。バッティングに関しては一番の吉原同様、フ

ライを打ち上げてしまう事が多い。足もあるのだから、叩きつけて内野安打でいいから出塁する心掛けをしてもらおうよう、指導していく必要がある。率を求める堅実タイプの選手割には性格が大胆で、ファインプレーが多いのもその辺に起因すると思われる。

八番レフト富樫。可もなし不可もなしといったタイプの選手。何でもそこそこなすがこれといった長所もない。だが、他の選手を使うよりはいい。したがってここはある意味空いている場所と言える。キャンプで競い合ってルーキーでも出てきてくれれば嬉しいのだが。

ピッチャーに移ろう。先発は五人。エース吉田はずばらな性格をしているが、才能はとてつもないものを持っている。コンスタントに150km/h以上出るキレのある速球はメジャーリーグでも通用するだろう。落差のあるフォークも持っているので、ムラっ気のある性格による好不調の波さえ何とかなれば十五勝以上は計算できる先発の軸である。

畑田は速球は130km/h程度しか出ないものの、多彩な変化球と絶妙のコントロールで打たせて取るピッチャー。コントロール重視の投手に必要な細心さも持ち合わせているので安心出来る。星本の指導の元、昨シーズン十二勝したのもフロックではない。

嘉藤は左腕の変化球投手。速球こそ140km/h前後だが、大きく落ちて曲がるカーブはわかっていても打ちづらい球として有名だ。ただ、性格的に弱い所があるのと、それに伴いコントロールに自信がない欠点を持つ。昨シーズン、四球を連発して十一敗しているのもその辺によるものと思われる。性格的に強い面が出てくれば、ローテーションの一角として十分に信頼出来る素材だ。

そして新外国人のウィルソン。彼もジョーンズ同様、球団が大枚をはたいて呼び寄せた助っ人だ。投げた者も何処へ行くかわからないナックルボールの使い手で、大リーグでも三年連続二ケタ勝ち星を稼いでいた実績ある投手だ。ただ、キャッチャー泣かせという情報も入っており、実績があるのに日本へ来たのはメジャー各球団が

敬遠したからとも言われている。事実、彼のナツクルでキャッチャーが三人病院送りになっているという。ここでも西沢に大きな期待が掛かってくる。

実際、期待できる駒はこの四名で、後のピッチャーは伸び悩んでいるのが実状だ。そこで私が考えているのが、ドラフト一位指名で獲得した酒井の起用である。彼はMAX155km/hを投げる剛球左腕。甲子園で活躍した事もあり試合経験も豊富で、私としては高校生ルーキーながら即戦力として期待を寄せている。

ここに中継ぎの増本、抑えの守護神山田が控える。二人共、サイドスローの変則的なフォームをした投手で、打者のタイミングをズラすのが上手い。特に山田の方は速球とフォークという抑えの必須球種を備えており、九回に彼に繋がれば勝てる必勝パターンを作れると踏んでいる。彼ら二人は星本の指導の元、昨シーズンから頭角を現わした。これも彼のコーチングの賜である。

私の腹案はこんな所だが、勿論故障者が出るかもしれないし、他にいい選手が出てくる可能性もある。あくまで現時点での理想であり、キャンプでこれ以上のチーム作りを目指すつもりだ。ただ、最低限この理想には到達させなくてはならない。さもなくば優勝という大目標へ辿り着くのは無理に等しい。それでなくてもスターズ戦での勝ち星は計算出来ないのだ。少なくともそれ以外の球団と五分以上に戦える力を付ける必要がある。

そんな私の案を持って、コーチとのミーティングの日を迎えた。星本を始めとしたコーチの面々が、レギュラー構想を食い入るように聞き入っていた。全てのコーチが私の腹案を聞いて、同意の姿勢を示していた。ただ一人を除いては。

「星本君、先程から何も言わないが、何か考えでもあるのかい？」
私はその男、星本に意見を求めた。

「大したもんだよ、今からそこまで考えていた事には敬服する。ただ……」

「ただ……？」

「酒井の起用に関しては反対だ。あいつはまだ高校生だぜ。一軍帯同はともかく、即ローテーション入りなんてさせたらぶっ潰れてしまう」

「それは、私が彼の身体的特徴を見た上で大丈夫だと判断したんだ。君だって彼の肉体を見ただろう、潰れるような身体か？」

「見かけは良くなったって、まだ十八のガキだ。プロの戦士の肉体じゃない。それに何より経験が足りない」

「甲子園で場慣れはしているさ。度胸もあつたじゃないか」

事実、酒井は甲子園において無死満塁のピンチを二度も切り抜けている。

「高校野球とプロは違う。とにかく俺は反対だ」

あくまで譲らない星本。このままでは埒が明かない。

「わかった。じゃあキャンプを見て判断しよう。勘違いしないでくれ、今言ったのは構想に過ぎないんだ。実際のキャンプでどう転ぶかは選手次第だから」

「ああ。そうさせてもらうよ」

まくしたてるように話していた星本も、それでようやく落ち着いて席に着いた。さすがに熱くなる男だ。この星本とうまくやっていければ優勝も近付いてくるのではないかと思う。それだけの力を持っている男であり、投手陣の信頼も厚い。スパイの後ろめたささえなければ、もつと腹を割って話せるだろうに。いや、それを差し引いても、星本との連携は必須課題であると言えた。

結局、酒井の問題はキャンプへ持ち越しとなり、それ以外の事は大体、コーチの賛同を得た。あとは実際のスケジューリングや練習内容について話し合い、キャンプの方向性がほぼ決まった。

全体の練習時間は若干短縮して四時間弱で、ウォーミングアップなどは個人の自主性に任せるメジャー式を採用した。やはり自己管理が出来ない者にプロたる資格はないと、私は思うのだ。選手はある程度身体を作ってくるだろうし、始まってからも如何に自分を律せるか、そこを見たい。そうする事で、全体練習を行うキャンプを

より実戦の場として考えてもらいたいのだ。これにはコーチ全員の賛同を得る事が出来た。

例のスパイ行為はこういった場で重い十字架としてのしかかってきた。優勝しようという気持ちは偽りない。それでもスターズにサインを供給する悪事に加担する以上、話し合いをしても常に後ろめたさが付きまといつてくる。こんな調子で一年間やっていけるのかどうか、不安にもなった。

そんな私の重苦しい気持ちもよそに、今年のチームスローガンは「Go to the championship!」に決まり、いよいよキャンプへ乗り込む。

5 回裏

一月三十一日、我ら新潟フェニックスはキャンプ地である宮崎県宮崎市入りした。驚いたのは市民の歓迎振りだ。後で聞いた話だが、例年にない騒ぎで昨年の三倍以上の二千人近い人が来たらしい。

「王嶋監督フィーバーですな」

宮崎市長にそう言われ、恐縮した。とはいえ確かに私への声援は多く、やたらと名前を叫ばれ、周囲を囲まれ触られた。嬉しくない事はないが、私が選手以上に注目を浴びるのは何か間違っているようにも思えた。これで球界が盛り上がってくれるのであれば、それに越したことはないが。

歓迎を受けた後は宮崎神宮へ行き、必勝祈願をした。代表として神の御前に立った時、己れの罪深さに気まずい思いがした。必勝祈願といいながら、それに反する行為をしている自分が恥ずかしかった。神だけは全て見透かしている筈で、それを思うとこの場にいる事すら辛い。そして私や家族を救って欲しいと祈るしかなかった。

そんな姿を報道陣に取材されるのがまた堪えた。私はインタビューの一切を断り、

「結果はグラウンドで見せます」

とだけ言った。傍らでは口の重い私に代わって、星本や他のコーチが意気込みを語っていた。

宿舎に入った我々は、早速全体ミーティングを開いた。まず私が全員の前に立つて、意気込みを述べた。

「改めて紹介させてもらいます。今季よりこのチームを率いる王嶋です。よろしく」

「よろしく願います」

秋季練習時の息の合った様子は変わっていない。私は安心して言葉が続けた。

「今年の目標は勿論、優勝です。選手諸君にはそのつもりでいて欲

しいし、その力はあると私は思っている。だから当然その目標達成の為の練習をする。厳しくなるとは思うが、くらいついてきて欲しい。私は監督としては未熟だが、諸君より優勝という経験は知っている。是非、あの気分をみんなにも味わってもらいたい」

「はいっ」

それから練習時間や練習内容を全員の前で説明した。メジャー式の自主性尊重姿勢は選手も概ね歓迎のようで、称賛の声が揚がっていた。その後もコーチから諸注意や心構えなどの話が続いた。約三十分の後、

「じゃあ本日はこれで解散。明日から頑張っていこう」

「オッス」

私の解散の号令で、選手が散り散りに部屋を出て行った。

ここで私は驚かされた。主力選手のほとんどが、キャンプ前日にもかかわらず練習場へ向かったのだ。自覚を促したとは言ったが、心配する迄もなかった。選手は私の掲げた目標、ひいては自分達の夢である優勝を本気で目指そうとしている。最低限必要不可欠な気持ちや意志は、昨年から充分に養われていたのだ。特に気分屋のエース吉田がブルペン入りして五十一球投げ込んだ事には、やる気を感じてグッとくるものがあった。

そして二月一日、監督として初の春季キャンプが始まった。宣言通り、早朝から十時までは練習を強制しない。しかし全ての選手が八時にはグラウンドに出て、ウォーミングアップを開始していた。私とて当然寝ている筈もなく、グラウンドへ出た。ユニフォームを着ると、やはりじっとしてられない。選手に混じってランニングや体操を一緒にこなした。

「監督、おはようございます」

相変わらず選手の統率は取れている。皆が自然と集まり一礼してきた。

「いいから、自分のメニューを続けたまえ。私も一緒に身体を動か

そうと思ったただけだから、気にせず自分のペースでやってくれ。全体練習までは何も口は出さないからね。もし何か聞きたければ、遠慮なく聞いてくれ」

私の言葉を聞いて、選手は各々ランニングする者、体操する者、キャッチボールを始める者、と分かれていった。私はゆっくり走りながら選手の動きをちらちらと見た。皆、なかなかいい動きをしている。自主トレ期間中に実戦に入れる身体を作ってきている事がうかがえた。

「監督っ」

そんな時、一人の選手から声が掛かった。

「やあ、酒井」

「これからよろしくお願いします」

酒井はランニングを止め、私の元へ来た。

「ああ、期待しているからな、頼むぞ」

見たところ、酒井は入団発表会見の時からまた一回り大きくなったような気がした。太ったのではなく、より筋肉質になった感じが「頑張ります。監督と野球が出来るなんて夢みたいですから」

「くすぐったくなるような事を言うなあ。でも実際にプレイするのは君達選手だからな。私は指揮する立場に回ってベンチにいるだけだ」

親子ほども年の違う青年に憧憬の念を抱かれて嬉しくない筈がない。私は内心照れていた。

「でも、監督に教えていただけるだけで嬉しいんです。ずっとファンでしたから」

「ふふ、しかし今や監督と選手という立場だ。私は君の見ていた、いい面だけの人間じゃないかもしれないぞ」

「監督は結構意地悪ですね。けど、監督がどんな人であれ、ファンだという事には変わりはないですから」

「ありがとな。じゃあキャッチボールでもするか？アップは済んだのか？」

「ええつ、キャッチボール？やりますやります。すぐにアップを済ませるんでお願いします」

慌ててランニングを続ける酒井。私は彼の相手をする為にグロブを取りにベンチに戻った。

「監督よろしくお願いします」

十分もすると酒井はウォーミングアップを終え、グラブを携えて私の前に立っていた。

「よし、まずは軽くいくぞ」

私は久しぶりのボールの感触を確かめるように直球の握りをする、軽く放った。ランニングや水泳など、身体を鍛える事はしていたが、ボールを握ったのは十月に長男一茂とキャッチボールをして以来だった。

「感激です、王嶋選手とキャッチボールできるなんて……」

私の投げた球を楽々捕球しながら酒井が言う。そして力を抜いたような柔らかいフォームで投げ返してくる。

「バカ言っつな、もう選手じゃない監督……」

言い掛けた言葉を噤む程、大きな衝撃が手から全身に走った。軽く投げたであろう酒井の球が、砲丸投げの鉄球のような響きでもってグロブに飛び込んできたのだ。

「さ、酒井、お前軽く投げているんだよな、今は？」

「え、ええ……」

「ならいいんだ……。続けるぞ」

私は何事もなかったようにキャッチボールを続けた。いたずらに球質が重いなどと言って、彼を調子に乗らせても困るからだ。それに朝から詰め掛けている報道陣の注目を浴びるのもマイナスだ。それでなくてもゴールデンキー酒井と私のキャッチボール姿は、望遠ながらカメラを向けられていた。余計な情報をわざわざ他球団に流す事はない。

このキャッチボールを経て、今まで以上に酒井のローテーション

入りを真剣に考えるようになった。軽く投げてこの球威ならば、本気で投げ込めばバッターが外野へ飛ばす事さえ難儀な球になると予測出来る。少なくとも過去にキャッチボールをした投手でここまでの球質を持つ者は、二人といなかった。高校生レベルでは打てない訳である。星本が何と言うかはわからないが、私は赤く腫れた自分の手を見て、順調に調整が進みさえすれば酒井をローテーションの一角として推していく決心が固まった。

十時になり、ようやく全体練習開始の時刻となった。選手は既に汗を流し、いつでも練習に入れる状態となっていた。見ていた限りでは、誰一人手を抜く事無く自らを鍛えていた。

「よし、集合」

私は一度全員をグラウンドの真ん中に召集した。そして皆が集まってきたのを見て口を開いた。

「今日からキャンプを始める訳ですが、前々から言っているように、今季の目標は優勝です。それを踏まえて各自自覚を持ってプレイに取り組んで欲しい。それだけです」

「はいっ」

「それじゃ、まず全員でバント練習から始める。投手も一緒だ」

まずは全体練習らしく、チームプレーの代表格といえるバントから始める事にした。戦法的にあまり好きではないが、勝つ為に必要な技術である。投手も入れたのは、連帯感を煽るのと、昨年ランナーがいながら投手のバント失敗機会が多かったからだ。この時、毎日練習の始めはバントから行くと皆に通達した。

確かに下手な選手が多い。ラスト四球連続成功で終わるやり方にしたが、なかなか抜けられない選手が十名以上もいた。残った選手には、直々にキャンプ中での上達を目指すようにと勧告した。

約一時間、バントをした後は投手はブルペン、野手は内外野のメジャーに分かれてティーやフリー打撃か守備練習。私も早速ブルペンに足を運んだ。

ネットの外側にまで、ミットが鳴り響いていた。エース吉田が昨

日に続き早くも投げ込んでいた。自主トレ中から投げていたそうで、既に80%近い出来であった。何より速球の伸びが素晴らしい。実際後ろに立って見たが、ブルペン捕手のミットが浮き上がりそうになる程だ。

「いい感じだな」

私は六十球を投げ込んだ彼に声を掛けた。

「いえ、まだまだです」

汗を拭いながら吉田が言う。

「まだいい球と悪い球がはっきりしていますよ。その差が少なくなつてこないと」

「いや、しかしこの時期にはいいだろう」

「それはそうですが、優勝するならこんなもんじゃ……。俺が二十勝近くは勝たないと。現役から憧れていた監督に恥かせられませんか」

「吉田……」

驚いた。気分屋の吉田がこれ程までに明確な意思表示を示すとは勿論、今日の姿も明日になればどうなっているかわからないのが気分屋の特性だが。しかしこの分なら精神面での指導など必要ないくらいだ。

「監督、俺って現役時代打ち易かったですか？」

「何を唐突に……」

「いや、監督の目から見て、どんなピッチャーだったのかなあって思つて……」

「そうだなあ、ストレートが滅法速い奴だとは思つたよ。いつも真つ向から勝負してくるしな」

「監督には得意な相手でしたか？」

「うーん、力と力で勝負出来るんで、やりやすい相手ではあつたな。ただ、そちの調子がいい時は手も足も出なかったが……」

吉田との対戦成績は、確か私の方が分が良かったように思われる。ホームランも何本か打っている。ただ、彼の球のキレがいい時には

三打席連続三振をくらった事などもよく記憶している。タイプのにも現役時代の星本を彷彿させる男だった。いつも燃える星本、気分屋の吉田という違いはあったが。

「俺、プロ入って監督を抑える事が一つの目標だったんです。だからその人と同じチームになって優勝目指せるなんて、こんなにやり甲斐のある仕事はないですよ」

「嬉しい事言ってくれるじゃないか。期待しているからな、頼むぞ」
「はい、頑張ります」

模範的な回答だ。本気で言っているらしかった。この気分屋がその気になってくれれば（実際その気になった時の力は凄いものがある）、優勝も近付いてくる。

吉田がブルペンから上がると、今度は酒井が投げ始めようとしていた。私も、自分が最も注目する男の投球に、その場を動かずじっと見入っていた。

長身から投げ下ろされる速球は、先程まで投げていた吉田に優るとも劣らない勢いを示していた。しかもまだ力を抜いている感じだ。
「さすがですね」

酒井の投球に目を奪われていた私に、突如背後から声が掛かった。
「オ、オーナー……」

振り向くと、熊沢オーナーが立っていた。

「彼はすぐにも使えそうですか？」

「私はそのつもりです。ストレートだけでも充分に通用しますよ。実は今日の朝、キャッチボールをしたんですが、軽く投げた球に重さがあるんですよ。まともに投げたらかなりの球威でしょうね」

「それは良かった。あれだけ期待されている選手だ、活躍して欲しいですからな」

「このまま順調に行ってくれば、確実にローテーション入りです。話しながら私達は再び酒井のピッチングを眺めた。相変わらずストリートが強烈な音を発してミットに吸い込まれていく。

「ち、ちよつとタイム……」

突然キャッチャーが立ち上がる。突き指、それとも骨折か、酒井の剛球に手を痛めてしまったらしい。

「わかりますよ、生半可な捕球の仕方では手を痛める、それだけの球です」

「となると、西沢君が捕れるかどうかが大きな問題になりますな」
相変わらずオーナーの指摘は鋭い。大の野球好きの事はある。

「ええ、早くからブルペンに入って酒井の球を捕ってもらいます。それだけじゃなく、彼には打撃面でも今年期待していますから」

「ところでどうです？まだ初日ですけど、フェニックスというチームの印象は？」

酒井の投球が中断した為か、オーナーの話はチーム全体の事に及んだ。

「みんな、こちらが驚くくらいのやる気を見せてくれていて、期待出来ますよ」

「そうでしょう。王嶋さんに憧れているのがたくさんいますから、ウチの選手達は。その憧れの人の為にも優勝したい気持ちが強いです」

「そんな、照れますね。私なんかそれ程でもないのに……」

「いやいや、このキャンプの観衆一つとっても全然昨年までとは違います。あなたが監督になっただけで、三倍近く増えておりますから。それだけでも感謝したいくらいです。選手も大きな注目を浴びる事が出来て、幸せに思つとる筈ですよ」

「そう言っていただけだと嬉しいです。私自身、まだ戸惑っている状態ですから。勝手に周りが騒いでいる感じです」

「でしょうな。しかし、それもあなたなら仕方のない事だ。それだけのニュースですよ、王嶋茂治が監督をするという事は」

「期待に応えられるよう、頑張ります」

「お願いしますよ、今年は昨年の二位を受けての勝負の年だ、スターズを倒して優勝といきたいですからな」

「え、ええ……」

スターズという言葉が耳に入った途端、動悸がした。そして自分が熊沢オーナーの目の前にいる事がとても申し訳なく思えてきた。全身に汗が滲み出てきて身体が縮むような緊張感すら覚えた。

「頼みますよ。おつ、酒井君が投球再開するようですよ」

オーナーの言う通り酒井が再び投げ始めて、話はそこで途切れた。だが私にはスターズとの密約が頭をよぎり続け、彼の投球に集中する事が出来なかった。バースン、バースンと鳴るキャッチャーミットの音だけが、身体を貫くかのように響いていた。

「それじゃ王嶋さん、よろしく頼みましたぞ。また来ますから」

オーナーは酒井の投球を見終えると、仕事があるそうで帰って行った。ようやく心が落ち着いていた私もそれと同時にブルペンを出た。

私はこの初日に、主将であり、四番であり、キャッチャーである西沢をよく見ておきたかった。彼は今日はまだブルペンに入らずに、打撃練習に従事していた。

「いい感じじゃないか」

「あ、監督」

黙々とティーバッティングに取り組み、いい当たりを連発している西沢に後ろから声を掛けた。

「気にせず続けてくれ」

私の言葉に反応し、手を休めようとする彼を制し、練習を続けさせた。まずはじっくりと見てみたかった。

「はい」

私はまた打ち続ける西沢をじっと見ていた。下半身の筋肉の付き方がいい。昨年末に見た時よりも盛り上がっているようだ。ツボにはまった時は軽くスタンドに持っていく馬力がある。

だが脆さも同居していた。特に緩急を付けた投球には弱い印象がある。速球とスローカーブもしくはチェンジアップを得意とするピッチャーには滅法抑えられている。それは何故か？

私が見た限りでは、彼のバッティングフォームは軸がブレ易いのだ。自分のいいタイミングで打てれば綺麗なスイングで球を捕らえ

られるが、少しでもそれが狂わされると身体がブレて芯から外れた所に当たってしまうのだ。勿論、誰だってタイミングをズラされればフォームもおかしくなる。しかし西沢の場合はそれが顕著に表れているのだ。

それは元々身体が突っ込むような姿勢で球を待っているからだと思われる。パワーもあるのだから、球を迎えにいくのではなくて呼び込む構えに修正出来る筈だ。ティー打撃を見ている、身体が前方に突っ込むようなフォームになっている。今は自分のいい位置、いいタイミングで打っているから良いものの、実戦に入ってからではこうはいかなくなるだろう。

「ちよつとストップ」

「はい」

「もうスイングする身体は出来ているか？」

「はい、大丈夫です」

「よし、じゃあフリー打撃だ、いいかな？」

「はい」

私は西沢にゲージに入るように命じると、打撃投手の元へ駆け寄り、投球に関する指示をした。

「よし、やるぞ。それも実戦形式でだ。十球程ストレート打ったら、いろいろ混ぜていくぞ」

「はい」

二、三度素振りをした後、西沢はボックスに入って投手に相对した。それを開始の合図と見た投手は投げ始める。

バットとボールがぶつかり合い、快音を発して心地よく響く。ストレートだけと言った最初の数球、西沢は完璧に球を捕らえ、三本の柵越えを放った。確かに大したパワーだ。しっかりとしたスイングで当たった時は、ボールがピンポン玉のように飛んでいく。

「よし、ここから実戦形式だ」

ある程度、気持ち良く打たせたと見た私は実戦形式開始を宣言した。

しばらくは先程同様の快打が続いた。ところがそれが突然鈍い当たりに変わったかと思うと、いつのまにか音が止んだ。しまいには空振りすら連発する始末。西沢の表情にも焦りの色がありありと浮かんでいた。

「ちくしょう……」

苛立ちのセリフが飛び出す程、当たりは湿っていった。打撃投手は何の遠慮もなく投げ続け、まるで機械のようだった。そう、私がちよつとその機械を調節しただけで、あつという間に西沢の調子はおかしくなってしまうたのである。

6 回表

「どうだわかったか？自分の欠点が」

私はゲージから出て呆然としている西沢に声を掛けた。

「緩急……ですよね」

「そうだ、君はツボにはまれいいバッティングをする。だが、タイミングを狂わされると面白いように凡打を連発するんだ。私が打撃投手に指示したのも、それだ。チェンジアップを織り交ぜてくれと言ったんだ」

「自分でもタイミングを狂わすピッチャーは苦手だと思ってました

……」

「そうだろう、昨年の君はホームランの本数は打ったから言われていないが、四番の割に打率は低く、元々あまり期待されてはいなかった。だから昨年は好成績を残せたのだ。だが、今シーズンはそうはいかない。このままだとおそらく研究し尽くされて、手も足も出ない状態になるだろう」

「ええ……わかってます。でもどうしたら……」

「簡単な事だ。フォームを改良する」

「そんな急に出来るでしょうか？」

「出来るさ。今までの君は球に向かっていくのはいいが、それで上体が突っ込んでしまっていたんだ。だから打法そのものを、球を呼び込むスタイルに変える。君のパワーなら、それでも全く問題ない筈だ。それが完成すれば、今まで程は緩急にてこずる事もないし、打率も上がるだろう。ホームランだって増える筈だ。私はね、西沢には五十本以上期待しているんだ。だから去年の三十本前後で満足してもらっちゃ困る」

「ご、五十本……、打てますか、僕が？」

「打てる。それだけの資質は持っているよ、肉体的にも精神的にも」
「監督がそう言ってくれるのなら信じます。教えて下さい」

こうして私は西沢をマンツーマン指導していく事になった。

室内練習場に西沢を連れて行き、報道陣をシャットアウトして二人でそこに籠もった。まず素振りから始める。何も言わずに今まで通りにやらせると、やはり上体がつんのめっている。

「とりあえず窮屈かもしれないが、重心を後ろに置くような形で振ってみるんだ」

「こう……ですか」

そう言ってバットを振る西沢だが、何だかぎこちない。今までやった事のない動きをすれば誰でもそうなるだろう。

「そう、気にせず振り続けてみるんだ」

「はい」

「重心を後ろにと言っても身体まで預けるんじゃないぞ」

「はいっ」

「下半身を安定させるんだ。地に根をはるようにだ」

「はいっ……」

振らせている内に、徐々にいい形になってきた。さすがにプロで六年飯を食っているだけあって、飲み込みもいい。段々と見栄えのするフォームになっていく。

約200スイングの後、実際にボールを打たせる事にした。マシンで素直な直球をひたすら打たせる。

「素振りと同じフォームで打つんだ」

「はい」

まだ慣れていない型で打っている為、打球は前後左右バラバラに飛ぶ。まずはマシンの球をしっかりと打てるようになる必要がある。

「よし、休憩だ」

西沢の息が上がってきたのを見て、ストップを掛けた。

「どうだ、疲れたか？」

「はい……」

「打ち方を変えるって事は、今まで使ってなかった筋肉をも使わかな。慣れるまでは大変だろう」

「ええ、あちこちが痛いです」

「今日はこらで止めておいて、ブルペンに入るか？」

「僕はまだまだ出来ます。このままでは心配だし」

「気持ちにはわかるが、無理をして身体を壊されても困る。それにキヤッチャーとしても、しっかりやってもらいたいんだ。新人の酒井の球、きついぞ」

「球が重いらしいですね」

「ああ、君がちゃんと捕れないと困るからな。それにナックル使いのウイルソンもいる。どうだ、やる事が一杯あるだろう」

「そうですね。でもそれだけにやり甲斐がありますよ。監督のおっしゃるように、優勝するならそれくらいは乗り越えないと」

「よし、じゃあブルペンに行くんだ。やる気があるなら夜間にもう一度付き合っよ」

「はい、お願いします」

西沢をブルペンに行かせ、私は野手練を見て回った。見てない間に新外国人ジョーンズがフリー打撃で50スイング中、十三本の柵越えを放ったそうで、報道陣が騒いでいた。

「監督、ジョーンズいいですよ」

打撃コーチの佐藤が傍に来て絶賛する。彼の話では、ホームランも場外級が五本と抜群の飛距離を誇り、変化球にもしっかりとバットがついていたらしい。

「それは期待できそうだな」

「今日の感じなら安心して三番を任せられますよ。勿論、紅白戦・オープン戦を見てからですが……」

「うむ。ビデオはありますか？」

「ええ、録っております」

「じゃあ、後で見ておきます」

「それより監督、今日の西沢の打撃練習はマズかったのでは？」

「は？何がです？」

「あんな弱点を曝け出すような真似をして、おそらく全球団の注目の的になってますよ。多分テレビでの放送や新聞報道もあるし……」
「あ、それは申し訳ない。あなたに何の相談もせず……。ただ、心配はないです」

「心配ないって、あの調子ですか？」

「むしろ西沢は緩急に弱いつて広まった方がいいかもしれませんね。大丈夫です。開幕までに間に合いますから」

「それはフォームを直すという事ですか？」

「ええ。先程、室内練習場で少しやりましたが、彼の飲み込みの早さなら大丈夫。今までより良くなってくれる筈だ」

「それなら安心しました。でも監督、私にもちゃんとやって下さいね」

「本当に申し訳ない、今度からはちゃんと相談するよ」

「どうやら佐藤は妬いているようだった。監督というのは全員に平等に接しなくてはならず、大変な仕事だと身を以て知らされた。」

各コーチに初日の様子を聞いて回ったが、皆順調に練習をこなし、特に問題はなかったようだ。こうして初日の練習は終了した。ただ……

「星本君、君も見ていたと思うが、酒井いい感じじゃないか」

私は宿舎への戻り際、星本に声を掛けた。

「ああ。確かに。直球の走りはいい」

「球も重いんだ。私としては是非先発として使いたいと思うんだが」「ダメだね」

星本はきつい顔をして言い放った。

「どうして？」

「前にも言ったが、今のまま使ったらぶっ壊れてしまうぞ。奴はまだ高校生なんだ」

「そうは言うが、身体だって出来ている。吉田と遜色ないだろう。むしろ酒井の方が肉付きがいいくらいだ」

「そりゃ見た目はな。しかし実際の筋力がどんなものかはわからん
だろう」

「それはそうだが……。じゃあ実際に筋力がある事が証明されれば
いいんだな？」

「しつこいな。それにしたって経験が足りない」

「そんな事はない。彼は場慣れしているよ」

「甲子園とプロと一緒にするんじゃない」

「ああ、確かに違うさ。甲子園の方が苛酷だからな」

「何いっ！」

星本の顔が紅潮する。余程、私の言った事が気に障ったらしい。

「甲子園は負けたら終わりの一発勝負だ。敗戦しても明日があるプ
ロとは違う」

「それはそうかもしれんが、プロの打者と高校生じゃ威圧感が違う
んだよ。今の酒井がプロの猛者相手に九回投げられるとは思えねえ」
「君の言う事は正論だ。でも私だって、それを見越した上で使える
と言っているんだ」

私だって仮にもプロで一流と呼ばれた打者だ。その目で以て、酒
井を判断しているつもりである。

「わかったよ、そんなに言うなら使ってみるがいいさ。ただし欠陥
が見つかった時点で俺の言う通りにしてもらうからな」

「ああ、筋力的な面と実践的な面、どちらかに弱い所が見られたの
なら、二軍からスタートさせよう」

「それならいいぜ」

星本はそれだけ言うと、さっさと先を行き、バスに乗り込んでし
まった。彼は本当にこのフェニックスを愛するが故に、熱くなるの
だ。それがよくわかるだけに、この言い争いは心苦しかった。と同
時に、愛していたスターズの醜い裏の姿を見てしまった私には、熱
心な熊沢オーナーを主としたフェニックスに一途な気持ちを持つ星
本が羨ましく思えた。

夕食後、ミーティングが開かれた。各コーチから今日の練習を見ての諸注意などがなされ、私にもお鉢が回ってきた。

「えー、今日見た限りでは皆の動きも良かったし、今シーズンへの期待が持てる初日でした。ただ、これが一日で終わってしまっただけは困る。明日以降の持続を期待したい」

「はいっ」

「で、このミーティングではコーチに毎日の練習の総括をしてもらうが、私は優勝する為に必要な事を少しずつ話したいと思う。事実、この中で優勝経験のある者は私以外にいないだろう？」

私の問いに先程まで元気の良かった集団が静まり返る。選手は勿論、コーチの中にも一人として優勝経験者がいなかったのだ。

「だからと言っては何だが、優勝に関する様々な話を毎晩ここでしたいと思う。年寄りの昔話と思わずに聞いて欲しい」

「はい」

私は自分の経験を話して聞かせた。初めてプロで優勝した時の感激、それは何物にも変えがたいものであるということ、優勝とはこの上ない喜びであることを強調した。ニンジンとまではいかないが、まずは厳しさ辛さよりも優勝で得られる良い面ばかりを語る事に努めた。

それが功を奏したのか、選手は目をきらきらと輝かせ（大げさではなく私にはそう見えたのだった）、

「監督、やります！」

「絶対優勝だ！」

「俺も！」

などと、自然に盛り上がったのだった。いい雰囲気のまま、ミーティングは終了した。

「監督、夜間練習お願いします」

と言って私を呼び止めたのは西沢だった。

「本当にやるのか？疲れているんだったら別にいいんだぞ。まだ初

日だしな」

「大丈夫です、そんなヤワな身体してませんよ。先程の監督の話を聞いてたら、優勝する為にはもっともっとやらないと」

「わかった。付き合おう」

西沢の心意気にはグツとくるものがあつた。それに引き替え、私は何と情けない男だろう。「優勝」を強調しながら、それを邪魔する行為に手を染めようとしている。真剣な彼に対して自分が恥ずかしく思えた。

私達は室内練習場へ向かった。驚く事に、かなりの選手が自主的にバットを振ったり、トレーニングに汗を流したりしていた。

「みんな、やる気まんまんですね。監督の話に相当刺激を受けたんだと思いますよ」

「嬉しい事だ。ただ、これで無理をしてケガでもされたら困る。君達は素直でやる気のある選手が多いだけに、その辺が心配だな」

「監督は意外と心配性ですね」

少し笑みを浮かべて西沢が言う。

「えっ？」

思いも寄らぬ事を言われて驚いた。

「監督から見たら、僕も他の選手も子供みたいなものかもしれないが、これでも一応プロです。自分の身体の管理くらい自分で出来ますよ」

このセリフを聞いて、はっとした。彼の言う通り、私は選手を未熟者と甘く見ていたのだろうか。少なからず過去の栄光に甘んじて、胡坐を掻いていたのかもしれない。それを看破されて自分の高慢さを悟った。同時に西沢がプロとして一流の洞察力を持っている事も知った。

プロには一流半の選手はたくさんいる。だが、一流もしくは超一流となるとそうはいない。各球団に三人といたんだろう。そして西沢こそ、その一流選手である事をこの時確信した。事実、技量もかなりのレベルを兼ね備えている事がわかった。この夜間練習中に、

早くも新フォームは固まりつつあった。その飲み込みの速さに私は驚かされたのだった。

6 回裏

二日目、事件が起こった。朝の自主練を終え全体の練習が始まると、私はグラウンド狭しと動き回る野手を眺めていた。昨日と同様、選手の動きはきびきびとして悪くない。腕を組んで、球を追う選手を見つめていた時だった。

「か、監督、大変です」

とても慌てた調子の声が私を呼んだ。見るとブルペン捕手の一人が息を切らして走って、こちらへ向かって来ていた。

「どうした？」

「ウ、ウイルソンが……」

「ウイルソン？」

新外国人のウイルソンがどうかしたのか？ 気になった私は彼を追い越し走ってブルペンへ向かった。

中に入った時、ブルペンは騒然としていた。数名の投手と捕手が輪を作って群がっていた。

「どうしたんだ？」

人の群れを掻き分けて、皆の視線の焦点を探し当てた。そこにはキャッチャーが一人うずくまっていた。

「ガッデム！」

視線の真後ろから英語の叫びが聞こえた。事件に関係あると思われる、ウイルソンが腕を組んで仁王立ちしていた。日本人選手よりも一回り大きな体格をしている為、そびえる山のような迫力がある。その山が火山噴火にも等しい怒りを示していた。

話はこういう事だった。ウイルソンのブルペン投球が始まり、最初はストリートも走って順調に進んでいた。ところが彼の宝刀ナックルを放り始めた途端、キャッチャーが捕れなくなってしまった。それどころか、捕球し損なって既に三名がケガをする始末。この状況に彼は「まともなキャッチャーはいないのか？」と怒りを露わに

していたのだった。

「私が受けます」

と言つて、ミットを構えて出てきたのは二番手キャッチャーの中西だった。打撃はともかく、キャッチングには定評がある男だ。いつも西沢ばかりが注目を浴びており、陰に隠れている彼には絶好のアピールの場と思つたのかもしれない。

「Can you catch my ball?」

と言つて、訝しげな表情をするウイルソン。まるで「お前に捕れるのか?」とでも言いたげな表情だ。

「カモン!」

中西は挑発するように右手で手招きし、構えた。

「OK!」

豪快なフォームでウイルソンが投げ込む。重そうなストレートが派手な音を立ててミットに突き刺さつた。ストレートだけでも充分に武器になりそうな威力である。145km/hは間違いなく出ている。現役大リーガーの名はダテじゃない。彼はそのまま数球ストレートを投げた。

「Next knuckle」

次球を自ら宣言して、さらにわざわざ握りまで見せてウイルソンが投げた。指から離れたボールがゆらゆらと揺れてキャッチャーまで飛んでいく。私にはまるで空中で局部地震が起こつたかのように球が揺れて見えた。

「ぐあつ……」

次の瞬間、ボールは中西のアゴを直撃していた。その場にうずくまる中西。

「One more?」

ウイルソンは白々しく尋ねる。もう中西は受けられないのがわかつているのだ。

そして中西はダメージが大きくて、他の捕手に肩を支えられて出て行った。それを見て何やらまくしたてるウイルソン。誰も捕れな

い事実が、かなり腹立たしいらしい。そしてしまいには私に詰め寄って来た。

「Hey boss!」

と言った後、さらに早口で英語を次々に吐き出す。

「な、何て言っているんだ？」

「たまらず私は通訳に尋ねた。」

「そ、それは……」

「いいから、訳すんだ」

「このチームはどうなっているんだ。まともに捕れるキャッチャーがいないなんてアマチュアみたいな話だ。ふざけるんじゃない……と」

通訳は恐る恐る訳した。恐らくウイルソンはもつとひどい言い方をしているのだろう、彼の訳は妙に簡潔でまとり過ぎていた。

「ふむ」

素直な選手ばかりだと思っていたフェニックスにとんでもない問題児が出現したものだ。どうしたものか、思案しようとした。そこへ「バカにするのもいい加減にしろ。メジャーだか何だか知らないが、お前の球くらい俺が捕ってやる！」

現われたのは西沢だった。正捕手がミットを携え、ブルペンへやって来たのだった。

「Are you regular catcher?」

ウイルソンは通訳の説明を聞いて、西沢に声を掛けた。

「イエース。来い！」

西沢は早速構えた。その姿を見たウイルソンはボールを大きな手で驚掴みにし、ミット目掛けて投げ付けた。ストレートは威力を失う事無くミットを響かせる。おそらく、初速と終速にほとんど差がないジャイロボールと呼ばれる類のストレートであろう。ウチのチームでは吉田や酒井がこれに近い直球を投げている。西沢はそれを難なく捕る。これを見た限りでは、酒井の球は重さにさえ慣れれば大丈夫そうではまず安心した。そして今の関心事ウイルソンのナツ

クルは果たして……

「Next Knuckle」

先程同様宣言して、握りまで見せてウイルソンは投げた。何処へ行くのか、どんな変化をするのか、投げた者にもわからないという魔球が、西沢を試すようにふらふらと揺れて向かっていく。

かすつ、という音を立てて、ボールは西沢の後ろに行っていた。ミットには触ったが、捕球までは出来なかったのだ。

「One more!」

ウイルソンももう一球様子を見ようと、再びナックルを投げてきた。

結果は同じだった。ミットには触れるものの、捕球には到らず。その後、数球放ったが結局西沢は一球もキャッチ出来なかった。

「ガッデム!」

苛立たい表情で、マウンドに唾を吐くウイルソン。同様に西沢も己れの不甲斐なさに腹を立てているようだった。他のキャッチャーのようにミスしてケガをする事はないが、捕球出来ないのだ。捕れそうで捕れない、まるで箸で豆を掴むようなイメージであろう。

カッカしてブツブツと何やら吐き続けているウイルソンに突っ掛かった男がいた。星本だ。現役時代さながらの闘志剥き出しの顔付きで突進する。

「おい通訳、何て言ってるんだ?」

「こ、このキャッチャーはなかなかだ。期待できる、と」

「嘘を吐け。こんなに怒ってそんな事言うか? 怒らんから正直に訳せよ」

「は、はい……。な、何とレベルの低い野球か、い、今までロクなピッチャーの球を受けてないんだろう、と」

通訳は星本の剣幕に怯えながら答えた。

「そうかい」

すると星本はウイルソンに歩み寄り、いきなりユニフォームの首根っ子を鷲掴みにした。「てめえ、ふざけんなよ。ナメんのも大概

にしゃがれ！」

ところが次の瞬間、状況は逆転した。ウイルソンが星本の首根っ子を掴んで片手で持ち上げたのだ。

「ぐ……っ……」

見る見る内に星本の顔色が青紫色に染まっていく。ウイルソンに締められたまま持ち上げられ、さながら絞首刑のようだ。このままでは窒息しかねない。

「止めるんだ」

私は止めに入った。それでも放そうとしないウイルソン。私は意を決して星本を持ち上げている彼の腕を叩き落とした。

「うつつ……」

拷問から解放された星本は、まだ苦しそうだった。

「Boss！」

星本から離れたウイルソンは、今度はこちらに向かつてがなり立ててくる。

「何と言っているんだ？」

私は傍らで怖気付いている通訳に尋ねた。

「こ、こんなチームでやってられるか。キャッチャーが捕れないんだったら試合に出る気もないぞ、と」

「正論だが、結構カッ力する奴だな。さあ、訳してくれ」

「え？いいんですか？」

「構わんよ。短気な奴だ、お前は。そう言ってくれ」

私の言う通りの言葉を通訳が伝える。それを聞いたウイルソンはさらなる怒りを示し、吠え始めた。

「何と言っている？」

「こ、これは言えません……」

「いいんだ。全部包み隠さず聞かせてくれ。それが君の仕事だろう」

「こ、こんなレベルの低いチームの監督にそんな事言われるとは心外だ。怒らない奴の方がおかしい。日本の野球なんて……」

「どうした？」

「ク、クズの集まりだと……」

「ほう、それはさすがに聞き捨てならないな」

私の闘志に火が点いた。確かにウイルソンは現役バリバリの大リーガーでその実力も凄いが、日本野球までバカにされて黙っている訳にはいかない。

「よし、こう言ってくれ」

私はある事を通訳に耳打ちした。

「え？き、危険です、それは……」

「いいから」

「は、はい……」

私に押されて通訳はこちらの意志を伝えにいった。

「What! Do you know what you're saying?」

ウイルソンはさらに頭に血を昇らせたようで、真っ赤になって吠え叫んだ。しかし、すぐに笑みを浮かべて

「OK」

と返事をした。

7 回表

我々はブルペンから室内練習場へ移った。私とウイルソンに付いてきたのは星本と西沢さらに吉田と酒井、そして通訳。

私はバットを一本手に取ると、軽くそれを振り抜いた。私の提案とはウイルソンとの一打席勝負だった。お互い勝った方の言う事を聞くという条件でだ。確固たる自信がある訳ではないが、日本の野球をバカにされて黙っている程お人好しでもなかった。それにもし打つ事が出来れば、確実に彼は私の言う事を聞くだろう。プライドの高い奴に限って、己れ以上の相手の力を見せ付けられた時は素直になるものだ。その確信はある。

だが、リスクの大きな勝負であるのもまた事実だ。もし負けたらウイルソンの造反は決定的となり、さらに見物にきた主力選手の信頼をも失い兼ねない。正直な所、自分でも打てるかどうかはわからない。しかし、この勝負は一か八かの賭けだとしてもやらない訳にはいかなかった。今季の成績を占う上でも重要な闘いだった。

何度か素振りを繰り返し、バットの感触に馴染んだ事を合図すると、ウイルソンはマウンドに上った。受けられる者がいないのでキヤッチャーはなし。何球か金網に向かって投げると、

「OK」

と指で印を作って見せた。

「よしっ」

私は打席に入った。こんな勝負の掛かった打席に入るのは久しぶりだ。賭けられているものが大きいだけに、緊張感も大きい。あの引退試合に匹敵するものがある。

「よし、プレイ」

金網の外で星本が臨時審判を務める。開始の合図を聞いたウイルソンは振りかぶった。

「ボール！」

私の胸の高さの辺りを、あつという間に速球が通過していた。正直言って今の球は見えていなかった。久々の打席で緊張している事もあるが、それ以上にウイルソンが本物である証だ。

二球目もストレート、今度は私も反応してスイング。かろうじてバットの上っ面に当たり、真後ろへ飛ぶファウルとなった。

「フン……」

ウイルソンは私がバットに当てたのを見て、鼻でせせら笑うような仕草を見せる。

（来る！）それを見て次にナックルが来る事を確信した。何故と聞かれても答えようがないが、長年の経験からくる勝負感がそう語っていた。

「HA！」

叫びを揚げてウイルソンが腕を振る。ナックルだ！スピードは先程のストレートより落ちるが、まるでボールが風に運ばれているかの如くふわりと揺れてくる。それも打つ自分さえも一緒にぐらついてしまいそうな程の揺れだ。

（捕らえた！）揺れに合わせてスイングを始動した私はそう思った。だが、バットは空を切っていた。最後の最後にボールは凄まじいまでの揺れを示し、バットを避けるかのように後方へ逃げていったのであった。

ニヤリと笑うウイルソン。相当このナックルに自信を持っているようだった。「打たれる筈がない」といった自負にも似たものが表情にも滲み出ていた。

ツーストライクに追い込まれたものの、私は追い詰められたとは思っていなかった。むしろこのプレッシャーを楽しんでいた。こんな素晴らしいピッチャーと対戦出来て、打者冥利に尽きる、そんな風に思っていた。次の一球を打てなかったら……、なんて事は全く頭になかった。

四球目が投じられた。またナックルだ。目の前でボールが揺れている。それを思い切り強振した。だが手応えはなく、空を斬った感

覚が手に残った。しまった三振か、と諦めかけた時、

「ファール……」

星本のコールで何とかかすっていた事がわかった。見ていた選手達も思わずためいきを洩らす。

正直、やられたと思った。だから、命拾いした事で随分と気が楽になった。もう一球チャンスがあると思うと、球もよく見えるような気がした。その証拠にこの後、私はナックルを三球連続ファールした。

さすがのウイルソンもしぶとさに驚きを隠せないようだった。顔には苛立ちの表情が浮かび、暑くもないのに汗を流して手で拭っていた。乱暴な仕草でロージンを投げ捨てて、

「HA！」

と叫んで投げ込んできた。

「ストレートだっ！」

誰かが後方で叫ぶのが聞こえた。私も相手の握りでそれを察知しており、緩急に惑わされる事無く対応した。

「ファール……」

打球は大きく右の方へ逸れていった。さすがにストレートは速いうまく合わせたつもりだったが、威力もあり、食い込まれてしまった。ただ、このストレートを当てたのは大きかった。ウイルソンはさらに焦燥し、マウンドを蹴り始めた。

「いけますよ、監督」

「一発お見舞いしてやって下さい」

吉田や西沢が後ろから声援を送ってくる。私も気持ちだけは現役選手に戻っていた。

「Nuu！」

ウイルソンが唸り声を揚げて次の球を投げてきた。球が揺れてきている。ナックルだ。だが、今までより揺れ幅が少ない。私の目はつきりとボールを捕らえ、それ目掛けてバットを振り抜いた。全身に球を捕らえた心地好い感覚が走る。

打球は快音を発してウイルソンの脇をすり抜けて行った。同時に後方から騒ぎ立てる声が響く。

「さすが監督！」

「見たかウイルソン！」

金網の外から固唾を飲んで見守っていた選手達が自分の事のように私のヒットを喜んでいた。無理もない、散々馬鹿にされていたのだから、溜飲も下がっただろう。

当のウイルソンは下を向き、顔を上げようとしなかった。直立不動のまま全く動く様子が見られないので、私の方から歩み寄る。

「ナイスピッチング！」

そう言つて肩を叩くと、彼はようやく顔を上げて早口で喋り始めた。通訳がそれを訳す。

「自分の完敗だ、監督やコーチに対して無礼な真似をして申し訳なかった。ボスがこれ程までの打者とは思わなかった、自分のナックルを一打席目で打たれたのは初めてだ、と」

ウイルソンから先程までの荒々しさは消えていた。まるで憑き物が落ちたかのように晴れやかな、そして神妙な表情で語っていた。

「いや、それも勝ちたいという気持ちの現れだろうから、よくわかるよ。確かにキャッチャーが一人も捕れないんじゃ練習にならないもんね」

「イエス！確かに私は失礼な態度を取ったが、それも勝利への執着心から来るものだという事はわかっていただきたい」

「わかった。そういう意味では君は真のプロフェッショナルだな。」

勝つ為にあれ程までの執念を燃やすなんてな」

「そう言っていただけで光栄だ。それでボス、話を蒸し返すようでは悪いが、キャッチャーはどうなるんだ？」

「俺が捕るぜ。石にかじりついてでもキャッチしてやる」

西沢が話に割って入った。だがウイルソンは不満気な顔付きだ。

「それは最終的には君が捕ってくれるのが望ましい。だが、先程の様子からすぐには無理だと判断した。私は当面の事を言っているの

だ」

「だから俺が意地でも捕るって……」

と言い掛けた西沢を私がさえぎり、

「当面は私が捕ろう」

と言った。

「そんな、監督……」

皆が心配そうな顔で私を見る。

「論より証拠、やってみるか？」

私はキャッチャーミットを借り、蹲踞して構えた。

「OK！」

ウイルソンもやってみる気になったようで、マウンドに上がってロージンを手で弄ぶ。

最初の数球、重く速いストレートをキャッチした私に、いよいよ問題のナックルが投じられた。ボールが綿毛のように重力を失い、ただ流れるままにゆらゆらとして向かってくる。私には何となくわかっていて、ここで捕ろうとしてミットを動かしてはならないと。

皆、球を迎えにいつて捕り損なったように見えたからだ。直前まで球を引き付けて……

「と、捕った！」

傍らの選手が叫んだ通り、私は捕球した。揺れて何処へ行くか検討もつかないウイルソンのナックルを確かに捕っていた。

「Great！」

ウイルソンから最大級の賛辞が送られた。そして確かめるようにもう一球投げてくる。

今度も私はキャッチした。天性のカンとでも言うのだろうか、理屈では説明出来ないのだが、何球投げられても捕球出来そうな気がした。そしてその予想通り、私はその後投げられたナックル並びにストレートを全て捕球した。

「私の負けだ……、ボスは選手時代スーパースターだったそうだが、それをまざまざと見せ付けられた。あなたの元でなら納得のいくべ

「ースボール……いやヤキュウが出来そうだ」

「ウイルソン……」

「よろしく、ボス」

ウイルソンの手は大きく力強かった。この握手で、私は優勝への光明が見えた気がしたのだった。

この日のウイルソン事件は他の選手にもいい影響を与えた。ナツクルを捕れなかった西沢はムキになって捕球の練習に取り組んでいたし、ウイルソンの球を目のあたりにした吉田や酒井も己れの球を磨く為に気合いを入れて投げ込みをしていた。ウイルソン自身もチームメイトのやる気は感じ取ったようで、それ以上不満を口にする事はなかった。内紛にはならず、むしろチームの活性化をうながし、図らずも好結果をもたらしたのである。

この日はウイルソンの事もあって他の選手にあまり目を配れなかったが、もう一人の新外国人ジョーンズの打棒だけは目にすることが出来た。昨日フリー打撃で十三本の柵越えを放っただけであり、全身の力強さを感じ取れた。上半身は丸太並の腕をはじめとして鋼鉄のように固く引き締まっており、土台となる下半身も安定していた。変化球にもフォームを崩さず柔軟に対応するあたり、かなり期待が持てそうだ。

「ヘイ、ボス！オーハヨウゴジャリマス。ヨーロシクオネガイーネ」

誰が教えたのか変な日本語まで操り、ストイックなウイルソンとは対照的に陽気な一面も見せる。この様子ならチームにもすぐに溶け込んでくれそうだ。今日も五十本中11ホームー放ち、存分にそのパワーを見せ付けていた。

7 回裏

二日が終了し、私には監督の大変さが身に染みていた。ウイルソンの件、西沢の打撃改造、酒井の処遇を巡る星本との争いなど、対応に追われる事が多い。慣れてしまえば何でもないのかもしれないが、監督一年生には各個が大きな宿題のようだ。その上、一年掛けりの宿題である「スターズへのサイン横流し」が心に根をはっていた。しばらく眠れぬ日々が続くそんな予感がした。

そんな私の不安をよそに、キャンプは順調に進んだ。ケガ人もなく、本当にいい具合にだ。そして十二日目、紅白戦が始まった。

紅組の先発はエース吉田、キャッチャーは中西というバッテリー。昨年までのレギュラーと一軍半の選手を、両軍に半々に散りばめた編成になっていた。私はここで己れをアピール出来る選手を見たかった。

試合が始まり、白組一番バッターの吉原が打席に入った。練習とはいえ、実戦が開始した瞬間である。

白組は先頭の吉原がショートフライを打ち上げ、続く二番三番も吉田の速球の前にあっさりと打ち取られてしまった。吉田はキャンプ初日から好調を維持している。速球にキレが加わり、そう簡単には打たれそうになかった。それがこの日のピッチングにも現われていた。

対する白組はウイルソン・西沢のバッテリー。両者共に真価の問われる場面であった。まず先頭の殿村、二番丸山を内野ゴロに打ち取り、新外国人ジョーンズを迎えた。このキャンプ中絶好調のジョーンズは注目の的であり、観衆の声援も一際大きくなった。

初球はストリートを見送り、二球目もストリート。球場内に破裂音が響き渡り、打球はレフト方向に飛んでいった。

「ファール」

ボールはボールをわずかにそれた。

「ああ……」

というため息が球場全体を包み込む。皆、ジョーンズのホームランを期待していたのであろう。

しかし、その期待は見事に裏切られた。勝負球の三球目、ジョーンズのバットは空を切った。ウイルソンの長い指から秘球ナックルが投じられたのだった。そして西沢はそれを捕球した。ファンは失望させたかもしれないが、私には大いに希望が持てるこの勝負であった。

そしてチェンジとなり、気を良くしたであろう西沢の打席が回ってきた。エース吉田とスラッガー西沢の対決に、またも観衆は沸いた。だが、これも期待に応える事無く簡単に三球三振で終わった。

まだ西沢のフォームは固まっていない。いや厳密に言うとならぬ。ムそのものは良くなってきたが、タイミングの取り方などがまだ確立されていないのだ。そんな状況で、仕上りの早い吉田の球に付いていけない筈がなかった。今の西沢なら、二軍のピッチャーでも軽く三振を取れるだろう。

試合は両投手の好投で早く進んで、均衡破れぬまま五回裏を迎えた。ここで白組のピッチャーが交代、ルーキー酒井がマウンドに上がった。これにはこの日一番の歓声が揚げた。如何に彼が注目されているかがわかる。

その酒井はいきなり先頭の山下を三振に斬って落とした。それも配球はストレートだけである。スピードガンで計測してないので速さはわからないが、150km/hくらいは出ているのではないだろうか。そして西沢もその剛球を苦もなく捕球していた。勢いに乗った酒井は続く後続もピッチャーゴロ、セカンドフライに打ち取り、上々の実戦スタートを切ったのである。

紅組は吉田に代わって中継ぎのエース増本が登場。緩急を駆使して、一イニングを完璧に抑えた。

そして七回裏、ツアアウトで酒井とジョーンズの対決が回ってきた。

た。酒井はストレートで押すが、ジョーンズもそれに付いてくる。ツースリーのまま、ジョーンズが連続ファールで粘り、場内も固唾を飲んで見守っていた。

十球目、酒井が全力で投げ込んだストレートはジョーンズのバットを粉碎した。ふらふらと上がった打球はセカンドに処理された。

「わあーっ！」

「すげえ！」

場内がスタンディングオベーションで酒井を讃えた。公平な立場で見るべき私でさえも、手に汗握り、その剛球に興奮した。そして確信した、彼ならばローテーションの一角を任せられると。

結局試合は両チーム投手陣が頑張り、0対0のまま引き分けで終了した。この時期、投手の方が仕上がりが早いので、当然の結果と言えるかもしれない。しかし、私は敢えて苦言を呈したい選手を二名呼び付けた。

「何故呼ばれたか、わかるか？」

「ノーヒットだから……ですか？」

その一人、吉原が答えた。

「ヒットが打てないのは仕方ない。三割打者だって十回に七回は打てない訳だから」

「それでは……？」

「私が言いたいのは、君達がヒットを打つ為の打法をしていない事だ」

そう言って私は二人の顔を見据えた。

「君達はいい足を持っている。なのに何故フライばかり打ち上げるのか？」

二人共、私の問いには答えなかった。静まりかえって俯き加減に下を向いていた。

「今日の紅白戦、確かにピッチャーの出来が良かった。だが君達が転がして何とか塁に出れば、得点だって入っていた筈だ」

そう、私が呼び付けたのは吉原、丸山という足のある掻き回し役的存在の選手達だった。紅白戦の中で彼らがフライを打ち上げてばかりいるので、一言言いたかったのだ。

「吉原、君はどういう気持ちで打席に立っているんだ？」

「まずは墨に出ようと……」

「そうか」

別段、嘘を言っている感じでもない。となると、メンタル的な問題があるのかもしれない。とりあえず丸山に顔を移す。

「丸山、君はどうだ？」

「ええ所を見せてやろうと……」

「だろうな。君はそういう感じがする。大事な場面でヒットが出るのもその心掛けからだろう。それは悪い事じゃない」

「ありがとうございます」

と言つて誇らしげな顔をする丸山。

「だが、君のその考え方はともすれば自分勝手なものだ。野球はチームでする事を忘れては困る。必ずしも君が光らなくても、誰かが活躍する事でチームは勝てるんだ」

「はあ……」

丸山は渋い顔をして頷く。無理もない、優勝争いに縁のないフェニックスでは「自分が目立ってやろう」と思う選手が出てきてもおかしくない。それでなくてもコテコテの大阪者である。関西人の氣質がそうさせるのかもしれない。

「そうだな、ファイティ・ファイティくらいの気持ちになれないか？ 決して目立とうというのが悪いとは言わない。サヨナラの場合で自分を殺す発想はいらない訳だから。ただ君はタイプのには足も速いしミートも巧いから、チームを生かせる選手だと思う。どうだ、もう少しゴロを打つバッティングを心掛けてくれないか？」

「はい……」

丸山の顔はまだ釈然としない感がある。そこで私は考えた。

「君がもしゴロ打ちに撤すれば、三割は堅いと思うんだが……」

「えっ！ホンマですか、それ？」

丸山は突然、大きな反応を示した。

「ああ、俺が保証する」

「そないな事になれば、ゴールデングラブに加えてベストナインやら月刊MVP、いやひよつとしたら首位打者なんかもあり得る……」

「そうだ」

捕らぬ狸の皮算用か、とんでもない事を言い出す丸山だが、ここはお調子者の彼を乗せておいた方が得策と思い、後押しする。

「わっかりました監督、やりまっせ。ゴロ打ちして塁に出まっさ。よし、早速打撃練習や」

調子に乗った丸山は意気揚揚とグラウンドに舞い戻って行った。

「ははは、面白い男だ。さて……」

私は残った吉原の顔を見た。今の丸山の様子を見ても、表情を変えない。というよりも、残された事がプレッシャーになって、笑う事も出来ないようだ。

「吉原、君はどうだ？もう少しチームバッティングを心掛ける気はないか？」

「え、ええ……」

「何だ、何か言いたい事があるならはつきり言っただ」

おどおどとした感じで口籠もる吉原は、何か言いあぐねているようにも見えた。

「ゴロを……打とうとはしています……」

「そうは言っても君の打ち方は明らかにアップー気味だ」

「わかってます、今までもコーチに言われ続けていましたから」

「それじゃあ何故？」

「ですからわかってはいるのですが、身体が……」

「ひよつとして、緊張しているって事か？」

「はい、こんな事恥ずかしくて誰にも言えませんでした……」

「そうか」

秋季キャンプで見た時から吉原は神経質なところがあると思って

いたが、まさか打撃フォームにまで影響しているとは思わなかった。おそらく緊張から身体が堅くなってしまう、叩きつける打ち方が出来ないのだろう。

「ずっとそうだったんですが、誰にも言えなくて……。監督が話してみろと言わなければ、今だって言うつもりはありませんでした」

それは彼の言う通りだ。もしこんな不安を打ち明ければ、簡単にレギュラーの座を奪われかねない。フライを打ち上げてしまいながらも試合で使われてきたのは、彼にそれだけの能力があるからだ。

「何故、私には話した？これを聞いて君をレギュラーから外す可能性だってあるんだぞ」「監督は……助けてくれそんな気がしたから……。ボクのずっと憧れていた王嶋さんなら、悩みも解決してくれそんな気がしたんです。どっちみち、このままでは選手として長くやれそうにないから……」

「ははっ、甘いっ」

プロの戦士としてなんと甘い考え方か。こんなに甘ったれた選手だとは思ってもみなかった。

「やっぱり甘いですよ、精神的に弱いなんてプロ失格もいいところです……。自分でもそれはわかっています」

「確かにそうだ。……が、思い切って告白した勇氣に打たれた。一緒に対策を講じようじゃないか」

「監督……」

吉原の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「やってやろうじゃないか。君を必ず一人前の一番打者に見せるぞ」

私の闘志に火が付いた。監督として、この選手達を絶対に優勝まで引き上げてやる氣概が沸き起こってきた。

個室に入って吉原の話を聞いてみると、彼は極度のあがり症である事がわかった。打席に限らず、実は守備でも物凄い緊張をしている事実も判明した。

「本当に球が飛んでくるのも怖いくらいなんです。自分の所には飛んでくるな、といつも思っていました」

「その割にはいいプレイをするじゃないか？」

「はあ……、でもいつも物凄く緊張して心臓がバクバクいつているくらいなんです。守備は経験で何とかカバーしているっていうか……」

「なあ吉原、君は野球が嫌いなのか？」

私はまず根本的な事、プレイする以上そのスポーツを愛好しているのかを尋ねた。

「いえ、そんな事はありません。好きだから、ちゃんとしたプレイがしたくて緊張するんです」

「そうか、好きなんだな。じゃあもつと楽しもうと思ってプレイしてみたらどうだ？」

「楽しむ？」

「ああ、野球が好きなら楽しんでプレイ出来るだろう。さっきの丸山を見ただろう、あれは少しオーバーだが、あんな風に楽しくやる事も大事だぞ」

「しかし、勝たなくてはいけない試合の中で楽しむなんてボクには無理です」

「確かにチームプレーをしなくてはならない試合の中で楽しもうというのは難しいかもしれない。だがチームってそんなに堅苦しいものではないぞ。君は失敗する事を恐れているのだろう？」

「はい……」

「失敗を仲間が帳消しにしてくれるのもまたチームさ。今日だって私が説教をしているが、打てなかった事にチームメイトが誰か文句でも言ったか？言わないだろう？」

「はい」

「特にこのフェニックスの選手はとても連帯感が強いと思う。だから君が一つ二つ失敗したところで、それを咎める奴なんていないし、むしろその失敗を取り返してやろうという奴が多い筈だ」

これはキャンプを見て実感していた事だった。彼らのまともには本当に強固で、私がスターズで優勝していた時以上のチームワークの良さを感じていた。

「だからそんなに一人で背負い込む事はないんだ」

「ええ……」

「もう一つ、ひょっとして君は観客が気になるんじゃないか？」

「はい」

「やっぱりな。確かにこれは強敵だ。観客というのは味方にも敵にもなるからな。敵側の応援団は勿論、時には味方側さえも罵声を浴びせてくるもの」

「ボクはどうもワーツと衆人環視にさらされるのが苦手……」

「あれだけ試合に出ていてもか？」

「はい。場慣れなんて言葉がありますけど、自分は全然そんな風にはなりません……」

「よく『観客をナスやニンジンだと思え』なんて言うが、そういう思い込みは出来ないのかい？」

「それも言われて何度かやってみました……」

「ダメだったという訳か」

私の言葉に吉原は頷いた。それから私はじっと彼の顔を見てみた。確かに、今私の目の前にいる時点で、彼はおどおどとしている。生来の気の弱さ・神経質が、試合になると彼の身体を縛り付けてしまふのだろう。となると、少しでもプラス思考にさせて、気持ちをいい方へ持っていくしかない。

「なあ吉原、こうやって私に話してみて、どういう気分になった？ かえって苦しくなったりしたか？」

「い、いえ……、逆に少し気が楽になりました」

「じゃあ今の話し合いも無駄ではなかったって事だな。一つだけわかったんだが、まず君には恥ずかしがらずに精神面の話をしっかり出来る人間が必要だな。私も勿論聞くが、専門家を一人用意しよう」
「専門家……ですか？」

「ああ、いわゆるカウンセラーってやつだ。一人知り合いがいるから、彼を君の専属カウンセラーとして要請する。いいかな？」

「わ、わかりました」

「そして厳しいようだが、いい状態になったと私が認めるまでは、二軍へ行ってもらう。悔しかったら、自分で心を鍛えて昇格するんだ」

「は、はい」

「期待しているぞ。君が帰ってきた時こそ、本当のフェニックスになるのだから」

「はいっ」

今までずっとびくびくしていた感じの吉原から、初めてはつきりとしたいい返事が出た。こうやって自覚してくれば、精神面が強化される日もそう遠くはない筈だ。この日、吉原は一軍から離脱した。

8 回表

さて、この日はもう一悶着あった。酒井の起用法を巡る星本との争いである。紅白戦を見て、より一層酒井に惚れ込んだ私は監督室に星本を呼び、言った。

「星本君、今日の試合でわかっただろう、酒井がプロで通用するということが」

「またその話か。何であんたはそんなにせっかちなんだ。今日活躍したからって、次もいいとは限らないだろうが。トータルで見ても、シーズン使えるかどうかを判断するのが俺達の仕事なんじゃないか？」

「君の目は節穴か？」

私はいつまでもG.Oサインを出さない星本にしびれを切らした。

「何いつ」

「トータルで判断、確かに正論だよ。だけど見るべき者が見ればわかる筈だ、酒井がプロで充分通じるという事が。それとも君にはそれを見る目がないのかい？」

「むっ……」

「まあいいよ、投手コーチは君だ。君がまだ判断を下し兼ねると言うのなら待つよ」

そう言っただけで私はその場を離れようとした。その時、

「待て」

と彼から声が掛かった。

「何か？」

「ふん、俺だって酒井の実力くらいわかってる。ただな……」

星本はそこで言葉を切った。

「ただ？」

「いいのかい、はっきり言わせてもらって」

直言居士の星本にしては珍しく発言をためらっているようだった。

「ああ、何か言いたい事があるなら、遠慮なく言い給え」

「じゃあ言おう。はつきり言っただけのやり方が選手を壊し、チームを壊すんじゃないか心配なんだ。酒井は将来ウチのエースを張れる男、一年目にあんたに使われまくってぶっ潰れてしまわないか不安なんだよ。酒井だけじゃない、西沢だってそうだ。あんな風にバッシングフォームを大幅に崩してしまっただけで、立ち直れなかったらどうするんだ？」

「そうか、そういう事か……」

星本の告白によつて、今までの彼の反対の理由がよくわかった。実際の所、彼は酒井の起用云々ではなく、私の指導方針そのものに反対していたのであった。それはこの新潟フェニックスを誰よりも愛するが故の反対だった。突然土足でやってきた私に、明らかな反感を抱いているのだ。

「なあ、あんた、本気で優勝する気があるんだろうな？今のままじゃ、チームをぶっ壊しに来たと思えないぞ」

「星本君……」

一瞬、下川さんの顔やスターズのユニフォームを着た自分の姿が頭をよぎったが、それを打ち消し、私は言った。当然優勝する気はあるからだ。

「勿論だ。逆に言わせてもらえば君は選手に過保護過ぎる」

「何だと」

「酒井しかり、西沢しかり。君は選手をそんなに信頼出来ないのか？私が酒井を一軍に上げたり、西沢のフォームを変えたりしたくらいで彼らがダメになると思っているのなら、君は彼らの力を見くびっている。彼らはそんなにヤワじゃない」

「そ、それは……」

さすがの星本も今の言葉は効いたらしく、表情を曇らせた。

「君が私を信用出来ないというのはわからんでもない。チームへの愛着が人一倍だという事もよくわかる。だからといって、選手をも信用出来なくなるなんて、コーチにあるまじき事だ」

「ちつ……」

「まあいい、どちらが正しいかは開幕すればわかる。君の言う通り、酒井に関してはオープン戦の予定登板が全て終わるまで白紙にしておこう。それでどうだい？」

「わかった、そうしよう」

星本はそれだけ言うつと、強烈な音を立てて扉を閉めて部屋から出て行った。

私達の間には大きな溝がある。彼は明らかに私を敵視している。どうやっても星本と手を携えてやっていくことは出来ないのか、そう思うと先行き不安にもなってくる。ただ彼はチームへの愛情は物凄いいものがある。そんな姿を見ると、助力を得る事が出来れば、これほど頼りになる者もないと思われた。

ならば如何にして彼の協力を得るか。それはウイルソンの時と同じ、実力を示すしかない。私の方針通りに酒井や西沢が活躍してくれば、星本もこちらを認める筈だ。こんなにわかりやすい構図はない。そしてそれだけやり甲斐がある仕事である。絶対に星本を振り向かせてみせる、この時私はそう決意した。

そして紅白戦も進み、各選手が順調な仕上がりに具合を見せてくれて、私は安堵した。ジョーンスは二戦目以降毎試合ホームランを放っているし、他の打者もまずまずの調子を見せていた。ちなみに丸山は初戦以来、ゴロ打ちに撤してコツコツと打率を上げ、何とチーム内首位打者となっていた。

投手陣も万全の状態。吉田・酒井・ウイルソンの先発陣を始め、増本・山田のリリーフ陣も好調を維持している。惜しむらくは彼らに続く新たなピッチャーが出てこなかった事だが、それを差し引いても皆の出来はいい。

問題は西沢のバッティングだ。守備の方はウイルソンのナックル・酒井の剛球を捕球したり、リーダーとしてチームをまとめたりするなど問題ないが、打撃はついに紅白戦中には良くなかった。ヒ

ツトもわずか二本、惨憺たる成績であつた。ただ言い訳させてもらうならば、この間私は練習に付き合ひはしたが、何のアドバイスもしなかったのだ。それはあくまで西沢の自主性に任せてみたかったからに他ならない。だが、さすがにタイムリミットがやってきた。私はオープン戦開始前日、いつものように夜間練習に現われた西沢を座らせて話をした。

「どうだ西沢、開幕までに何とか出来そうか？」

「監督……、俺は監督が期待するような選手じゃないのかもしれない。でも、はつきり言つて今どう打つたらいいかがわからないんです……」

それは彼がキャンプ中、初めて見せた弱気な姿だつた。おそらくずっと悩んでいたに違いない。しかしチームを引っ張る立場上、気丈に振る舞っていたのだろう。

「なあ、打てない原因は何だと思う？」

「タイミングです。球を呼び込む打法に変える事は出来たと思うんですが、その為か食い込まれる事が多いのだと……」

「よくわかつているじゃないか。それなのに対策が立てられないのか？」

「いろいろと試してはいるんですが、どうもうまくいかないんです……」

「そうか」

さすがにこれ以上考えさせるのは酷な気がした。それでなくてもチームの要である。バッティングの不調がチーム全体に影響を及ぼさないとも限らない。

「じゃあ私に考えがあるんだが、やってみるか？」

「監督が？はい、何でもやります、教えて下さい」

「なあ、シンクロつて知っているか？」

「聞いた事がありますが……」

「まあ言葉はどうでもいい、一種のタイミングを取る方法だ」

「そ、それはどうやるんですか？」

「決まったやり方はない。幾つか方法があるからな。簡単に言うと、ピッチャーが投げる際に脚を上げてその後重心を下げる瞬間に重ね合わせるように、バッターも重心を下げるという事だ」

「重心を？」

「そうだ、『いつせーのー』というタイミングを自分から作り出すような方法だ。私も現役の時はよくわからなかったが、引退して勉強し直していた頃、当時のビデオを見たら確かに左足のかかとをチョンと踏み込んでいた。無意識の内にシンクロを取り入れていたんだ。そしてそれは強打者と呼ばれる選手のほとんどが行なっていた」

「そんな技術があつたなんて……」

「みんな無意識にさ。もつとも中には知っていてやっていた選手もいたかもしれないが。とにかくそれだけ使える方法ということさ」

「監督、是非教えて下さい。俺にあつたやり方を」

「わかった。あすのオープン戦の開幕戦、徹夜明けで臨む覚悟があるか？」

「はい、やります」

こうして私達の特訓は、一人の打撃投手を加えて朝まで続いた。

8 回裏

心地良い疲れを身体に残し、朝を迎えた。結局、早朝五時まで西沢とシンク口会得の特訓に取り組んだ。それから床に入ったのだが、朝日の眩しさに今更寝付けず、起きる事となったのだ。寝付けない原因は陽の明るさだけではない。本日からオープン戦開幕に胸踊るような緊張するような気分になったのだ。キャンプでやってきた事が正しかったのか否かがとりあえず証明されるのだ。興奮しない訳がない。

今日の開幕試合は宮崎県営野球場で、パワリーグの日本ウイナーズとの間で行なわれる。同じく宮崎県でキャンプを張っていた者同士の対戦である。

「王嶋監督、監督として初の実戦となりますが、今どういった心境ですか？」

宿舎を出た途端、スポーツ記者が群がってきて尋ねてくる。

「正直言って緊張しています。まだ開幕までは時間があるとはいえ、キャンプの成果が出る訳ですから。採点でもされるような気分です。私は現在の心境を正直に答えたい。」

「監督の現在までの採点は何点くらいですか？」

「受験者が採点は出来ませんよ。それを皆さんや解説者、そしてファンの皆様に評価してもらうんじゃないですか？」

「ははっ、こりゃ監督に一本取られましたな……」

記者達がドツと沸いた。私はその隙を縫って球場へ向かうバスに乗り込んだ。

既に選手達は全員乗車していた。皆、今年の初実戦を控え、やや緊張した面持ちに見える。その様子を見た私は車内のマイクを借り、口を開いた。

「今日の試合、私が率いる初めての实戦となる訳だが、あえて今日はノーサインでいこうと思う」

「ええっ……」

車内のあちこちから驚きの声が揚がった。

「今日は最初の試合だし、皆の仕上がり具合を見たいから、各人好きにのびのびとプレイしてもらいたいんだ。なるべく多くの選手を出すつもりだ。勿論、この試合で適性を判断するなんて事はしない。まあ一種のご褒美というか、キャンプが終わったばかりだから一試合くらい楽しんでプレイして欲しい。それこそファンを喜ばせるよ
うな……」

「ウッス！」

「はい！」

「わかりました！」

次々と返事が聞こえてくる。どうやら皆が私の意を汲んでくれたようだ。

「ただし、怠慢プレーだけは許さないぞ。もしそういう者がいたら即刻交代の上、二軍行きとするからね」

「はいっ！」

一様に返事が揃った。

（いける！）私の中に選手達への単なる期待を越える信頼感が芽生えつつあった。

球場内は予想以上の観客で溢れ返っていた。私を見に来た者が多数いるそうで嬉しくもあったが、ほどなくそれ以上の嬉しさが降り掛かってきた。試合が始まるやフェニックスの選手は大活躍、投手は先発吉田から完封リレーの快投、打ってもジョーンズ・山下がアーチの共演と、これ以上ない形で私に監督初勝利をプレゼントしてくれたのだった。

さて注目の西沢だが、いきなり実戦でヒットが飛び出した。それも昨晚のシンクロ打法特訓が実ったのか、しっかりしたフォームでのクリーンヒットであった。それは今後に期待を持たせる、大きな一打であった。そしてある意味、この事は勝利以上に嬉しかった。

事実、翌日の試合から、今までの状態が嘘であつたかのように西沢のバットは火を噴き始めた。彼はたった一夜の特訓で、シンクロによるタイミングの取り方をつかんだのだ。連日の猛打賞に、酷評を浴びせていたマスコミも驚嘆し、閉口する有様だった。

そして西沢の活躍に乗せられるかのように、フェニックスは連勝を重ねた。まさにキャンプの成果が爆発した感じで、各選手が己れの良い所を余す事無く発揮していた。ジョーンズはホームラン十本でホームラン王、そしてなんと丸山が五割近いアベレージで首位打者を走る大活躍。投手陣もエース吉田を筆頭に順当な仕上がりを見せた。

そして問題の酒井の登板がやってきた。オープン戦とはいえプロでの初試合、さすがに強心臓の彼も緊張しているようだった。何度もタオルで汗を拭ったり、靴紐を入念にチェックしたりする様からそれがうかがえた。

だが、マウンドに上がるとそんな不安は一掃された。強打を誇る横浜ドルフィンズ打線を相手に、鬼のような酒井がそこにはいた。のっけから150km/h台の速球を放り、プロのバッターを完全にねじ伏せた。終わってみれば登板した五回を、四球一つのノーヒットノーラン、三振9という最高の結果で締めた。

「凄いな。全く大した奴だ」

ベンチに戻ってきた彼を私は褒めちぎった。

「いえ、運が良かっただけです」

「登板前はとても緊張している様子だったのにな」

「はい、心臓がバクバクいってヤバかったです。だけどマウンドに上がったら急にワクワクしてきて……」

「そうか、君らしいな。その結果がノーヒットノーランか」

「出来過ぎですよ。たまたまです」

「まあいずれにせよ、これで私の中で君のローテーション入りは間違いないとなった。どうだ、星本君、これで酒井が通用する事がわか

「ただらう」

私は話の矛先をベンチの隅に佇んでいた星本に向けた。

「へっ、わかったよ。結果を出した以上、監督であるあんたの意見に従うよ。ローテーションでも何でも好きにするがいいさ。俺は補佐するだけだ。フン」

それだけ言うと、星本はブルペンへ去って行った。形はどうあれ、これedyやく酒井を一軍の先発ローテーションに組み込む事が決まったのであった。それが間違った判断でなかった事は、この後の試合ですぐに証明された。酒井は三試合に登板し、無失点という完璧な内容でオープン戦を締め括ったのであった。

そして何と我が新潟フェニックスはオープン戦を首位で終えた。自分でも信じられなかったが、本当にやる事なす事うまくいき、連勝を重ねたのであった。まさにキャンプの成果が結果となって現われたのだ。特に吉田、酒井、西沢と両外国人ウイルソン・ジョーンズが期待通りの活躍を見せてくれたのが大きかった。

この好成績に解説者の順位予想もフェニックスを推す者が続出した。大半がスターズか我々が優勝すると予想し、「SO率いる二チームの決戦」と煽っていた。その我らSOにとんでもない密約があるなどとは露とも知らずに……

9 回表

開幕前日、選手全員とのミーティングやコーチとのスタッフミーティングを終え、帰途に着こうとした時だった。

「ちよつと……、話があるんだが」

それは星本だった。ミーティングでも特に発言せず、押し黙っていたようだった。その彼が今になって私を呼び止めるとは、胸に含むところでもあるのか。

我々はホテル近くの飲み屋に入った。店へ着くまで星本は終始無言で、一緒にいる私まで緊張感を覚えた。

「いったいどうしたんだ、こんな開幕直前の夜に……」

杯を酌み交わしながら、私が口火を切った。

「あんな……」

星本は言い掛けて黙り込む。

「珍しいな、君が口籠もるなんて」

「ふん、言いにくい事くらい俺にだってある」

「何だよ、呼び付けたのは君じゃないか。何でも言ってくれよ」

「そうだな……。じゃあ……」

すると不意に星本は私に向かって頭を下げ、

「悪かった」

と謝してきた。

「悪かったとは、何が？」

「キャンプ中、あんたのやる事成す事に反対してきたが、今回は俺が間違っていた。それを謝りたかった」

「星本君……」

「酒井の起用といい、西沢の打撃フォーム改造といい、みんな正しかったよ。あれでウチのチームは今年優勝出来るかもしれん」

星本は私の顔を直視出来ないようで、俯き加減に言葉を紡ぐ。これが彼のいい所なのだ。一本気な面を持つ彼は、自分が間違ってい

たと悟れば、素直にそれを認める男なのだ。そこにカリスマ性がある。私もそんな星本だからこそ、好敵手として認め合ってきたのである。

「星本君ありがとう。これでやっと今年やっていく自信が出来たよ」
私は嬉しくなった。星本との共闘、それこそが一番の難問だと思っていたのだから。ようやく自分を認めてもらえたような気がした。
「協力は惜しまない。絶対優勝しようぜ、監督」

星本が燃えるような目で乾杯を求めてくる。日本酒を一気に飲み干して、我々は更に杯を重ねたのだった。

二時間程星本と酒を酌み交わした後、私はホテルに戻って自室で一人きりになった。シャワーでも浴びようかと思った時、不意に携帯電話が鳴った。

「もしもし」

「シゲ、今一人か？」

声を聞いた途端、一瞬にして星本との良い気分の余韻が何処かへ行ってしまった。身体が強ばり、固まったようになる。声の主は下川さんだった。

「はい……」

「いよいよ明日から開幕だな。緊張してるか？」

「ええ」

だがそれは答えたのとは違う緊張であった。明日開幕する事の緊張感ではなく、下川さんという脅威への緊張感だった。

「頑張れよ、ウチと当たるまでせいぜい調子を上げておくんだな」

「そのつもりです」

「開幕戦というのは一種独特のムードがあるからな。下手な采配すると、そのままチームの雰囲気壊しかねないから気を付けろよ」

「はい……」

返事をしながら、一体何のつもりなのか、そればかりが気になって仕様がなかった。

「おっと、大事な用件を忘れるところだった。約束のサインの件だ

が、間違いなくやってくれるんだろうな？」

やはりきた。下川さんの目的はそれ以外にない。

「はい。その代わり……」

「安心しろ。お前さえちゃんとやってくれれば家族に危険が及ぶ事はない」

「わかりました……」

「ウチと当たるのは開幕して七戦目だったな。前日にまた電話する。明日から頑張れよ」

電話は切れた。せつかくの開幕への好ムードを掻き乱された気がした。ようやく星本と分かり合えた気がして喜んでいたのに、この電話で一気に落胆してしまった。

実を言うと、オープン戦の連勝気分酔ってスターズとの密約など頭の片隅に追いやられていたのだ。そこへ今の電話である。改めて背負った十字架の重さを思い知らされた。そして星本を始めチームに対する罪悪感で胸が一杯になってきた。この夜、私は眠る事が出来なかった。

もやもやした気分で朝の光を仰いだ。今日から本当の戦いの始まりなのに、私は昨晩の電話で意気消沈していた。一睡も出来ず、最悪の気分だ。そんな私の気も知らず、朝日は眩いばかりに照り輝いていた。この光が心を救済してくれないかと、願うのみだった。

気が晴れない私はトレーニングウェアに着替えてランニングに出た。まだ朝の六時だったので、誰も起きていない気配がない。ホテルを出て、新潟の川沿いをゆっくりと走った。泥が堆積して濁った色をした信濃川の水は、私の心を現わしているかのように不快になった。寝不足状態での走りは休まっていけない身体を酷使しているようで、気怠さも増してくる。一体、何をしているのかと自分を責めたくなってきた。

しかし、汗を掻いてくると次第に気分が変わってきた。身体が心

地よく湿り気を帯びてくる。スポーツマンの血が流れるせいか、寝不足の絶頂である筈なのに、一種のランナースハイにでもなったかのような感じで、清々しささえ覚えた。本当に陽の光が私を浄罪してくれているみたいだった。段々とやる気も戻ってきた。スターズの妨害がなんだ、他の試合を全部勝つくくらいの心持ちでやってやる。そんな気持ちの底から沸き上がってきた。元々、困難があればある程燃えるタイプの人間である。ランニングをする事で、「やってやれない事はない、いややってやる」という気持ちを取り戻せたのだった。

そしてこの気持ちを更に高揚させたのは、西沢・吉田・酒井の三名と出くわした為だった。ランニングしていたのは私だけではなかった。

「あつ、監督。お早ようございます」

「君達、こんな朝早くからどうしたんだ？」

「皆、興奮して早くに目が覚めてしまったので、軽くランニングを

……」

「ふふっ」

思わず笑みがこぼれる。この選手達は私の理解者だ。本当の事は言えなくても、私の気持ちを行動で代弁してくれている。「やってやる」と思っているのは自分だけじゃない。

「監督、何がおかしいんですか？」

西沢が尋ねてくる。

「いや、何でもない。やる気出てきたぞ。今日は勝つからな」

「はいっ」

我々四人は上機嫌のまま、川沿いを走り続けた。青空が太陽を際立たせるように広がり、これからの光明であるかのように思えた。

9 回裏

広島サーモンズとの開幕戦はデーゲームで行われる。我ら新潟フエニックスの面々は早々と球場入りしていた。試合前の練習、選手達は軽快に動き、開幕戦の緊張を感じさせなかった。こういう時、地元開幕は大きい。慣れた地で、しかも味方応援団に囲まれ、戦い易い事この上ない。皆、オープン戦を首位で終えた事で自分達の力に自信を得たようで、地の利にも恵まれたこの初戦、やってくれそうな雰囲気漂わせていた。

ファンが続々と集まってきて、鳥屋野球場は満員になろうとしていた。大勢の地元フエニックス応援団が、試合開始前から声を張り上げ楽器を鳴らして場を盛り上げていた。ミーティングを済ませた我々が、そんな熱気溢れる球場に足を踏み入れる。すると雷のように歓声が鳴り響き、轟音が球場全体を取り巻いた。

「す、すげえ……」

「こんな応援初めてだ」

選手は皆、驚いていた。これ程の応援に囲まれるのは初めての経験なのだろう。幾らかそういう環境に慣れている筈の私でさえ、身震いした。

「どうだみんな、やってやろうって気になっただろう？」

私の問いに、

「ウツス！」

全員が大きな返事で答えた。皆の顔を見回すと、いい気合いの乗りをしている。決して応援に萎縮してはいない。むしろ強力な後ろ盾を得てやる気を奮い起こしたようだった。この調子なら、地の利を生かせるだろうと私は確信した。スタメンの選手達は勢い良くベンチを出ていき、守りに付いた。

若手人気アイドルによる始球式が終わり、いよいよ試合開始。先発吉田が初球を投げ込む。速球が猛烈な勢いで、破裂しそうな音を

立てて西沢のミットに突き刺さった。

「ストライーク！」

審判の声が響くと一気に場内は沸いた。それ程インパクトのある初球だった。客席からは

「ヨシダ！ヨシダ！」

というコールが始まる。声援に後押しされ調子に乗った吉田は快調に速球を投げ込み、サーモンス打線を三者凡退に斬って落とした。

勢いに乗った我々は一回裏の攻撃、集中打を浴びせ一挙五点を入れた。四番西沢のホームランには場内が大いに沸いた。

地元開幕での地の利を生かすと言ったが、この試合それが顕著に現われた。こちらはリラックスして戦えたのに対し、サーモンスの選手達は何処か動きが堅く、よそ行きのプレイをしているようだった。結局、吉田が三安打完封、西沢の二ホームマーを含めた先発全員安打で11対0の完勝だった。

「監督、やりましたよ」

勝利の瞬間、私に向かって全選手が喜びを示してくれたのはこの上なく嬉しかった。私は監督として公式戦での一勝を挙げたのだ。監督とは一度なると麻薬のように辞められなくなると聞いた事があるが、それを納得させられた瞬間だった。この勝利は今までのどんな勝利よりも嬉しく思えた。

続く第二戦の先発はナックルボーラーのウィルソン。彼の緩急自在のピッチングに面白いくらいサーモンスの打者のバットが空を切り、二試合連続の完封勝利を飾った。打も西沢とジョーンズが好調で、二人で七打点を稼ぎ出し、開幕二連勝を挙げた。

そして私は三戦目の先発にルーキー酒井を起用した。これは賭けでもあり、星本からも

「もう少し様子を見た方がいいんじゃないか？」

と言われたが、連勝して勢いに乗っている内に彼を使ってみたかった。勝てば最高に良い波に乗れそうだし、仮に負けても二勝一敗

で開幕三連戦を終えられると判断した為だ。最終的には星本の了承も得てこの日の先発となった。

「どうだ、緊張しているか？」

私はブルペンから戻って汗を拭いている酒井に声を掛けた。

「はい、でもオープン戦の時に比べたらそうでもないです。あの時は本当にプロの初戦という感じで緊張しましたから」

と言う酒井の表情は、確かに清々しいまでに平常心に満ち満ちていた。

「それじゃあちょうどいい感じだな。適度に緊張感を持っているよ
うで」

「はい。頑張ります」

「頼むぞ、期待しているからな」

と言って私が背中を軽く叩くと、酒井は

「はいっ」

と返事をしてマウンドに駆けて行った。

試合開始と共に酒井の快投が始まった。いきなり154km/hの速球を投げ込み、場内を湧かせるとそこからは奪三振ショー。初回、速球と高速スライダーを駆使してサーモンズ打線を三者連続三振に斬って落とした。

「やるじゃないか一年坊」

球を受ける西沢が頭を叩いて褒めたたえる。

「いやあ、まだまだこれからですよ。西沢さん、援護に一発お願いします」

酒井はにこにこしてそれに応える。何処か憎めないところがあり、本当に気のいい若者である。

「ようし、見てろ。早い内に楽にしてやるからな」

そう言った西沢が本当に先制ツーランを打ったのには、私も驚いた。酒井ははしゃぐように自軍ベンチから飛び出してそれを出迎え、西沢に抱きついていた。

これで酒井はさらに乗った。二回も三者連続三振で締めた。連続

三振は三回の八人目で途切れたものの、何と完封どころかノーヒットノーランのおまけつき。速球の勢いは最後まで落ちず、リーグ記録に並ぶ毎回の十七奪三振は圧巻の投球であった。彼の大活躍で、フェニックスは開幕三連勝を飾ったのだった。

翌日の一面は酒井のノーヒットノーラン一色だった。各紙が新人離れした彼の力を称賛していた。そしてフェニックスの力が本物で、間違いなく優勝争いに食い込むであろうとも書かれていた。

この勢いは続いた。続く名古屋シャチホコズとの三連戦も投打が噛み合い三連勝、開幕から六試合を負けなしで乗り切れた。

私も監督をしながら、このチームのノリの良さに感心するしかなかった。期待に応えて活躍する選手達を本当に頼もしいと思う。だが、その気分を壊す事柄が迫っていた。ついに東京スターズとの三連戦を迎えたのだ。

名古屋戦の後、一日移動日が挟まっていた。この最初の三連戦は相手の本拠地東京ドームで行なわれる。我々は軽く練習した後ホテルに入り、前日を過ごした。そんな私に予想通り、下川さんから電話が掛かってきた。

「シゲ、いよいよ明日からだな」

「はい、よろしく願います」

「それはこちらのセリフだ。約束通り頼むぞ」

「はい……」

私は聞かれるままに、フェニックスのサインを全て教えた。物凄く嫌な気分になった。そうしている自分がとても情けなく思えた。

「よし、わかった。それじゃあ明日よろしくな」

と言って下川さんは電話を切った。この晩、私は部屋で一人泣いた。何でこんな事になってしまったのかと、いくら考えても答えは見つからなかった。

夜が明けた。私はまた眠れなかった。だが眠気はなかった。鬱勃とした気分が胸一杯に広がっていて、異様に頭も冴えていた。もう選手を信じるしかない。それが私に出来るせめてもの事だった。

我々は昼過ぎに球場入りした。久し振りの東京ドーム、私は妙な気分だった。以前はここを本拠地として、ファンの声援に後押しされてやってきた。事実、今日もSO初対決という事でドーム内が異様に盛り上がっていた。だが、今回は敵としてここへ帰ってきた。引退セレモニーの時、再び帰ってくると宣言したのが、図らずも別の形で実現した為そんな気分になるのだろう。

そう、その引退セレモニーで私はスターズに帰ってくると言った。あの時のファンの大きな声援は今も鮮明に記憶に残っている。しかし私はスターズの、いや下川さんの本当の姿を知ってしまった。スターズはファンを裏切っている。いくら常勝を義務付けられているとはいえ、相手からサインを盗み出してまで勝つ事をファンが期待するだろうか？私はあの時感動を与えてくれた全ての人々に申し訳ない気がしていた。そして今またその裏切り行為を繰り返そうとしている。こんな試合を、お金を払って見に来てくれているファンに見せていいのだろうか？ドームは空を覆い隠す、そんなある種の閉塞感に包まれながら試合は始まった。

10回表

スターズの先発はエース下原。浮き上がるような伸びのあるストレートを投げる本格派で、昨年は十八勝している球界を代表する投手だ。今年も開幕戦に登板し、完封勝利を挙げている。初回、ウチのチームはそのストレートの前に三者凡退に打ち取られた。ボールの勢いに押され、凡打となってしまうのだ。

一方、こちらの先発はウイルソン。キャッチャーのサインも横流ししてあるので圧倒的な不利にもかかわらず、彼の球はスターズ打線を手玉に取る。何処に行くかわからないナックルは打者のバットをかわし、ストレートも走っており打球を詰まらせていた。特に三番衛藤のバットを粉碎した剛球は凄かった。わかっていても打てない球を投げる、さすが本物のメジャーリーガーである。

そして二回表、西沢の打席が回ってきた。下原との真つ向勝負は満員の観客を大いに湧かせた。意地になってストレートを投げる下原に、食らい付いていく西沢。ファールの連続で球数は十五球目に差し掛っていた。

「くあつ」

と叫びを揚げて下原が投げ込んできた。バットを砕かんばかりにボールが飛び込んでくる。しかし、西沢のバットはその剛球を真芯でジャストミートした。

「うわーっ！」

大観衆が一斉に驚嘆の叫びを揚げた。西沢の打球は一直線にバックスクリーンに突き刺さったのだった。

まさにプロフェッショナルの勝負を見た気がした。密約など吹き飛ばすような、素晴らしい真剣勝負であった。こうした戦いが当たり前ではない勝利至上主義の亡者達の、何と浅ましいことか。この対決を見て、私はとても惨めな気分になった。一生懸命戦っている選手達に対して恥ずかしい思いで一杯であった。

試合はこの一点が大きくモノを言った。下原は後続をしつかりと断ち切り、ウイルソンも負けじと失点を許さない。それにウチのチームが出塁しても、サインがバレているだけに、高確率で打ち取られてしまい、追加点は望めなかった。恐らく下川さんの指示が出ているのだろう。面白いくらいこちらの作戦は見破られた。これを打破するには、西沢のように一発を狙うしかない。そして下原から一発を打つのは至難の業だった。その様子を見ていた私は本当に辛かった。

だが、ウイルソンは本当に踏張った。結局、三塁を踏ませない好投を演じ、何とフェニックスは1 - 0で勝利したのだった。信じられないが、サインが筒抜けながらも我々は勝ったのだった。七連勝しかもライバルと目されるスターズに先勝して選手達は盛り上がっていた。いや選手だけではない、コーチ陣までもが喜びの感情を表していた。あの星本ですら、

「よし、これなら本当に今年は優勝できる」

と確信めいた表情で意気込んでいた。そんな中、私は一人不安になっていた。いきなり勝ってしまった事で下川さんがどういう印象を持ったのか、図りかねたからである。

解散してホテルの部屋に籠もった頃、予想通り電話がきた。重々しい気分のまま、私は出た。

「シゲ、今一人か？」

下川さんの声はいつもと変わらない様子だった。

「はい」

「今日はやられたぜ。ウイルソン、さすが現役バリバリの大リーグーだな」

「はあ……」

「今日、そっちが勝ってくれて良かったぞ。あまり毎回こちらが勝つようだと、本当に怪しまれるからな」

下川さんとはんでもない事を言い出す。あまりに勝負をバカにした発言で、内心腸が煮え繰り返るような思いがした。ただ半分安心

したのも事実だった。勝った事で下川さんが不機嫌にでもなっていたら、家族がどうなるか心配でならなかったから。

「あれで……良かったんですか？」

不安な私は本来聞くべきでないような事を尋ねた。

「ああ、十分だ。明日からもよろしく頼むぞ」

と言うと、下川さんは電話を切った。

ベッドに寝転びながら、私は訳がわからなくなっていた。今、自分がやっている事は何なのだろう。野球……、いや違う。駆け引きのような、別の何かをしている気がした。下川さんに操られるまま、今までに経験がないような悪い役を演じさせられている。まるで人形のような。こんな気分で一年間自分の精神が持つのだろうかとも思う。

だがフェニックスの選手という時は、確かに野球をしている実感があつた。彼らという時は間違いなく私は生きていて、充実していた。

「よし」

私はこの時ある決意を固めた。とりあえずシーズンが終わるまでは今のまま、やれるだけの事はやってフェニックスの優勝を目指そう。そしてペナントレースが終わった時、全てを清算する……

決心した事でよく眠れたようで、すっきりとした朝を迎えた。もう迷うまい。下川さんの言う事は聞くが、同時にフェニックスの優勝も目指す。この姿勢を貫くだけだ。もう私の行く道の先は半ば見えていた。舗装もされていない悪路だが、せめて優勝を手土産にしてそこへ突入したいものだ。七連勝の勢いを維持できれば、それも夢じゃない。

だが現実には甘くなかった。第二戦、ついにフェニックスの連勝は止まった。この試合、先発に酒井を送り出したのだが、彼の速球がピンポン玉のようにスターズ四番ガンスに運ばれ、3 - 0で敗れてしまった。大リーガーガンスならば、いくら速く重くてもストレートとわかっていれば打つ事は難しくない。攻撃陣もことごとく裏を

かかれて無得点に終わった。全て私によるサイン横流しが敗退の原因だった。

続く第三戦も我々は敗北した。昨日はまだ試合になっていたが、この日は圧倒的なスターズの力の前に12-0の大敗を喫した。ただでさえ戦力が整って強いスターズが、相手のサインがわかるとなれば、もはや敵はいない。ウイルソンのナックルのように味方でさえ予測不可能なボールを投げるでもしなければ、投手が九回を抑え切る事は出来ないであろう。攻撃にしても出塁後の作戦は無意味に等しく、点を取るには初戦の西沢のように一発打つしかない。それを格上のスターズ相手にやるのがどんなに難しい事か、仮にも一流と呼ばれてきた私にはよくわかっていた。

だが選手は元気を失ってはいなかった。皆、次の大阪ナンバースとの三連戦では力を発揮し、連敗シヨックを微塵も感じさせなかった。そして二勝一敗で乗り切ったのだった。

フェニックスの選手達は私の言う事を信じ、本当に力を付けていた。スターズ戦を除いて、ほぼ二勝一敗のペースで勝利を重ねた。投手陣は吉田・ウイルソン・酒井の先発三本柱の安定が大きかった。彼らはサインがわかっているスターズが相手でも、最小失点に抑える力を持っていた。打は四番西沢の安定に尽きる。キャンプ中の心配は何処へやら、シンクロを取り入れてからの安定感は群を抜いており、三冠王にも手が届きそうな勢いだった。それとゴロ打ちに撤している丸山が良かった。私の言い付けを守り出してから、彼の出塁率は一気に上がった。打率も三割代後半をキープし、足を生かして盗塁も数多く決めていた。精神修業を言い渡した吉原がまだ戻って来ない今、彼の存在は欠かせなかった。

そしてフェニックスは前半戦を首位で折り返した。この結果には選手を始め、コーチングスタッフも皆、素直に喜んでいて。前半戦終了後、私は星本に誘われ新潟市内の飲み屋で話をした。

「前半戦、本当に出来過ぎと言っていていくらいの好成績だったな。あんたにはキャンプからいろいろと言ったが脱帽だ、ありがとう」

と言つて星本は杯を合わせる。

「私は何もしていないよ。選手が頑張ったんだ」

本当にそうであった。私はむしろ影で足を引っ張っている。

「いや、奴らの力を引き出したのは間違ひなくあんただよ。今まで選手・コーチをやつてきて、こんなに選手の力を引き出している指揮官を見た事がない」

「ありがとう。そう君に言つてもらえると嬉しいよ」

私はあの星本にこんな風に言つてもらえるなんて本当に嬉しかった。

「でも、まだ油断は禁物だ。スターズが二ゲーム差ですぐ後ろに迫っているからな」

「ああ……」

一瞬、自分の中に緊張が走った。スターズという言葉聞いたただけでも、過度に反応してしまうのだ。

「そのスターズだが、どうしてこんなに勝てないと思う？ここまで三勝十二敗はひど過ぎないか？」

「ああ……」

「確かに奴らは強い。リーグ一の投手陣と攻撃力を持っているからな。けどウチだつて今年はそれなりの戦力を整えた筈だ。もう少し勝ててもいいような気がするんだが」

「そうだな」

「どうも俺は作戦がことごとく読まれているような感じがするんだが、気のせいかな？」

「確かに……」

真実を答えられぬ辛さが私の胸を締め付けていた。

「何だ、オイ、煮え切らない態度だな。古巣だからって気を遣つてるのか？」

「いや、そんな訳じゃ……」

「じゃあどうしたらいいと思う？このままじゃ本当にやばいぞ」
「む……」

私は何も言えなかった。自分でかき乱している以上、具体策など言いようがなかった。

「何か変だぞ。ひょっとして何か心当たりがあるんじゃないだろうな？」

はつきりしない私の態度に、ついに星本が疑いを抱いてきた。

「な、何も無い。私だって考えてはいるんだが……」

「それにしたって具体策がないとどうにもならんぞ」

「私だっていろいろ試みたんだよ。でも全て下川さんに見透かされているようで……」

私は嘘を吐いた。そうでもしなければ、彼の疑いが解けそうになかった。

「そうか。そりゃそうだよな。確かに下川さんはあんたの師匠格みたいな人だからな。監督として全て上を行っていてもおかしくないかもしれない。悪かったな、ひどい事を言った。すまん」

謝る星本を見て、非常に申し訳ない気持ちになった。むしろ謝りたいのはこちらの方だ。結局、解決策など出る筈もなく、二人で飲み明かしたのだった。

10 回裏

そしてオールスターが始まった。チームからも吉田、ウイルソン、酒井、西沢、丸山、ジョーンズが選ばれた。フェニックスが昨年二位だったことで、私もコーチとしてベンチ入りしていた。当然、記者達の狙いは私と下川さんのツーショットであった。球場内で二人で会話をする段取りがなされ、記者達に囲まれた。打撃練習の最中、外野のファールグラウンドでそれは行なわれた。

「シゲ、一年生監督にして前半戦首位で折り返しとはさすがだな」
下川さんは始終笑顔を見せていた。私と喋る事が、さも痛快であるかのようにだった。

「いえ、出来過ぎですよ……」

私はこの対談に気乗りがしなかったが、マスコミの手前、表情を取り繕っていた。

「その前半戦、フェニックスは絶好調ですが、唯一スターズに対しては分が悪いですね。王嶋監督はその辺、どのようにお考えですか？」

記者の口からやはりこの質問が出た。というよりオールスターそっちのけで、元々SO対決の感想を直接本人達から聞く事が主眼であるのは間違いなかった。

「勝てないですね。やっぱり私が出川さんに及ばないのが、そのままチームにも出ちゃっているかな……」

私は悔しさを押し殺し、そう答えた。

「何言ってるんだ、シゲが俺に及ばない所なんてないぞ。強いて言えば俺の方が監督経験が長いという事くらいだ」

「それは大きいですよ。それでは下川スターズの貫禄勝ちということですかね？」

と記者の一人が言うと、

「ひょっとして王嶋さん、まだスターズに愛着があるんじゃないで

すか？それで非情にならないとか？」

別の記者が横から口を挟んだ。私はそれを聞いて、背筋が凍るような思いがした。万が一にもシーズン中に密約が露見するのだけは避けたかった。

「オイ、バカを言うな！シゲはそんなに甘い男じゃない。こと勝負となると、真剣に相手に向かっていく男だ。勝手な事を言うんじゃないよ」

下川さんも恐れを抱いたのか、私をかばうような事を言って、その記者を叱った。

「す、すいません」

謝る記者。下川さんの迫力に周りの記者連中も圧倒されたようで、それからは突っ込んだ質問が出なくなった。

「ありがとうございます」

ひと通り話が終わると、記者達は去って行った。その場に残ったのは私と下川さんのただ二人。

「シゲ、勘付かれてないだろうな」

二人きりになった途端、下川さんは話を持ち出す。

「だ、大丈夫です」

「ならいいんだがな。あまりにこっちが勝つもんだから、さっきみたいに疑いを掛けてくる輩も出てくるだろうしな。用心に越した事はない」

「はい……」

「それにしてもお前のとこの奴もよく打つなあ。首位になる訳だ」

ちょうど西沢とジョーンズが打撃練習を行なっており、二人が快音を響かせていたのだ。それを下川さんが見て絶賛していた。

「彼らは……才能ありますから……」

「いや、お前の指導の賜だろう。西沢は去年まではこれ程良くはなかった。指導者としてもやるようだな、シゲ」

「いえ……」

「これだったら俺の後、スターズの指揮を任せても心配なさそうだ

な」

「そんな……」

こうは答えたものの、既にその気はなかった。私は今年で全てを終えるつもりでいた。

「まあ、オールスター後もよろしく頼むぜ。今まで通りサインさえ流してくれば、自力で優勝してみせるさ。お前だって本当はそれを望んでいるのだろう？」

「はい」

私はまた嘘を吐いた。既にスターズへの愛着はなきに等しかったが、とにかく下川さんの感情を煽る事だけはしたくなかった。

「ふっ、それじゃお祭りを楽しむとしようぜ」

私達はベンチへ戻った。これ以後、私は下川さんと極力距離を置いて、会話しないように努めた。話せば話す程、嫌な気分になるのは目に見えていたからだ。

オールスターはセンターリーグの圧勝に終わった。前半戦の活躍通り、ウチとスターズの選手が力を発揮したのだった。パワーリーグの選手達が手玉に取られるくらい、力の差を見せ付けた試合だった。MVPには3ホーマーを放った西沢が選ばれていた。スポーツ新聞には「SO化学融合大爆発！」などと書かれ、何もしていない私と下川さんの名前が紙面に踊っていた。

オールスター終了直後、私は熊沢オーナーに夕食に誘われ、席を共にした。他に誰も交えず二人だけの会談だった。

「オールスター、ご苦労様でした」

そう言っただけで乾杯してくるオーナー。

「いえ、私は何もしていません」

「いやいやあなたの指導が実を結んだが故に、西沢君もあそこまで活躍出来たのですよ」「恐縮です……」

「それにしても前半戦、本当によくやって下さった。感謝しますぞ」「選手が頑張ってくれましたから」

「そんなに謙遜されなくても。あなたがいなければここまでの好成

績はないですよ」

「ありがとうございます」

確かにオーナーの言う通りだった。前半戦首位はともかく、スターズに対する成績は間違いなく私が監督をしているが故に叩き出した成績だった。

「それにしてもスターズには勝てませんなあ。選手も苦手意識を持つてしまっている感じがすな。ひょっとして王嶋さん自身もそうなのでは？」

「そう言われても仕方がない成績です。面目ないです」

「ハハハ、冗談ですよ。気にしないで下さいね。私は王嶋さんを信じてますから。きっとやってくれると思っておりますからな」

「オーナー……」

その言葉には真実味が籠もっていた。本気で私を信用してくれているのがよくわかった。それだけに申し訳ない気持ちで一杯になり、目から自然に涙が溢れ出してきた。

「お、王嶋さん、どうしたんですか？」

驚いたのはオーナーである。突然、私が泣き出したので、呆気に取られている様子だった。

「な、何でもありません……。すいません、ちょっとトイレに……」

私は慌ててトイレへ立った。駆けけるようにして中に入り、洗面所で顔を洗った。鏡を見て、何という情けない顔をしているのかと思った。そういえばペナントレースが開幕してからの私は、ずっといい顔をしていなかった気がする。その最たる例が今の表情に集約されていた。

「これじゃいかん」

私は鏡の向こうの自分に言い聞かせ、顔を叩いた。少しは締まった顔に戻った気がした。

トイレから出た私は席に戻った。熊沢オーナーも心配そうな顔をして待っていた。

「どうなされたんですか？」

と問うオーナー。私は、

「ちよつと疲れていたもので、急に涙腺が緩んだみたいで……」

などと、誤魔化しておいたが、熊沢オーナーもそれ以上は何も聞こうとはしなかった。それこそ「私を信じて」くれているようだった。後半戦の展望などを話し、激励されて会食は終わった。

11回表

後半戦が始まった。オールスター明けの初戦は横浜ドルフィンズとの三連戦。我々はエース吉田を立てての必勝体制で臨んだ。前半戦、十二勝三敗の好成績でウイルソン、スターズの下原と並んでヒーラーダービーのトップを走っている吉田は、オールスターでもいいピッチングをして調子に乗っていた。この日も好調な様子で、ブルペンでは球が走っていた。「今の自分は打たれる気がしない」そんな風に感じていたのではなからうか。

それが増長に繋がったのか、この日の彼は簡単にドルフィンズ打線に付け込まれて脆さを見せた。内野安打で出塁されると盗塁され、ウィルドピッチ・四球を繰り返し満塁のピンチ。上擦った状態で相手の四番にストレートをスタンドに運ばれ、あつという間に四点を献上してしまった。調子は良いのに精神面のムラっ気が出て、実力を発揮出来ない悪いパターン。今年ここまで出なかった、昨年までの吉田の悪い面が現われてしまった。

悪かったのは吉田だけではない。リードする西沢にも油断があった。簡単に盗塁を許したのは問題だし、満塁になる前に吉田を励ましに行くべきだった。おそらく西沢は吉田が自分の力で何とかすると思ったのだろう。チームの「信頼感」が悪い方向に出た。そして他の選手も何処となく動きが緩慢で、相手を舐めているというか油断しているような雰囲気があった。

「四点くらい何とかなるさ」

ベンチに戻って来た時、一人の選手から出た言葉がこれだ。確かに意気を上げるには悪い言葉ではないが、この日に関しては明らかに相手を舐めて調子に乗っていた。四点は簡単に考えられる点差ではない。前半戦の勢いを過信して、そのようなセリフが出たのだろう。

結局、この日我々は11-1の大敗を喫した。投手陣は総崩れ、

打者もジョーンズが一発を放ったのみ。後半戦、最悪のスタートとなってしまった。そしてその影響は翌日にも出た。

先発ウイルソンは待球作戦を取られ、ナックルの多投で握力の弱まる中盤から死四球を連発した。それでも何とか無失点に抑えていたが、球数が百球を越えたところで中継ぎエース増本に交代。その増本が大乱調で、連続四球で一点を与え、ストライクゾーンへ置きにいった伸びのないストレートを狙い打たれ大量失点を喫してしまった。

打線も「何とかしよう」と焦りの色が明らかで、ドルフィンズのエース野々村に手玉に取られて完封負け。さらに翌日の三戦目も先発に酒井を立てながら敗退、選手は浮き足立って何も出来なかった。サインの見落としや、消極的な見逃し三振などが多発した。

この結果には皆、意気消沈したようだった。この間スターズは三連勝し、我々は首位の座から引きずり降ろされた。無言でベンチを引き上げる選手達に、前半戦の面影はなかった。

試合後のロッカールーム、私は着替える選手達の前に顔を出した。皆、沈鬱な表情をしてうつむいたまま、黙々と着替えていた。そこには暗いムードが漂っていた。

「あつ、監督……」

最初に私に気付いたのは西沢だった。その声に反応し、皆が一斉に私の方を見た。

「どうした、元気ないじゃないか？」

私は選手達の顔を見回しながらそう言った。皆、押し黙って何も言おうとしない。すると、一人の男が口を開いた。

「監督、すいませんでした。今日の大事な試合、抑える事が出来ず……」

酒井だった。今日の敗戦を相当気にしていたらしい。彼の発言が口火を切り、皆が謝りだした。

「すいませんでした」

「この三連戦、何も出来ませんでした……」

「前半戦の好成績で調子に乗ってました……」

選手一人一人が、この調子で反省の弁を述べた。西沢を始めとして、あのお調子者の丸山ですら謙虚な姿勢で頭を下げていた。私は正直、驚いた。長いプロ生活の中で、こんな風に選手が監督に慚愧する姿を見たのは初めてだった。そして驚くと同時に、胸にぐつと来た。私はこんなにも信頼されていたのかと、彼らの心意気に素直に感動した。

「みんな、そんなセリフはまだ聞きたくないぞ」

私は大きな声で言った。それで皆が顔を上げ、こちらに注目した。もう諦めるのか？まだ後半戦は始まったばかりだぞ」

「監督……」

「私はキャンプから皆を見てきて、優勝出来るチームを作ったつもりだ。それがたかが三連敗したくらいで、こんなにも脆く崩れる選手達だったのか？君達はそんなにヤワじゃない」

私は叫んだ。選手の心に響くようにと。実際に戦うのは彼らだ、私に出来るのはこんな事しかなかった。

沈黙がロッカールームを包んでいた。しかし数秒後、津波の如く大きな盛り上がりが沸き起こった。選手全員がうなりとも叫びもつかない声を一齐に揚げたのだった。

「すいません……、いや、やります！」

「絶対ここから優勝します！」

選手は皆、自らを鼓舞するように声を張り上げた。そして各々が気合いを入れて身体を叩き合ったり、握手したり、腕を突き上げる真似をしたりした。一気にムードは変わった。選手達は戦う男の顔に戻っていた。いまどき古風な男達だとバカにする奴もいるかもしれない。でも、私はそんな彼らが好きだった。本気で何かに取り組むには、多少なりともその事象にバカにならなくてはならない。彼らはそれが出来る男達だった。選手の盛り上がる状態を確認すると、私はそつとロッカールームを離れた。

「ありがとな、あいつらあれで立直れるよ」

不意に背後から声が掛かった。星本だった。

「見てたのか？」

「ああ。あいつら、本当にあんたを慕っているのがよくわかる。いいところでゲキを入れたもんだ。きつと明日からは大丈夫さ」

「うん。私もそう信じている。このまま落ちていくようなチームじゃない」

「頼むぜ、監督。あんたの舵取りが必要なんだからな」

星本に背中を叩かれ、私は握りこぶしを見せてそれに応えたのだった。

ホテルの部屋に戻った私は、一人でビールを飲みながらいろいろと思い出していた。熊沢オーナーといい、星本といい、選手達といい、フェニックスのメンバーは心に熱いものを持った奴らだ。久しく忘れていた情熱を思い起こさせてくれて、心から感謝の気持ちで一杯になる。そのお陰でこの一年、スターズの件を除けば、本当に充実していると思う。自分の野球人生最後を飾るに相応しい幕切れかもしれない。覚悟はとうに決まっている、後は選手を優勝へ導くだけだ。私は一人、部屋で気合いを入れ直したのだった。

翌日、元気を取り戻したチームに、さらに真の一番バッターが帰ってきた。精神面の鍛練の為、二軍落ちしていた吉原がついに一軍に合流したのだ。カウンセラーと二軍監督のお墨付きとあって、私は練習から彼の様子に注目した。

「吉原、待っていたぞ」

打撃ゲージに入ろうとする彼に早速声を掛けた。

「お待たせしました。期待に応えられるよう、頑張ります」

と言った吉原の顔は自信に満ち溢れていた。キャンプの頃とは明らかに表情が違っていた。喋り方もおどしたところがなく、はっきりと物を言う姿勢がうかがえた。

「ああ、本当に期待しているよ」

「連敗は今日で止めますから」

これがあの吉原かと思う程、強気な発言が飛び出す。それも増長

している雰囲気はない。二軍にいた間に相当な精神修業を積んできたのだろう。練習を見ても、しっかりとゴロ打ち、堅実な守備を披露していた。

この日はホーム鳥屋野球場での大阪ナンバーズ戦、私は迷わず吉原を一番センターに起用した。ファンも彼を歓迎すると共に、連敗脱出を願って声を張り上げてくれていた。

「よし、地元で連敗脱出だ。やるぞ」

「オッス！」

私のゲキに選手全員が応え、スターティングメンバーが守備位置へ走っていった。先発は畑田、彼の頭脳的な投球術に期待を掛けるしかなかった。相手の一番青星は初球から打って出た。強烈な打球がピッチャーの脇を通り抜けて行く。

「あーっ！」

観客が一齐にどよめいた。ボールが芝に着く直前に、センター吉原がダイビングキャッチしたのだ。グラブを高く掲げて、補球を証明する吉原。

「アウトーっ！」

審判のジャッジと同時に、一気に球場が盛り上がりを見せ始めた。このファインプレイは流れをこちらに持ってくるに、十分なものだった。これで気を良くした畑田は後続をしっかりと抑えた。

「よし、先制するぞ。頼むぜ、吉原」

ベンチに皆が戻り、西沢が言くと、

「おう。絶対出塁するから、頼みますよ」

吉原は自信ありげな顔をしてバッターボックスへ向かった。

「あれが吉原か……？」

ベンチは皆、吉原の変わりように驚いていた。そして打席でどういふ結果を見せるのか、注目した。

打席に入った吉原は落ち着いているように見えた。ボールをじっくりと見て、一球も振らずにカウントツースリー。そして六球目、三遊間にゴロを打ったが、

「セーフ！」

足の速さを生かして、何とセーフ。再び場内が湧いた。攻撃でもパフォーマンズを見せた吉原に続けとばかり、チームも勢い付いた。二番殿村が犠打でセカンドにランナーを進めると、三番ジョーンズの一発が飛び出した。さらに西沢、山下にも連続ホームランが出た。そのまま打者一巡の猛攻で、初回で一挙七点、早くも勝負を決めた。この後も展開は変わらず、畑田は完封、打撃陣も大暴れして大量17得点を挙げた。こうして我々は大勝で復活のろしを上げたのだった。

そして再び連勝が始まった。一番吉原の復帰は大きかった。彼は精神面の強化に加え、完璧にゴロ打ちをマスターしていた。その為、出塁率が高くなり、後に続く打者がそれを返す形が出来上がった。おまけに丸山を七番に回せるようになり、抜け目のない打線を作る事が可能になったのだった。

11回裏

連勝を重ねた我々は一ゲーム差を追い掛けて、ホーム鳥屋野球場で首位スターズとの直接対決を迎えた。選手の調子、気合いの乗りもいい。問題はサインの事だけだ。戦前に負っているハンデ、それを引っ繰り返して勝つにはせめてベストの状態です試合に臨むしかない。そういう意味で今回は、最たる状態で対戦の時を迎える事が出来た。

そして選手は見事に力を発揮した。先発吉田はこの日、わかっていても打てない程ストレートに威力があった。衛藤とガンズのバットを連続で粉碎したのは圧巻であった。昔、自分が同じようにやられたのを思い出した。それだけ本領発揮した時の吉田の力はずば抜けていた。

打線も吉田の好投に応えた。一番吉原は足を生かして出塁し、四打数四安打。そしてジョーンズ、西沢が二者連続ホームランを放った。他のバッターも相手投手下原の球に食らい付き、粘りを見せた。そしてこの大事な初戦、我々は3-0で勝利した。

「やった、スターズに勝ったぞ！」

試合後のロッカールーム、選手達は大騒ぎしていた。あれだけ負け続けていたスターズに完勝したのだ、嬉しくない筈がない。私とて嬉しかった。自分のせいで劣勢を強いられているチームが勝ってくれたのだから。せめてものの心の救いになった。

翌日もフェニックスの勢いは落ちなかった。先発ウイルソンの魔球ナックルが冴え渡り三振の山を築いた。この日の彼の球の揺れ方は凄かった。わかっていてもそう簡単に打てる代物ではなかった。一方スターズ先発桑畑もキレのいいカーブを駆使してフェニックス打線を抑え、投手戦の模様を呈してきた。

七回表、バッターはガンズを迎えていた。ウイルソンはナックルの連投で早くも追い込んだ。揺れて落ちる球を見せられて、完全に

ガنزのバッティングアイは狂っている。そして三球目、ウイルソンは指先から渾身のストレートを放った。普通ならこれで三振か、よくて凡打になる筈だ。が、それはものの見事にガンズに真芯で捕らえられ、バックスクリーンまで運ばれた。

これこそサイン密通から打たれた一発に相違ない。今日のウイルソンなら、どう考えても打たれる筈のない球と配球だった。明らかにガンズはストレートだとわかって振っていた。がつくりしているバッテリーを見ていて、私は心苦しくなった。だが、二人は気を取り直して後続を断ち切った。感情的なウイルソンらしく、ストレートで衛藤のバットを真つ二つに折ったのは鬼気迫るものがあつた。

そして今のフェニックスはこのまま終わるチームではなかった。七回裏は一番からの好打順、まず吉原がセーフティバントで出塁した。二番殿村は送りバント、しかしサインは読まれており、ダッシュしてきたピッチャーに二塁は刺された。一塁は殿村が滑り込んで何とかセーフ。

「やはりサインを読まれているのか？今の二塁で刺されるなんて……」

星本が呟く。それを聞いて私は内心動揺したが、腕組みをして渋い顔で黙って立っていた。

三番ジョーンズはカーブの前に三振を喫した。そして四番西沢に打順が回ってきた。この打席の彼は燃えていた。前の回、ガンズに一発浴びたのを自分の責任のように思っているのだった。全身に絶対に打つという気迫が漲っていた。

その気迫通り、西沢は桑畑の球に食らい付いていった。決め球のカーブを何とかカットしてファールする。カウント2-2から八球連続ファール、場内も静まりかえってこの対決を見守っていた。そして運命の一球、桑畑から投じられたカーブを西沢はジャストミートした。打球は一直線にライナーでレフトスタンドに突き刺さった。「うわあああーっ！」

途端に球場内が騒音に包まれた。劇的な逆転ツーランに、場内の

応援団はこれ以上ない喜びを示した。西沢がホームベースを踏み、ベンチに戻ってもなお、声は止まなかった。

この一発はウイルソンに力を与えた。球数は百球を越しているのに続投志願し、マウンドへ向かった彼は大リーガーの底力を見せた。握力の低下にも負けずに宝刀ナツクルを連投し、終盤にもかかわらず三者連続三振に斬って落とした。

そしてウイルソンは九回も抑え、フェニックスは辛くも連勝を収めた。試合後の球場の盛り上がりも最高潮で、優勝でもしたかのような騒ぎを見せていた。選手も皆、高揚したまま球場を後にした。

勢いというものは確かにあるものだ。酒井を先発に立てた翌日も我々は勝利した。この日の酒井は付け入る隙のないくらい球にキレがあり、快打されたかに見えた球でさえ打球を失速させた。まさに重い球の本領発揮である。そして怪物は何と二度目のノーヒットノーランを達成してしまったのだった。

三連勝で首位奪回したフェニックスの面々は、翌日が移動日ということもあり、久々にハメを外して新潟の街に飲みに出た。私は星本らコーチ陣と、田舎風の飲み屋で酒を酌み交わしていた。

「本当にやりましたね」

「この三連勝は大きいですよ」

コーチ陣は興奮冷めやらず、本日の試合の余韻に浸っていた。私もいい気分だった。劣勢にもかかわらず、選手達は実力で三連勝した。頼もしい彼らに対して感謝の念で一杯だった。

「まあこれでやっとスタートみたいなものだな。実際、この三連戦も全部冷や冷やの勝利だからな」

慎重な意見を口にしたのは星本だ。

「わかつている。ここで気を緩める訳にはいかない」

私も彼につられて真剣に応えた。

「それはそうですが、今日くらいはパーツとやりましょうよ」

コーチの一人、加藤がグラス片手に言う。彼は現役時代から陽気な男で、テレビの珍プレー大賞等でもよく取り上げられていた。

「ああ、そうだな。飲みに来て、陰気臭いのも何だしな」

と星本が言うと、一気に場が和んだ。彼の反応一つで場の雰囲気が決まるのだから恐ろしい男である。

「じゃ、乾杯」

加藤の音頭で皆がグラスを合わせる。そこからは終始彼のペースになり、過去の笑い話やウチの選手の癖の話などで盛り上がった。自然と杯も進み、久しぶりにいい感じに酔ってしまった。こうなると自然に膀胱も膨らんでくる。私はトイレに立った。

トイレから戻っても皆は明るく賑わっていた。加藤を始め、コーチ陣は昔話で盛り上がっていた。

「あーっ、監督う、電話掛かってきてましたよあ」

加藤が私に気付いて言う。

「ああ、すまん……」

と言つてテーブルに置いておいた携帯電話を手にした時、鋭い視線が自分に突き刺さっているのを感じた。星本だ。彼の目は一人だけ笑っていないかった。彼の苛立ちの訳は、実にその携帯電話にあったのだ。私は着信履歴を見た時、思わずぎょとした。電話は下川さんから来たのだった。おそらく星本はそれを見たに違いない。他のコーチ陣が騒ぐ中、私と星本の二人だけは押し黙ったままだった。一時間もすると、ようやく閉会の時が来た。別れてタクシーに乗り込み、ホテルへ戻った。結局、星本とは別のタクシーになり、一言も口を効かぬまま部屋に散って行った。

またも下川さんにいい気分を削がれてしまった。いや今回はそれほどか、身の破滅に繋がる危険性すらあった。せつかく隠し通してきたのに、不用意な一本の電話のせいで、星本に感付かれたかもしれないのだ。本当に腹立たしくなる。そんな苛々した気分の中、電話は鳴った。

「はい……」

「おう、俺だ」

下川さんだった。

「まいったぜ。お前等があんなに強いとはなあ」

「はあ……」

「サインはお前の言う通りだったんだがなあ。お前んとこの奴ら、相当骨があるな。その状況下で三連勝だからな。まあウチが情けないというべきか……」

勝負師にあるまじき発言をする下川さんに、私は一層苛立ちを覚えてきた。

「すいません、疲れているんで……」

「おお、悪い悪い。用件だけ言うわ。別に大した事じゃないんだが……」

「何です？」

「わかつているとは思うが、優勝するのはウチだからな。まあどうやろうとお前の自由だが、最終的には丸く収まるようにうまくやってくれよ」

「えっ……」

「何だ、当たり前だろうそんなこと。ウチが優勝するのが大前提なんだから」

「そんな……、サインを教えるだけじゃないんですか？」

「俺もそれで済むと思っていただけだな、お前のチームなかなかやりおるからなあ」

「それじゃ一生懸命やっているウチの選手はどうなるんですか。サインだけでさえ、あんなに苦しんでいるというのに……」

さすがの私も、理不尽な物言いに頭にきた。

「何だ、お前、フェニックスを優勝させる気でいたのか？」

だが、下川さんはさらにとんでもない事を言い出した。

「あ、当たり前じゃないですか。監督をしているんですよ」

「そうか、そいつはちよつと勘違いをしていたな。俺はてつきりお前が身も心もスターズに捧げてくれていたとばかり思っていたぞ」

「スターズに愛着があります。ですが、今はフェニックスの監督ですから」

「ふん。そんなのはわかりきってる事だ。要するに俺が聞きたいのはお前がどういう気でいるかだ」

「私にどうしろと？」

「別に……どうしろって事はないさ。お前の自由だ。ただし条件付きだな」

「条件……」

その条件とは家族の安全だった。それをちらつかされると手も足も出せなくなる。

「どうするシゲ？」

「わかりました。スターズが優勝するように努力します……」

言いながら私は齒を食いしばっていた。こんなに悔しい思いをしたのは初めてだった。

「よし、それだけ聞きたかったんだ。これで安心したよ。それじやまた球場でな」

と言つて下川さんは電話を切った。

私の胸には何とも虚しい気分だけが残った。がんじ絡めで逃げられない状況に陥ったようで、再びどうしていいかわからなくなってきた。下川さんには脅迫され、星本には疑われ、出口のない迷路みたいだった。今の私には解決策など考えもつかない。シーズンが終わったら、全てを捨てる決意は出来ていたが、このままでは秘密の保持や私の精神力が持つかも覚束なくなってきた。考えれば考える程、悪い未来ばかりが浮かび、私はまた寝付けぬ夜を過ごした。

12回表

翌日は広島への移動日だった。私は意図的に星本との接触を避けた。何を聞かれても、嘘を言うだけだし、下手をすればボロが出かねなかったからだ。何か気付いているのか、星本の方もわざと何も言つてこない風である。冴えない表情の私と対照的に、選手は皆いいムードだった。スターズに三連勝した事で自信を深めたようで、誰もが精悍な顔つきをしていた。この日は軽く練習して、各自宿舎で静養した。私も具合が悪いと偽り、部屋に閉じこもった。

そして広島サーモンスとの三連戦、私の采配は的確さを欠いた。余計な事ばかりが頭にあつて離れず、適切な状況判断が出来なかったのだ。下川さんの言葉が耳に残っているようで、私を悩ませ惑わせた。バントのサインを出し損ねたり、間違つた局面で待球戦法を取らせたりしてしまった。ただ、選手達の勢いは落ちていなかった。私のミスを補つて余りある活躍をし、辛くも二勝一敗で勝ち越した。「おい」

帰りのロッカールーム、ついに星本が声を掛けてきた。ちょうど皆が着替えをしている最中で、辺りには誰もいなかった。

「うん、どうした？」

平然と応えたが、私の鼓動は急激に速まっていた。

「どうしたはこっちのセリフだけ。どうなつてんだ、この三連戦の采配は？」

「す、すまない」

「謝るつて事は何か理由でもあるのかよ？」

「い、いや。ただ、ちよつと集中出来てなかったのは事実だ。皆に迷惑を掛けた、申し訳ないと思つている」

「何故、集中しない？こんな大事な時に。それが出来ない男じゃない筈だぜ。よつぼどの事があつたのか？」

「別に……少し体調が悪いくらいで……」

実際、連日の寝不足で私は焦燥しきっていた。

「ふーん……」

そう言つと、星本は腕を組んで考え込むような仕草を見せた。そしてしばらくして口を開いた。

「一つ聞いていいか？」

「ああ」

「この間飲んだ時、あんたがトイレ行つてる間に電話が来たよな。悪いが着信を見ちまつた。俺の見間違ひじゃなければ下川さんから電話が来てた……」

星本はそう言つて私の顔を見回した後、吐き出すように言い放つた。

「おかしくねえか？何で負けたばかりのチームの監督が、勝ったチームの監督に電話してくる？俺はずっとそれが引つ掛かつていた。疑うようで悪いが、ちゃんと説明してくれねえか？」

ついに来た。最も恐れていた事が現実になつてしまった。星本の追求からは逃れられそうにない。私はどう答えるべきか迷つた。打席で考えがまとまらない内に、150km/hの速球を投げ込まれたかのような心境だ。そして咄嗟にこう言つた。

「何もない。私は電話に出てないし、あの後掛かつてはこなかった。あの人が何を考えているのかはわからない。本当に私もよくわからないんだ。でも君に着信を見られた気がして、気まずかつた……」

「そうか……」

星本は渋い顔で思慮にふける仕草を見せる。そしてこう言つた。

「あんたがそう言ふんなら、信じるよ。疑つて悪かつたな」

私の嘘は星本に通じたようだった。

「すまないな。もっとしつかりするよ」

「頼むぜ、俺達も補佐するからさ」

星本に肩を叩かれながら、ロッカールームへ入った。とりあえずこの場を繕えて、私は安堵した。

宿舎へ戻つた私は疲れのあまり、倒れ込むようにベッドに寝転が

った。精神的なストレスが最高潮に達し、身体機能まで狂わされている気がした。ただでさえ激務な監督業に、余計な事象が絡んできて私を惑わせる。何もしたくないくらいに疲れ果て、そのまま寝入ってしまった。

翌日から横浜ドルフィンズとの三連戦が始まり、相変わらず私の采配は冴えなかった。別に下川さんの言い付けに従い、妨害しようという意図があった訳でもないのにだ。自分の中にある「どうしたらいいのか」という気持ちだが、試合に集中させず、焦らせるのだった。結果、采配はちぐはぐなものとなり、選手をも惑わし、チームに敗北をもたらす事となった。

「本当に疲れているみたいだな。顔色も悪いぜ」

試合後、ベンチで一人沈む私を見て星本が言う。

「すまない……」

「明日一日休んだらどうだ？あんたの為に、チームの為にその方が良くねえか？」

「いや、しかしそんな事をしたら士気が落ちないかな？」

「まあ……な。しかしどっちにしたってこのままじゃ士気も上がらんよ。監督であるあんたが元氣なくっちゃな」

「そうだな。じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ……」

こんな風に言うのは私らしくないのかもしれないが、それだけ参っていた。一日でも休ませてもらえるのなら静養したかった。

「わかった。じゃあ選手や他のコーチには俺から言っておくから。ゆっくり休んでくれ」

星本の言葉をありがたく頂戴して、私は一日休養する事に決めた。

12回裏

一流選手には運を引き寄せる力もあるという。「運も実力の内」という言葉は如実にそれを表わしている。自分が一流かどうかはともかく、私はツイていた。休養をもらったその日、晴れの天気予報は外れ、激しい雷雨が関東圏を襲った。

「あーあ、幻の采配になっちまったな」

私の代わりに指揮を取る筈だった星本がふざけた調子で言う。

「天は我を見捨てなかったかな……」

私は一日休養が取れると思うだけで、心休まる気がした。例の下川さんの電話以来、ずっと気持ちが張り詰めていた。いや電話以前から不利な状況でのスターズ戦を見守る時点で精神は浪費されていた。この一日がどんなにありがたいか、他人には知る由もないだろう。屋内練習場での軽い調整練習を見守った後、私は久しぶりに都内の自宅へ戻った。

「まあ、あなた、お帰りなさい」

妻の亜紀子が驚いた顔をして出迎えた。何も連絡せずに帰ったのだから無理もない。新潟では単身赴任状態だし、遠征となればチームと共にホテルに泊まるので今シーズン、ほとんど家に帰っていないかった。オールスター休みの間に少し戻ったくらいである。もつとも、スターズの件で心配はしていたので、頻繁に電話は入っていたが。

「雨で試合が中止になったもんでね、時間も取れたんで帰って来たよ」

「最近、調子が悪そうだから子供達も心配してたんですよ。何か顔色も悪いみたい……」

「そ、そうかい？」

「ええ。せっかく帰ってきたんだし、とにかく中に入ってゆっくりして下さい」

私は妻に導かれるまま、邸内に足を踏み入れた。

居間に入ると、すぐにソファ―に身を沈めた。深く腰掛けると全身の力が抜けていくようで、何とも心地良い。

「さあさ、召し上げれ」

すぐに妻がお茶を運んできてくれて、くつろげる場を実感した。

「パパあ」

邸内に地震のような響きが起こり、騒がしい声と共に次男克典が現れた。揺れの原因は、彼が凄まじい勢いで二階から下りてきた為だった。

「おお、克典」

飛び込んでくる息子を私は抱き上げた。子供のにこやかな表情を見てみると、今までの厭な事が嘘のように消えていく気がした。

「パパ、大丈夫？元氣ないみたい……」

「大丈夫さ。克典に会って元氣出てきたぞ、パパは」

それは嘘ではなかった。家族に会う事で私は活力を取り戻しつつあった。

夕食時には一茂も美奈も帰ってきて、久々に賑やかな時間を過ごせた。子供達は皆、最近の私やチームの事を気に掛けてくれていて嬉しかった。この子達の期待に応える為にもすっかりなくてはいけないと思った。同時に絶対に守り抜きたいとも思った。久しぶりに妻と共にベッドに入り、私は彼女を始めとする家族の愛を実感したのだった。

運良く翌日も雨で試合は流れ、選手の疲労もたまっているのので完全休養日にした。図らずももう一日家でくつろぐ事が出来て、天に感謝した。そして書斎で一人、今後の事を考えた。やはり家族の命には代えられない。だが手を抜いたり、サイン以外に内部妨害みたいな真似をしてフェニックスを陥れたりするのも男としてやりたくないかった。

結局、当初の考え通りにスターズにサインだけは流しつつ、全力でシーズンを戦うしかなかった。その上でスターズの成績を上回り、

優勝するなら仕方がない。どの道、今シーズンで球界を去る覚悟は出来ている。家族さえ守れるのなら、フェニックスを優勝に近付ける方がいい。本当に家族を心配するのは、ギリギリの状況になっ
てからだ。いざとなればボディガードでもSPでも頼んで、保護してもらおう事だつて出来る。約束だからサインは流す、だがそれ以上は絶対にする訳にはいかない。私の人間としてのプライドがそう自分に語っていた。

家で休み、なおかつ家族とゆっくり過ごせたのは大きかった。心身共にリフレッシュして活力が戻ってきた。翌日から新潟へ帰って大阪ナナバースとの二連戦だったが、ここ数日とは全然違った気分で球場入り出来た。

「おつ、随分いい表情になって帰って来たじゃないか」

と星本が言つたのも、お世辞ではないだろう。自分で鏡を見ても、不調時とは遥かに顔付きが違っていた。

そんな私の気分がチームにも影響したのか、この日は投打の歯車
が噛み合い久しぶりに大勝した。私の采配も迷いなく選手を動か
し、常にうまい具合に作用したのだった。自分で言うのも何だが、この
チームにおける私の役割が如何に大きいものか、身を以て知る事
となった。

チームは勢いに乗じて連勝、首位スターズと付かず離れずの一
ゲ
ーム差をキープしていた。我々も勝つが、スターズも負けない。二
強四弱の構図が完全に出来上がっていた。どうも下川さんはウチ以
外の他球団に対しても何かを握っているようだった。いくらスター
ズの戦力が整っているとはいえ、勝ち方が普通じゃない。ことごと
く相手チームの作戦は失敗していた。今となつては下川マジックな
どと評されるサイン見破りは、そのほとんどが密通もしくはスパイ
行為によるものと思われた。元々強い上に、相手のサインを知つて
いるとなれば、勝率が高くなるのは当然である。そう考えると、サ
インを知られてなおスターズと張り合えるフェニックスの強さは相
当なものなのだ。私は改めてチームに誇りを持った。

「一体どうなつてんだ？」

ついには下川さんから抗議にも等しい電話が来た。

「別に意図はありません。ウチがこのくらいやった方が盛り上がりますよ。最後に優勝するのはスターズですから」

私はこんな事をうそぶけるくらい、精神的に余裕が出てきた。何でもかんでも下川さんやスターズの思い通りにさせる訳にはいかない。少しは苛立たせるくらいの事をしなければ、こちらの気が済まなかった。

「そうか。まあわかつてるんならいい。頼むからな、シゲ。二年連続で優勝を逃す訳には絶対にいかないんだ」

「ええ。大丈夫です。このまま勝ち進んだウチをスターズが破り、優勝するシナリオですから」

「頼んだぞ。それじゃあな」

受話器の向こうで下川さんがどんな表情をしているのかはわからないが、安心してゐるに違いない。だが、この一年間私を追い込んだあの人をそのまま見過ごしはしない。最後には下川さんもともケリを着けるつもりだった。あの人は私にとって善悪含めて大きな存在だった。長いプロ生活のほとんどを共にした人だ。ここまで来たら、共に球界を去ってもらう。私にはその決意が固まっていた。

13 回表

そしてあの三連勝以来のスターズとの直接対決の時がやってきた。ゲーム差は一のままで、どちらかが連勝するようだと一気に引き離す可能性のある天王山だ。マスコミもこの対決をこぞって煽り、各紙の一面はS O天王山決戦で持ちきりだった。敵地東京ドームは超満員、試合前から球場が唸りを上げていた。

「よし、やってやるうじゃないか」

選手達は敵地の大声援にも負けん気を出して闘志を燃やしていた。相当この前の連勝が大きかったようだ。

「よし、みんな勝つぞ」

私もゲキを飛ばした。サインの件はあっても、やれるだけの事はするつもりだった。事実、今のフェニックスならば不利を跳ね返して勝利する事も夢ではない。選手は皆、見違える程の体力・技術・精神力を身に付けており、実力的にはスターズと五分を張れる、その確信はあった。

その目論み通り、試合はがっぷり四つの緊迫した展開となった。サインが漏れていなければ、間違いなくフェニックスが押している内容だった。大事な所で次々に作戦が失敗する為、決定機を作れないのだ。盗塁が二度失敗、ノーアウト三塁で出たランナーをスクイズ失敗で返せず、という情けない有様だった。全て私のせいである。それでも先発吉田は踏張った。毎回ピンチを迎えながらも威力のあるストリートで要所を締め、七回までスターズを無失点に抑えていた。それはサインが分かっているもジャストミートが難しい程だった。が、ただ一球の失投が勝敗を決めた。三番衛藤に対して高めにストリートが甘く入り、レフトスタンドに運ばれてしまったのだ。この一球が全てだった。フェニックス打線は相手先発下原に抑えられ、完封負け。一点に泣いた吉田は試合後、号泣していた。それを見て私は申し訳ないと思ったが、以前ほど気にするのは止めた。

もうそんな事を考えてもプラスにならないのはよくわかっている。

懺悔は全て終わった後にする、だから負けたものは引きずらず、次の勝利へ邁進するしかない。今までのように後悔や謝罪の念があつても、どうにもならないのだ。ようやく私の中にも真の確固たる意志が出来た。

「吉田、ナイスピッチングだ。次も今日の調子なら勝てる。だから気にするな」

私はタオルを被って俯く吉田に声を掛けた。

「監督……」

顔を上げた吉田の目は真っ赤になっていた。

「すみません、俺が打てなかったから……」

脇から西沢が頭を下げる。

「何を言う。今日の下原からそうは打てないさ。誰のせいでもない、私のせいだ」

私は謝る西沢を制して言った。選手達は知らないだろうが、本当にそうなのだ。こんな謝罪では済まない大罪を犯しているのだ。

「そんな監督……」

「さあ、もう今日の事は気にするな。明日勝てばいいんだ」

「はい」

周りにいた選手全員が返事をした。こんな励まししか私には出来ない。しかし、それに応えてくれるのがこのフェニックスの選手達なのだ。強力なチームワークで今日の敗戦を取り返してくれる筈だ。翌日の二戦目も激戦となった。相手先発のレイは乱調で、初回からウチは三点を先取。しかしスターズもただでは転ばなかった。こちらの先発ウイルソンは待球戦法を取られ、ナックルを全て見逃された。そしてストレートだけを狙われた。

「分かっているけどナックルは打てない」今までの対戦の中で、下川さんが出した結論であろう。ウイルソンの球はフォームで見破れるような代物ではない。まさにサインが分かっているからこそ出来る芸当だ。この日、スターズの打者は明らかに一球一球の間が長か

った。一球ごとにこちらのサインを読み、待球と打ての指示を出し分けしているのだろう。ナックルになるとストライクでも打たなかった。

「おかしい……。明らかにナックルだと分かって見送ってやがる」
異変に最初に気付いたのは星本だった。

「うむ……」

私に答えられるのはそれだけだった。それ以上口を開けばどんなボロが出るかもわからないからだ。

ウイルソンは打ち込まれた。ストレートばかりを狙い打たれ、衛藤・ガンズに連続ホームランを喫した。さすがに私も彼を交代せざるを得なかった。だが後続もまた打ち込まれた。初回のリードはあつという間に三点のビハインドとなっていた。

しかしこちら相手投手の乱調に付け込み打ちまくった。試合は壮絶な乱打戦となり、こちらが点を取れば、その裏スターズも反撃する。九回表を迎えて、何と9 - 10というスコアになっていた。この回先頭の七番丸山が三塁打を放ち、同点のチャンス。ここで私に大きな選択の機会が訪れた。普通ならスクイズのサインで一点入る場面だ。だが、サインは相手に筒抜けだ。間違いなく失敗するだろう。かといって強攻策に出るのも、チーム内、特に星本に疑いを抱かせる事となる。私は迷った。

結局私はスクイズのサインを出した。当然、相手に読まれて失敗した。

「あーっ……」

というため息がベンチに充満する。このまま試合は終了し、この大事な一戦を落としてしまった。この敗けは大きい。こんな大事な所で私の選択が勝敗を決する皮肉な結果に終わってしまったのだから。

ついにフェニックスは崖っ淵に立たされた。ここで三連敗を喫すれば、優勝の芽は一気に遠退く。私は先発に酒井を立てて、背水の陣を敷いた。

「絶対勝ちます」

そう言ってマウンドに上がっていった酒井は、確かに抜群のピッチングを見せた。初回から快調に速球を投げ込み、スターズ上位打線にまともにバットを振らせなかった。

「よし、今日は勝つ」

一番吉原が気合いを入れてバッターボックスに入った。打ち気満々に打席内で素振りを繰り返す。それを見たスターズ先発桑畑は、はぐらかすように緩いカーブを放ってきた。

「うまいっ」

私は思わず叫んだ。吉原は三塁線に見事なセーフティバントを決めたのだった。打ち気に見せて、投手のはぐらかすような変化球を誘い、それを心憎いまでの技ありのバント。相手野手は一步も動けなかった。

動揺したのか、桑畑は直後にワイルドピッチ。吉原は労せずして二塁を陥れた。二番殿村は三振に倒れ、三番ジョーンズを迎えた。いつもは陽気なジョーンズも、この試合の重要性をわかっているように、気合いの入った真剣な表情をしていた。

「カマーン」

桑畑を睨み据え、挑発するジョーンズ。桑畑はムツとしたようで、荒々しくロージンを投げ捨て、投球モーションに入った。怒りの内角ストリートがジョーンズを襲う。

「Hey yo」

そんな叫びを揚げながら、ジョーンズは強振。デッドボールすれの球だったが、彼はそれをジャストミートし、レフトスタンド最上段まで運んだ。桑畑はがっくりとうなだれる。決して打たれるような球じゃなかったから、気持ちわかる。威嚇のつもりで内角をえぐったのだろうが、ジョーンズは予想外にもそれを打ってきた。大リーガーの潜在能力がそうさせたのか、はたまた彼にはヒッティングゾーンだったのか、とにかく度胆を抜く一発で一気に流れを引き寄せた。続く西沢、山下が連続ヒットで出塁。六番須藤が倒れた

ものの、七番丸山が外角の球をうまく合わせて二点タイムリー。

初回から四点のリードをもらった酒井は勢いに乗った。重くキレのあるストリートで押し込み、相手打者の打球を外野にすら運ばせない。怪力ガنزがジャストミートしたかに見えた打球も、失速してショート後方のフライに仕留めた。

結局、酒井は内野安打を許したのみでスターズに三塁を踏ませず、完封勝利を収めた。彼の活躍で我々は何とか優勝圏内に留まること出来たのである。崖っ淵の勝利でチームのムードもいい方へ向いた。次にスターズと当たるまでに大きな連敗を喫しなければ、まだまだ優勝の可能性はある。

チームのムードは確かに上がった。しかし問題が一つ浮上した。「おい、ちよつといいかい？」

球場から戻り、ホテルの部屋でのんびりし始めた頃、ドアをノックする者があった。

「やあ、どうしたんだい？」

来たのは星本だった。

「ちよつと話したい事があつてな」

「そうかい。じゃあとりあえず上がれよ」

私は彼を部屋に招き入れた。狭いホテルのシングルルーム、部屋の真ん中に置かれた小さなテーブルを囲んで、私達は腰掛けた。星本の表情は険しく見えた。

「で、どうしたんだ？」

お茶を入れた後、なかなか話が進まないで私から切り出した。

「実はな、この三連戦……」

「ああ。何とか最後に勝てて良かったよ」

「いや、そうじゃなくて、一つ気付いた事があるんだ」

「気付いた事……、一体何だい？」

「明らかにスターズはこちらのサインをわかっているって事だ」

と星本が言い放った時、私は内心震え上がっていた。

「サインを……」

「そうだ。前々からそんな気がしていたが、やっぱりそうだった」

「そんな、何を証拠にそのような事を……」

「スターズ選手の動きだ。奴ら、明らかにこちらが打つ前、投げる前に動いている。バントのサインを出せばピッチャーが投げる前から野手が前進、ウィルソンがナックルを投げれば全て待球、といった感じでな」

「そんな事が……」

「ああ。俺も自分の目を疑ったぜ。だが、事実だ。俺はこの三連戦、ずっと相手の観察に努めてきたが、どう見てもサインを分かっているとは思えない動きが多過ぎる」

「あらかじめ予期して動いていると？」

「そうだ。間違いない」

と星本が言うと、場には沈黙が流れた。私は焦っていた。星本はスパイ行為に完全に気付いている。という事は私を疑ってここへ来たのだろうか、そんな風に思えてきて一層この沈黙が恐ろしくなった。

「それでさ」

不意に星本が口を開いた。

「あんたに聞きたい事がある」

「何だい？」

私は冷や冷やしながら尋ねた。

「あんたの現役時代はどうだったんだ？昔から下川さんはサイン見破りの達人なんて風に言われていたが……」

「現役の時……」

正直安心した。星本は直に私を疑っている様子ではなかったからだ。

「あんたらどういう風に動いてたんだ？あんたが現役の時も、下川さんがサインを見破った事があつただろう？」

星本は実に理に適った質問をしてくる。もつともない分だ。元々サインの見破りは下川さんの専売特許と言われているもの、以前

からの様子を私に聞くのは筋道が通っている。

「私達は……下川さんの指示通り動いていた。次の球はカーブだとか……」

私は正直に答えた。裏にある真実を除いてだが。

「なるほどな。じゃあ選手はわかってなかったって事か？確かにそれもうなずける。ウイルソンとの対戦の時、奴らやたら一球一球に時間が掛かっていただけからな」

「相手のサインがこうだとか、具体的には何も聞いていない……」

「そうか。それじゃ下川さん一人が全てを知っていたのか？」

「それはわからない。私達は下川さんが言う事に間違いはないと信じてやっていただけだから」

「なる程な。じゃあ今の選手も同じだな。多分、下川さんの指示通りにやっているんだろう。ただし……」

ここで星本は一度言葉を切つて、私を睨み据えた。そして

「それはあんたが本当の事を言っていたらだがな」と言い放った。

「な、何を言うんだ」

「悪いが、元スターズのあんたは一番信用出来ねえ。スターズ戦に限ってあんたの采配はおかしくなる。確かに下川さんが一枚上手なのかもしれないし、古巣という苦手意識があるのかもしれない。しかしあの動きを見た今、そういう理由だけとは考えられない。絶対にサインが盗まれている。となるとあんたを信じたいが、疑わざるを得ない……」

「星本君……」

「敢えて聞きたい。本当に何も知らないのか？」

「知らないさ、どうして私がそんな事を知るだろう……」

私は心にやましい気持ちがありながらも、ここはきっぱりと否定した。

「俺もその言葉を信じたい。だが、サインが筒抜けになっているのは間違いない。じゃあ具体的にどうするというんだ？何か方策はあるのか？」

るのか？」

「そ、それは……」

私には答えようがなかった。事実、サイン流しの真犯人なのだから。

「だろう？ そんな流れの今、あんたを信じろったって無理だ」

「だけど、何とかするさ。私はフェニックスの監督なんだから」

「ああ、それを期待しているよ。まあどうであれ、俺は必ずこの事実突き止めてやるからな。力と力の勝負であるプロ野球をこんな形で汚す奴は絶対に許せねえ。もし下川さんが本当にスパイ行為をしているという事実を掴んだなら、法的手段を使っても訴えるつもりだ」

「星本君……」

「気を悪くしないでくれよ。俺だってあんたと協力したいんだ。ただ、ちよつと客観的な目で見させてくれ。俺はこの事態の解決に全力を尽くす。あんたはチームを頼む」

「うむ。私も何かわかったら知らせるよ。チームも何とかする」

「頼んだぜ。それじゃ、邪魔したな」

星本は軽く私の胸を拳で小突くと、去って行った。

ついに星本が気付いてしまった。私を見る目はまだ半信半疑のようだが、いつ気付かれるかわかったものではない。今後、背後から懐剣を突き付けられているような心地で戦っていかねばならないかと思うと、気が重くなる。

しかしある意味、これで本当に覚悟が決まった。もはや抜き差しならぬ状況なのだ、やれる事を思い切ってやるしかない。星本には悪いが、だまし通して最後に告白するつもりだ。その後、下川さんやスターズの悪事が公表されるのも別に構わない。私には球界から消える覚悟は出来ていた。

あとは今年、悔いを残したくないだけである。チームを出来る限り勝利に導き、家族の安全も守りたい。ただし家族が最優先なのは否めない。それが足枷となり、スターズ戦の大敗記録を作る事とな

ったのだ。だが、もし今シーズン優勝を逃しても、彼らなら不利のない来年はやってくれる筈。少なくとも来季に繋がるチーム作りはしなければならぬ。今年でお別れとなる選手達に、やれるだけの事はしてやりたかった。フェニックスの有望な選手達、彼らをもっと伸ばしてあげたい。それが私のプロ野球生活最後の仕事だ。

13 回裏

翌日からは名古屋へ遠征しての三連戦。優勝争いに踏み止まれるかどうか、真価を問われるロードだった。先発に畑田を立てて臨んだ我々は初回到二点を失うと、氣負ったのか凡打を繰り返し得点出来ないまま九回表を迎えた。

「みんな、この試合の大事さはわかっているな？」

私は敢えてプレッシャーを掛けた。

「はい……」

しょぼくれた感じながらも皆が返事をした。

「だったらこの状況、優勝争いをしているという状況を楽しもうじゃないか？今日のみんなは試合を楽しんでないぞ」

「すいませんでしたあ。また前と同じ事繰り返すところでした。楽しんできます」

と言って打席へ向かったのは、この回先頭打者の吉原だ。彼は打席に入る前に、見てる方までが気持ち良くなるくらいの豪快な素振りをした。そして

「よし来い！」

バットを構え打席で吠えた。相手ピッチャー抑えのエース石瀬は意に關せずといった表情で投げ込んでくる。

「よしっ」

私は思わず手を叩いて叫んだ。吉原は巧みなバットコントロールでライト前ヒットを放ったのだ。自分でも納得がいったのか、彼は塁上でガッツポーズをした。

「さあ、みんな、吉原に続くんだ」

「はいっ」

一気にベンチのムードは盛り上がった。二番殿村がライン際ぎりぎりの自分も生きるバントヒットで出て、ノーアウト一塁二塁の大チャンス。

しかし石瀬も意地を見せる。ストレートを見せ球にして勝負球にフォークを使い、三番ジョーンズを三振に斬ってとる。

「ようしっ」

気合いを入れて打席に向かったのは、四番の西沢。バットに念入りにスプレーを吹き付けた後、一回素振りをしてバッターボックスに入る。いい構えだ。キャンプから取り組んだ打撃フォーム改造の成果が結実したかのようだ。

石瀬はストライクを先行させ、早くも西沢を追い込んだ。だが西沢の表情に焦りの色はない。むしろこの状況を楽しんでいるように見えた。先程の私の言葉をしっかりと受け止めてくれているようだ。そしてここからの彼は実際に凄かった。何と八球連続ファール。キレの良さで定評のある石瀬のフォークまでカットした。

「西沢さん凄い。イケますよ」

ベンチの選手達も皆、身を乗り出して声を揚げていた。この時、まさにチームは一体化していた。

そして西沢は皆の期待に見事に応えた。十一球目、石瀬の放ったフォークをすくい上げるような打ち方でレフトスタンドに放りこんだ。逆転スリーランが飛び出し、ベンチも一斉に湧いた。全員総出で西沢を出迎え、身体を叩いて賞賛する。

九回裏は抑えの切り札山田を投入。土壇場逆転の勢いに乗って三人で締め、快勝した。

この逆転勝ちがチームを活気付かせた。翌日からフェニックスはその名の通り不死鳥の如く、快進撃を続けた。選手は私の言い付け通り、プレッシャーを楽しむかのようにプレイした。それが投手は好投、打線は爆発する結果に繋がったのだ。ついには何と負け知らずの十連勝を飾り、その間三敗したスターズから首位を奪回したのだった。

そしてまたしてもスターズとの直接対決を迎えたが、各試合とも大味な試合となり一勝一敗に終わった。そしてペナントレース終盤にもかかわらず決定的差が着かないまま、優勝の行方は一ゲーム差

を行ったり来たりしながらもつれ込んでいった。どちらのチームにもマジックが出ない異例のデッドヒート状態に、周囲の沸き上がり方も凄まじかった。

事実、フェニックスの選手の活躍は目覚ましかった。何といても西沢が51本塁打122打点で二冠をほぼ手中に納めているのが大きい。図らずもキャンプでの私の予言が当たった訳だ。さらに丸山が首位打者と盗塁王に迫る勢い、吉田とウイルソンが19勝でスターズの下原と最多勝を争っていた。主要個人タイトルを総ナメしそうな勢いであり、優勝争いするだけの実力を十分に示していた。というよりも独走で優勝しないのが不思議なくらいだった。全てはスターズとの密約の為せる業であった。

そして事態はとんでもない局面を迎えた。何と我々とスターズが同率首位で最終戦を迎えたのだった。それも直接対決で。

前日は東京への移動日で、軽い練習の後ミーティングを行なった。決戦を前に私の心は揺れていた。このままスターズにサインを知らせたまま、戦いに臨めば敗北は必至。それを知りながら、今まで一生懸命やってきた選手を戦わせる事は忍びなかった。今更こんな事を考えるのは偽善なのかもしれないが、局面が局面だけにさすがに一考を要した。

「監督、明日は絶対に勝ちますよ」

選手達は早くも興奮していた。競馬で言えば多少イレ込み気味な感じだ。

「まあみんな、落ち着くんだ。明日は勝った方が優勝という異様な状況だ。こういう時は平常心でプレイした方が勝つ、今から意気込んでいては明日まで持たないぞ」

「オッス」

「私には同様の経験があるが、あれは本当に異様なムードだった。一球一球に両チームのファンが過敏に反応する。敵は相手だけじゃ

ない、観客とそして自分自身をも考えて戦わなくてはならないんだ」
私は現役時代、今回同様最終戦で優勝を決める試合を味わっていた。その名古屋シャチホコズとの一戦は熾烈を極めた。一球ごとに球場全体が沸き返り、審判の判定も揉めに揉めた。まるで夢のように、プレイしている自分がそこにいるのかどうかもわからない浮ついた気分がした。そんな中、私は決勝ホームランを打った。あの時の、球場がうなりを揚げたような盛り上がりは今でも忘れない。結果、私達は勝利して優勝を手にしたのだった。

「監督、俺達は大丈夫でしょうか？」

西沢が心配そうな顔をして言う。

「大丈夫だ。確かに今までスターズに対して分は悪かったが、明日は一発勝負だ。過去の成績など一切関係ない。明日に全てを掛けて集中するんだ」

「はいっ」

選手全員が返事をし、明日に希望を持った形でミーティングを終える事が出来た。

そして私は星本と二人で監督室に残った。互いに話さなければならぬ気がしたのだろう、どちらからというでもなく私達は二人きりになった。

「ついにこの時が来たな」

星本から話を切り出してきた。

「ああ。まさかこんな事になるなんて思いも寄らなかったよ」

「ふん、サインさえ漏れていなければとくにウチが優勝していたさ」

「星本君……」

「結局、誰がサインを流したかはわからなかった。このままでいいのか？明日負けちまうぞ」

「む……」

「それともやっぱりあんたがやってんのか？このまま無為無策でいいのなら、そうとしか思えんな」

星本の追求は鋭くしつこい。彼自身、明日の勝利に自信がないのだろう。焦っている様子がうかがえた。

「星本君……」

私は意を決して言った。

「明日に全てを賭ける。だから明日が終わるまで待つてくれ」

「待つ？そりやどいう意味だよ。やっぱりあんたが何か関わっていたって事か？」

「どう思おうと君の勝手だよ。ただこれだけはわかってくれ、私はこのチームが好きだし当然勝たせるつもりで監督をやってきたって事を」

「それは……わかってるつもりだ」

「それなら、明日だけでも私を信じてくれ」

「信じると言われてもな……」

「頼む！」

私は星本の両肩を掴み、彼の顔を見つめながら言った。

「わ、わかった、信じるよあんたを」

私の迫力に気圧されたのか、星本は頷いた。

「ありがとう」

私は軽く頭を下げると、部屋から去った。

星本にああは言ったが、正直どうするかは決めかねていた。明日で全てにケリが着くのは間違いないが。久々に自宅へ戻る車中もずっとそればかり考えていた。

突如、急ブレーキの音が響いた。狭い通りで私の車が反対車線の車と接触しそうになったのだ。考え事をしていて、しっかり前を見ていなかった私の不注意である。幸い相手にケガや車の損傷はなかったようだが、停車したドライバーは車から下りてこちらへ向かってくる。

「オラア、何処見て走ってんだ」

車のドアを叩き、男が吠える。

「すみませんでした。ついブーツとしていて……」

私はすぐさま車から出て、頭を下げる。

「バカ野郎、ブーツとしてたで済むと思ってんのか」

私は相手に胸ぐらを掴まれた。

「うつつ……」

苦しくなつて顔が上を向く。すると、

「あわわ……」

相手は突然恐れだして手を放した。そして

「すみません、すみません」

と平謝りに謝りだした。

「あの……、どうかしたんですか？悪いのはこちらの方だというのに……」

「フェ、フェニックスの王嶋監督ですよね？」

「そうですが……」

「そうとも知らず無礼な真似をして……申し訳ありません」

男は道路に平伏して詫びる。

「いやいや、止めてください。私がよそ見をしていたんですから」

私は男の手を取って立ち上がりさせる。

「き、恐縮です……」

「いえ、本当に申し訳ありません。あなたが避けて下さらなかったら、明日の試合に臨めなかったかもしれません」

「そんな……。あ、明日の試合、頑張つて下さい。私、スターズファンでも王嶋さんのプレイに憧れていました」

「ありがとうございます」

「今年、監督を始められて、いっぺんにフェニックスのファンになりましたよ。今年のフェニックスの選手のプレイ振りは全盛期の王嶋さんを思わせるものがあります。監督としても活躍されて、本当に凄いです」

「はは、どうも」

私はあまりに褒められるのでくすぐったくなってきた。

「明日は絶対勝って下さい。今日会えて光栄でした」

一礼して男は去って行った。

私は運転席に戻り、再びハンドルを握った。そういえば前にもこんな事があった。現役を引退した日の帰り、同じように考え事をしていた事故を起こしそうになったのだった。あの時の私は先行きに大きな不安を抱いていたものだ。

しかし、あれから私は何とかやってきたではないか。先程のドライバーも、フェニックスの監督になってやってきた事をちゃんと評価してくれていた。スターズファンからフェニックスファンに変わったとまで言われて、正直嬉しかった。ならば明日はその成果の集大成ではないのか。明日が私のプロ野球での最後の試合になる事は間違いない。もしこのままサインを流した状態で試合をしても、勝てる確率は20%もないだろう。それで自分に悔いは残らないのか？いや、残るだろう。私は前方に注意をしつつ、再度考えた。

自宅に戻ると、子供達が飛び出すように出迎えてきた。

「パパ、お帰りなさい」

子供が三人共寄り添ってきて、私にくっついた。

「ただいま。みんな、元気にしてたかな？」

「うん」

一番下の克典が元気に返事をした。

「パパ、もう夕御飯出来てるわよ」

美奈がそう言って手を引く。私もつられてリビングまで足を運んだ。

「いただきます」

家に着いたのは七時過ぎだったので、くつろぐ間もなく夕食のテーブルにつかされた。

「パパ、明日は優勝するよね？」

長男一茂が尋ねてきた。

「頑張ってみるよ」

「そんな弱気な事言わないで絶対に優勝して」

と美奈が言う。

「そうだよパパ、優勝優勝」

克典も同調する。

「みんな、そんなに優勝して欲しいか？」

「当たり前じゃん。何言ってるんだよ、パパ」

たしなめるように一茂が言う。

「優勝優勝っ」

克典も続く。

「パパが優勝してくれないと学校でみんなに恥をかくわ」と言うのは美奈。

「あなた、子供達はみんな期待しているんですよ」

「そうか……みんな勝って欲しいか……。よし、やるぞ」

ようやく迷いが晴れてきた。子供達に激励されて、勝つ意欲が湧いてきた。と同時に嬉しさで涙が溢れてきた。

「パパ、何泣いてるんだよ」

真っ先に見付けた一茂が指摘する。

「パパ、みんなが応援してくれて嬉しくてなあ……。見ていてくれよ、明日は絶対に勝つからな」

家族の前で意気込みを見せたその時、携帯電話が鳴った。

「はい」

「シゲ、今いいか？」

下川さんだった。

「ええ……」

私は皆に手で合図して、食卓を離れて自室に入った。

「シゲ、いよいよ明日だな。お前もうまくやったものだ。最終戦で優勝決定とは、スターズが輝くのには最高の舞台だよ。最後の仕上げも頼むぞ」

「はい」

私はとりあえず従順に応えておいた。

「この一年、本当によくやってくれたな。俺の後釜を任せるに十分

な活躍だ」

「ありがとうございます」

「後は明日だけだ。念を押すようだが、頼むぞ。明日の勝敗で全てが決まるんだからな。よく心しておけよ」

「わかってます」

「それじゃあな」

と言つて下川さんは電話を切った。

私は下川さんの勝負をバカにしたような発言の連続に、本当に憤りを感じていた。家族の声援でやる気になった私は、既に明日下川さんの言いなりになる気はなかった。かといって偽のサインを教えるとか汚い真似をする気もない。正々堂々と勝負するつもりだ。さてその方法だが……

14 回表

「ノーサイン！正気ですか監督？」

試合前のミーティング、私が告げた作戦に選手全員が驚きの声を揚げた。

「てめえ、何考えてんだ。勝つ気がねえのか」

いきなり星本が突っ掛かってきた。

「ある！勝つ為のノーサインだ。星本君、君の言う通り我々のサインはスターズに筒抜けになっている。だからこそノーサインだ。それならば互角に戦える」

「だからといってノーサインなんて、プロのする野球かよ」

「その言い方はおかしいな。サインなんか縛られなくてもいいプレイを見せるのがプロなんじゃないか。この一年それだけの力を着けてきている筈だ、違つかみんな？」

「おう」

「そうだ」

「やってやる」

そんな声が選手の間から沸き上がってきた。

「星本さん、監督の言う通りですよ。俺達はサインなんかなくつつてやれますよ」

と言ったのは西沢。

「戦い方は監督に教わりましたから」

と吉原。

「力と力の勝負でスターズに勝ちますよ」

と吉田。

「今までの借りを倍にして返してやる」

と酒井。その後も次々に選手の言葉が続いた。

「まいったな。お前等そこまで覚悟が出来ていたのかよ……」

星本は両手を広げて降参のポーズを見せた。

「あんた、やっぱり凄えよ。こいつらをこれ程信奉させるなんてさ」
「星本君、それじゃあ……」

「ああ、ノーサイン了解したぜ。それでいってみようじゃねえか。こいつらに覚悟が出来ているなら、俺がとやかく言う事はない」

「ありがとう。よし、それじゃノーサインでいくぞ。みんな自分の自由な発想でプレイしてくれ」

「はいっ」

気持ちいいくらい揃った返事が返ってきた。臨戦態勢は整った。

我々は闘志満々でベンチ入りした。

東京ドームは試合開始前から異様なムードに包まれていた。観客のほとんどがスターズファンで楽器と声でドーム内を揺るがしていた。まるでこれから戦争へ行く軍隊を見送る者達のようなだった。

「いいか、みんな周りを気にするなよ。自分のプレーに集中するんだ。そして戦っているのは自分一人じゃないって事を忘れるな」

開始前、私はベンチの皆を鼓舞した。

「ウッス」

試合が始まった。一番吉原が意気込んでバッターボックスに入る。相手の先発はエース下原。投球練習を見た限りでは調子は良さそうだ。吉原は食い付いていくが、速球のキレについていけず、三振を喫した。続く殿村・ジョーンズも連続三振。この快投に球場内は早くもヒートアップした。我々が守備につく間も声は止まなかった。

「嫌な感じだな」

星本が呟く。

「仕方ないさ、敵地なんだし。これに打ち勝ってこそ優勝出来るというものだ」

「ああ、そうだな」

「やってくれるさ、彼らなら」

と言うと、私は選手達に目を向けた。皆、多少堅くなっているようだ。表情は悪くない。常日頃から言ってきた「プレッシャーを

楽しむ」事が少しは実践出来るようになっていた。

こちらの先発もエースの吉田。中三日だが、本人の志願で登板の運びとなった。あの気分屋が、今はこんなにも頼れる男に変貌していた。この日も絶好調で、初回は下原同様三者連続三振の好スタート。三番衛藤はバットをへし折られての三振に、目を丸くしていた。「よし、いけるぞ」

初回の嫌なムードを吉田が振り払ってくれたお陰で、ベンチは活気付いた。この回先頭の西沢がやる気満々で打席に向かう。

今シーズン、西沢と下原の対決は熾烈を極めた。西沢が四割近く打っているが、その代わりに三振も多い。お互いに燃える事の出来る相手なのである。ちょうど現役時代の私と星本のような。

下原は相変わらず快調にストリートを放ってくる。球がホップして浮き上がるように見えるのは、調子のいい証拠だ。しかし西沢も負けていない。伸びのある速球にバットがついていつている。バツクネットに何度もファールが突き刺さった。下原は意地になって直球を投げ込んでくる。変化球を投げる気など全くないようだ。西沢も負けじとフルスイングで応戦する。今の下原の速球に思いきりバットを振ってついていけるのは、フェニックスでは西沢がジョーンズしかないだろう。

この時ばかりは超満員の観客も、水を打ったように静まり返っていた。二人の対決は六万人もの人間を沈黙させるに十分の見応えがあった。聞こえるのはボールがバットに当たる音とミットに入る音のみ。あまりの静けさに気味が悪いくらいだった。

ふと私は思った。下川さんはこの対決をどんな気分で見ているのだろう。あの勝利至上主義者はきっと苦々しく思っているに違いない。しかしこれが本当のプロの対決だ。私はこれを目に焼き付けて球界を去る。

十球目、ついに西沢のバットが快音を響かせた。打球はレフト方向へ伸びていく……ように見えたが、
「アウトッ」

審判の声が響く。レフトを守る西がジャンプ一番ファインプレイ。西沢の打球をもぎ取った。というより元々下原の球に詰まらされていたらしい。その証拠に西沢のバットは折れていた。

突然「グワアアアアン」という強烈な唸りが球場全体を支配した。観客が保っていた静けさを破ったのだ。ドームの屋根が破れてしまうのではないかと思われる程の轟音が鳴り響いていた。

そんな状態のまま打席に入った次打者の山下とその次の須藤は、もはや観客に飲み込まれていた。舞い上がってしまい、下原の速球に中途半端にバットを出してしまい、内野ゴロを連発。二回表も無得点のまま守備につく事となった。

調子がいいのは下原だけではない。吉田もかなり好調なようで、二回もストリートだけでスターズ打線をねじ伏せた。何しろ速球のキレが半端じゃない。あの大リーガーガングズのバットを折り、内野フライに打ち取る程だ。

試合は一進一退の攻防で、チームとしてもまずまずの出来なのだが、私個人としては気に掛かる事が一つあった。そろそろ下川さんがノーサインに気付くのではないかという事だ。もし気付いた時、どんな対応をするか、それだけが気掛かりだった。しかし今のところ、何の反応もなし。ただ、厳しい顔でこちらを睨んでいるような気はした。

三回表、トップバッターの丸山が三塁線へのうまい内野安打で初出塁した。当然サインは出さない。ここで下川さんに動きがあった。タイムを取って執拗に守備陣に指示を与えている。その合間合間にこちらのベンチを覗き込むような仕草を見せる。恐らくこちらから何のサインも出ていない事に気付いたからに相違ない。私は内心びくびくしながらそれを見ていた。

次の一球、うろたえる私や下川さんを嘲笑うかのように丸山が単独盗塁。目立ちたがり屋の本領発揮であった。これで完全に勘付いたらしく、下川さんはタイムを取って下原の元まで行った。そして話し終わってベンチへ戻る際、明らかにこちらを睨みつけた。私は

思わずベンチの裏に隠れた。

下川さんの指示が何だったかはわからないが、急に下原が牽制をする回数が増えた。二塁にいる丸山を釘付けにする腹積りらしい。ところが、制約という足枷を外された丸山はなかなかの曲者だった。下原をバカにするように大きなリードを取り、わざとらしく「リーリーリー」と声を出していた。そして下原が次の球を投げた瞬間、三盗を試みた。これもまたセーフ。元々センスのある男だけに、自由にやらせた時の力の発揮具合は大したものがある。

ノーアウトランナー三塁の大チャンスを迎えた我々だが、サインはない。八番富樫がどう出るか、私自身固唾を飲んで見守った。だがここは下原が踏ん張り、富樫を三振に斬って落とした。続くピッチャーの吉田も三振。せつかくのチャンスがあつという間にツーアウトとなつてしまった。

そしてバッターはトップに戻つて一番吉原。ここは何とかして欲しいものだ。今シーズンでの彼の成長振りを計る上でも重要な局面である。事実、あんなに脆かった精神面の弱さは見事に克服されていた。ここで一ついいところをみせてもらいたい。

しかし下原は速球を連投し、すぐに追い込まれた。吉原は二球とも見送ったのだ。その判断は間違っていない。あのキレのいいストリートに手を出しても、恐らく内野ゴロがせいぜいだろう。とはいえ、このままでは三振してしまう。案の定、下原は勢いのある球を投げ込んできた。

「ファール」

吉原は何とかカットした。よくバットがついていったものだ。そして吉原は次の球からも執拗に粘った。西沢と違いフルスイングする訳ではないが、うまくバットをコントロールして球を当てにしている。一番打者らしいいやらしさを発揮していた。

八球目、ついに吉原がライト前に快打を放った。丸山が還つて、我々が先制した。ベンチの選手はお祭騒ぎ。手を叩き、メガホンを振つてはしゃいだ。この熾烈な一戦においての先制点は大きい。選

手達が喜ぶのも無理はない。

下原はシヨックだったのか、次の殿村・ジョーンズに連続四球。ツアウト一塁・二塁で西沢に打席が回ってきた。再度のチャンス到来にフェニックスベンチは盛り上がった。しかし下原は崩れなかった。伸び上がるような速球を連投し、西沢はそれをバットに当てる事すら出来なかった。マウンドに仁王立ちして吠える下原に、大歓声が起こる。さすがにそう簡単に主導権を渡してはくれない。

とはいえ先取点を取った我々は、勢い込んで守備位置に着いていた。ここまでノーヒットピッチングの吉田は気を良くしたのか、さらに感じが良くなってきた。七番可愛・八番安部を二者連続三振に仕留める。ここでスターズベンチが動いた。下川さんがタイムを掛け、打席に向かおうとした下原を呼び付けたのだ。何やら言い含められて下原が打席に入った。

「何いつ」

思わずベンチの星本が声を揚げた。下原は普段と逆の左打席に入っただのだ。しかもバットを持つ手までが逆である。場内も湧いたり、怒声を飛ばしたり、異様な雰囲気になってきた。

少し苛ついた表情を浮かべて吉田が投球モーションに入った。投手とはデリケートなものでこういう時、集中力を欠く場合がある。案の定、下川さんの心理作戦に踊らされて、吉田は安全パイの下原に四球を与えてしまった。

調子に乗ったスターズは策を練ってきた。下川さんは選手にバント作戦を命じたようだった。打者はバントをすると見せ掛けて、投手を前進ダッシュさせてバットを引く。それに待球作戦を加えて、吉田を疲れさせる腹積りだ。相手の一番打者西は執拗にこの作戦を取り、揺さ振ってきた。そしてスリーバントが線上に決まり、出塁を許してしまった。続く志水も、吉田を動かしつつ彼に捕らせる絶妙のセーフティーバントでオールセーフ。吉田の顔に早くも疲労の色が浮かび始めた。

そしてツアウト満塁で迎える打者は三番衛藤。チャンスに強く、

恐い打者だ。が、意外にも衛藤も初球からバントしてきた。意表を突かれた吉田は動けない。同点を許してしまうかと思われたその時、サード丸山が猛ダツシュで打球を掴み取り、一塁に送球、

「アウトーッ！」

ファースト山下が懸命に身体を伸ばして衛藤の足よりも速くボールを受け、ぎりぎりのところでピンチを脱した。

「ナイスピッチ」

ベンチに吉田を迎えた時、彼は疲れ切っていた。今の局面で体力と同時に精神力も消耗したようだ。

「監督、次は俺に行かせて下さい」

と名乗りを挙げたのは酒井だった。彼は今日登板の予定ではなかったが、確かに休養十分、いつでもいける態勢が整っていた。私は彼に賭ける気になった。

「よし、頼むぞ酒井」

「はい」

酒井はブルペンへ向かって行った。

「よし、みんなもう一点だ。この回何とか取るぞ」

私は皆に声を掛けた。

「おう」

選手も再び気合いを漲らせた。

だが、気合いだけで勝てる程勝負の世界は甘くない。下原は快投を見せた。先頭の山下はデッドボールで出塁したものの、続く須藤・丸山・富樫を三者連続三振。下原の威力あるストレートの前に、こちらの勢いはあつという間に消沈した。

その裏、スターズは四番ガンズからの攻撃にもかかわらず、またもバント戦法を取ってきた。消極的と言えば消極的だが、ある意味下川さんになりふり構わず勝ちにきている証拠でもある。この回、点こそ取られなかったが、吉田はかなりの疲労を蓄積させられた。

「大丈夫か？」

ベンチに戻ってきた吉田に声を掛けた。

「ええ。まだまだ……」

とは言つものの、既に疲労困憊の様子は否めなかった。これだけプレッシャーの掛かる試合では想像以上に精神力を消耗する。その上、動き回らされては、一気にスタミナを消耗させられてもおかしい。

「よし、吉田ここまでよくやってくれた。次の回で交代だ」

私は決断した。このまま彼を引っ張るよりは、酒井を出した方が安全だと思ったのだ。

「そんな……、俺はまだ投げれますよ」

「それはわかる。確かにあと一・二回は持つだろう。だが、相手は百戦錬磨の下川さん率いるスターズだ。どんな手を使ってくるかわからない。だから疲れの見え始めた今、交代するのが得策だと思うが」

「俺もそう思うぜ」

割って入ったのは星本だ。ブルペンから戻ってきたらしい。

「奴らこの先何してくるかかったもんじゃねえ。ここらで代わっておけ、幸い酒井の調子もいいしな。仲間を信じて引っ込むのも勇気だぜ」

「はい……」

納得したのか、吉田はタオルを被り俯いた。彼の全身は小刻みに震えていた。悔しさで泣いているようだった。悔しくない筈がない。仮にもチームのエースたる男だ。途中で降板する事に大きな責任感を感じているのだろう。

「ナイスピッチングだったぞ」

私は顔を上げない彼の肩を軽く叩いた。

「か……んとく……」

「まだ終わりじゃないんだ。ちゃんとこの後を見るんだ。酒井はやってくれる筈だから」

「は、はい……」

ようやく吉田は顔を上げた。

試合はいよいよ中盤、五回に差し掛った。打順は九番からなので、代打町田を出した。が、あえなく三振。下原は回を追うごとに調子を上げていくようで、手の着けられない状態になってきた。そして一番吉原・二番殿村も連続三振。一点リードしていながらも若干沈滞ムードの中、いよいよ酒井がマウンドに上がる。

ベンチから見ている限りでは酒井の調子は良さそうだった。少しばかり意気込みが強過ぎるようにも見えるが、まず心配ないだろう。重そうなストレートをミット目掛けて投げ込んでいた。

酒井と対するスターズ最初の打者は八番安部。ルーキーにしてスターズ正捕手の座を勝ち取った実力者で、打撃には定評がある。今シーズン、ここまで三割の打率を残しているなかなかの強敵だ。しかし酒井はその男を難なく料理した。三球連続ストレートながら、安部のバットはかすりもしなかった。今日の酒井は相当球が走っているようだ。続く九番下原・一番西を簡単に打ち取り、流れを引き寄せた。

「よし、ここらで追加点だ」

バットを手にネクストバッターズサークルへ向かう西沢。この回は三番ジョーンズからのクリーンアップという好打順、絶好調の下原を崩せるか、重要な回である。

まずはジョーンズvs下原。下原は余程の自信があるのだろう、速球に強い外人と知りながらもストレートを投げ込んでくる。ジョーンズもバットには当たるが、ともにミートはしていない。結局キャッチャーフライに打ち取られた。

「よしっ」

軽く素振りをした後、西沢が打席に入る。スイングを見ると、とてもリラックスしていて期待が持てる。

この対決を迎え、場内は一気に盛り上がった。音のうねりが球場全体を貫いていた。一打席目は場内静まり返ったこの対決だが、この場面においては静まるどころか物凄い応援合戦の様相を呈した。

「しーもはら、しーもはら」

「に・しざわ、に・しざわ」

と巨大な声援が交錯する。

初球、下原は自信満々のストレートと真ん中。西沢はそれを打ちにいったが空振り。本当に速くてキレがある。今シーズン対戦した中で一番出来のいい下原だ。二球目もストレート、またしても西沢は空振り。早くも追い込まれてしまった。

「しーもはら、しーもはら」

ドーム内は下原を讃える声援で一杯だった。一点取られてからの内容は、ファンが大声援を送るだけの力を示していた。

下原は声援に後押しされて遊ばずに勝負に出てきた。高めに浮き上がるようなストレートがミットへ一直線に伸びる。

次の瞬間、快音が響いた。ミットへ突き刺さる筈だった剛球はバットに捉えられ、代わりにレフトスタンドへ突き刺さっていた。西沢は嬉しかったのだろう、派手なガッツポーズをしてダイヤモンドを一周した。

「グオオーン」と地響きにも似た衝撃がドームを揺らす。西沢の一発で球場内は天地が引つ繰り返ったような騒ぎだった。

フェニックスベンチも貴重な勝ち越し点に湧いた。特に途中降板の悔しさに泣いた吉田は飛び付いて西沢を祝福した。

「ありがとう、西沢さん」

酒井も西沢に駆け寄りハイタッチする。

「おう、このリードを守り切るぞ」

「ウッス」

「西沢、ナイスバッティングだ」

私も興奮していた。

「監督、やりました。この大事な試合で……。みんな監督のおかげです」

西沢は少しばかり目を潤ませながら言う。

「まだ試合は終わってないんだぞ。そんな事は後で言うんだ」

「はい。でも俺、嬉しくて」

「俺も嬉しい。だが、本当に喜ぶのは優勝してからだ」

「はいっ」

再び表情を引き締める西沢。その顔を見て私には、悲願のフェニックス初優勝が見えた気がした。

下原は意地を見せ、後続を断った。山下・須藤のバットを連続してへし折り、速球の威力を誇示した。

「よし、俺も負けませんよ」

グラブを叩いて酒井が出て行った。追加点をもらって一層気合いが乗っている様子だ。こういう時の好投手を打ち崩すのはなかなか難しい。果たしてスターズがどんな手で来るか。

ファーストバッターは二番志水。酒井は下原に負けず劣らず威力のあるストレートで早くも追い込んだ。そして勝負球もストレート。高めいっばいに決まって、見逃しの三振。酒井から思わずガッツポーズが出る。ところがここで異変が起こった。

「タイム」

そう叫んで下川さんがベンチから飛び出してきたのだ。そして審判に詰め寄っていく。

「あれがストライクか？高過ぎる、どう見てもボールだ」

「高めいっばい入ってます」

下川さんと主審はそんなやり取りを続ける。五分も粘っただろうか、ようやく下川さんは諦めてベンチへ戻った。

試合は再開した。三番衛藤が打席に入った。酒井はここでも速球を連投、強打者の衛藤ですら球にバットがついていかない。先程と同じく、高めのそれも今度はボール球を振らせてまたも三振を取った。が、ここでまた下川さんが駆け出してきた。

「今のは振ってないだろう」

と言う下川さんに、打者衛藤も同調して主審に抗議する。今度は先程以上にしつこかった。今にも飛びかからんばかりに猛抗議する。二回目の抗議に場内も異様な雰囲気になってきた。怒号が飛び交い、外野には物が投げ込まれた。

長々と試合を引き延ばされ、私は一つ心配になってきた。せつかく調子のいい酒井のリズムが崩れてしまわないかという事だ。しかもドーム球場とはいえ、もう十月の寒さが染みる夜だ。肩及び身体が冷えてしまう。抗議の光景を見て私は気付いた。これはおそらく下川さんの作戦なのだ。正攻法ではなかなか打てない酒井を、リズムを乱す事で切り崩していく策なのだ。

「やばいな」

星本もそれに気付いたようで、心配そうな顔をする。

「うむ。かといって我々が出ていけば相手の思う壺だ。さらに時間を引き延ばすだろうからな」

私もどうしていいかわからず、ただ腕組みしてじっと待っている他なかった。

十分程して、スターズ陣営はやっとベンチに引き下がった。長く待たされた酒井は大丈夫だろうか。四番ガンズが登場し、正念場を迎えた。

初球、外角へ明らかな大ボール。二球目も高めに浮き上がって、西沢のミットを越えてバックネットに突き刺さった。下川さんの遅延作戦は明らかに酒井にダメージを与えていた。そして三球目、事件は起こった。

「ガッデム」

怒り狂ったガンズがマウンドに突っ走る。酒井はガンズにストリートをぶつけてしまったのだった。スターズベンチから選手やコーチ、下川さんが飛び出す。我々も全員ベンチから出て、暴れるガンズから酒井を守るうとする。両軍入り乱れての大乱闘に観客も興奮し、先程以上に物が投げ込まれた。私は興奮する両軍選手達をなだめる為、あちこちと動き回った。そんな大混乱の中、突然腕を引っぱられた。

「どういふつもりだ？」

下川さんだった。この問いが今のデッドボールについてのものではない事は明白だった。当然ノーサインについて怒っているのだ。

「別にどうもしませんよ。こんなデッドボールで怒るなんて、ガンズも案外気が短いですね」

私は平然と答えた。

「とぼけるな。何故サインを出さん？」

「そんな事まで強制される筋合いはないと思いますが？」

「何いつ？お前、家族がどうなってもいいのか？」

「家族？出来るものならやって下さいよ」

「何だと」

怒ったような困惑したような表情を見せる下川さん。私はそれを嘲笑うように軽く微笑んだ。

昨晚の事だ。私は夕食後、家族全員に言った。

「みんな、明日パパは勝つぞ」

「うん」

子供達が返事をする。

「その為に一つお願いがあるんだ。明日は学校を休んで、何処かに隠れて欲しいんだ」

「あなた、どうしてまたそんな事を？」

妻亜紀子が訝しげな顔をして尋ねる。

「場合によってはみんなの命が危ないって事さ。明日は勝った方が優勝という異様な雰囲気の中行なわれる試合だ。みんなの安全がわかっていれば、私も安心して試合に集中出来る」

私はこんな風にぼかしつつ説明した。

「わかりました。いいわね、みんな？」

何かを悟ったような顔で亜紀子がそう言つと、

「うん」

子供達は皆頷いた。

「よし、ありがとう。それじゃあ手配するよ」

こうして私は知り合いの刑事に家族をかくまい、保護するように頼んだのだ。

「下川さん、あなたには本当にお世話になった。そしてスターズにも愛着があります。だけど、八百長の片棒を担ぐような真似はもう勘弁して下さい」

「お前、自分が何を言ってるのかわかっているのか？」

下川さんの怒りは頂点に達したようで、額に血管が浮き上がっていた。

「ええ。もう自分のチームを不利に追い込むような真似はごめんだ。この試合、ノーサインにしたのはその為です。有利も不利もない真剣勝負で戦いましょう」

「おのれ……。どうなっても知らんぞ」

怒った下川さんは私の身体を両手で押して、去って行った。

ちやうど乱闘の騒ぎも収まっていた。私はマウンドの酒井の元へ駆け寄った。

「酒井、大丈夫か？」

「ええ」

「大分間を空けられて身体が冷えてしまったんじゃないか？」

「いえ、ガンズから逃げるのに全力疾走したんで、逆に暖まりましたよ」

「そうか。それならいいんだが」

「監督、絶対勝ちましょう。俺、頑張りますから」

「ああ、頼んだぞ」

私は彼の肩を軽く叩くとベンチへ戻った。正直、嬉しかった。下川さんに啖呵を切った直後の酒井による必勝宣言、それは私の心に闘志の炎を燃え上がらせるに十分だった。戦う覚悟を決めた以上絶対に勝つつもりだったが、選手がそれに付いてきてくれているのを再確認出来て、改めてフェニックスの監督をして良かったと実感していた。

酒井は私の期待に応えてくれた。ランナーを一塁に背負いながらも、危なげない投球で五番清浜を打ち取り、この波乱の回を凌いだ。

七回表、我々は七番丸山からの攻撃だったが、終盤を迎えても球威の落ちない下原の前にあっさりと三者凡退に終わった。私は九番酒井に代打は出さなかった。中継ぎの増本、ストッパー山田の準備はしてあったが、ここはあえて酒井に投げ切つて欲しかった。私が監督をしたこの一年、その集大成が彼のピッチングに掛かっているように思えたからだ。

思えばドラフトで彼の指名権を引いたのも私、初めてキャッチボールをしたのも私、一軍で使う事を強く主張したのも私だった。この一年、酒井と共に歩んできたと言っても過言ではない。そしてここまで彼は16勝を挙げて新人王も当確で、十分に期待に応えてくれた。心中とっては大げさかもしれないが、この試合を彼に委ねるつもりだった。

その酒井が七回裏のマウンドに上がった。今度は下川さんに文句を言わせない程のど真ん中のストリートで押しまくった。それでいて、スターズの打者がまともに打てないのだから本当に凄い。きつちりと三人で抑えた。酒井のあまりの投球に、苦々しい表情をしている下川さんが見えたのが痛快であった。

八回表、トップにかえつて吉原からの好打順。下原を打ち崩すには最後のチャンスといえるだろう。吉原はバットを短く持つて、とにかくミートする事に撤した。だが、下原の球にはそれでも当たらない。彼の球の勢いは衰える事を知らない。それどころか終盤に来ても球がホップする程、球威を保っていた。スターズというチームは腐つていてもさすがに選手は一流だ。結局吉原はファールで二球粘ったものの、空振り三振した。続く殿村も三振に倒れた。そして三番ジョーンズが打席に入った。

ジョーンズは対下原では良い成績を挙げていない。この日も三打数無安打に抑えられている。かといって、下原に対して分が悪いとは私は思わない。むしろ大リーガーとしてメジャーの速球派の投手を打ち込んできた彼ならば、打てない相手ではないと思うのだが。

外人は速球に強い、下原の頭にもそんなイメージがあるのか、珍

しくカーブから入ってきた。これをジョーンズは大きな空振り。二球目もカーブ、これもまた空振り。今の二球を見た限りでは、全く期待が持てそうにない。そして勝負球の三球目、下原が放った球はフォーク。普通なら空振りしそうなボール球だ。ところがジョーンズはこれを強引なアツパースイングで運んだ。

「うあああああ」

場内が一斉に騒めく。打球はレフトスタンドへ向かっていく。スタンドぎりぎりの辺りに落ちて、そしてグラウンドに戻ってきた。結果は二塁打。しかし、

「おかしい……」

私には腑に落ちない事があった。打球がフェンスに当たってグラウンドへ戻ったようには見えなかったのだ。どうも外野の、それもフェンスぎりぎりの辺りにいたスターズファンが手で打球を叩き落としたように見えた。

当然、私は抗議に行った。レフト方向のホームランを見る塁審に詰め寄った。

「今のは観客が手でボールを叩き落としたんじゃないか？」

「い、いえ、そんな筈は……」

「私の目にはそう写ったんだが、ちゃんと見てくれたんですか？」

「え、ええ……」

塁審はどこか自信のないような言い方をする。おそらくちゃんと見ていなかったに違いないと、直感した。

「どう見てもホームランだと思うんだが」

「フェンスに当たって……ますよ」

「間違っていた判定を正しく言い直すのは確かに勇気のいる事だ。でもそういう事が出来る奴が本当の男だと思うんだが……」

「な、何を言うんです。わ、私は間違っちゃいません」

「そうか。これ以上言っても無駄のようだな」

私は諦めた。弱腰ながら、彼は譲らない姿勢を見せていた。試合中断で観客の苛々も募っている。運が悪かったと思って引き下がる

他なかった。

抗議による中断が終わり、次打者の西沢が打席に入った。彼は今日一発を放っている事もあり、調子も悪くない。ジョーンズのホームランが幻と消えた今、西沢に期待するしかない。下原は西沢に対しては速球主体の投球に戻っていた。一発を浴びた意地もあるのだろう、ムキになってストレートを投げ込んでいる。西沢も負けじとフルスイングでこれに応戦する。連続ファールが続き、場内は両雄を応援する声で盛り上がった。この二人の対決は本当に凄い。またしてもプロの対決を見せ付ける二人に、私は鳥肌の立つ思いがした。私の最後の試合となるかもしれないこの舞台で、思い出に残る激闘を演じる二人に感謝したい気持ちで一杯になった。

下原はストレート、西沢はフルスイング、二人共その姿勢を全く譲る気配はない。力と力でぶつかると本場のプロ野球がそこにはあった。投手は捕手のミット目掛けて思い切り投げ込み、打者は向かってくるボールを思い切り振る。こんな野球としては当たり前前の光景が、見られなくなって久しい。スターズ・下川さんによる策謀じみた野球を目のあたりにしている私には、感動的な光景にすら思えた。下原の伸び上がるような速球に対し、西沢は連続ファール。一球ごとに観客がため息を吐く音が響いた。段々と場内は静まり返っていき、二人の対決だけに注目が注がれた。そして十五球目、快音が響いた。

「うわーっ」

場内も一気に沸騰した。だが、結果はピッチャーライナーに終わった。強烈な打球だったが、下原は顔面すれすれのところでこれをキャッチしたのだった。場内からは両雄を讃える拍手が鳴り渡る。皆、この対決に酔ったのは間違いなかった。

素晴らしい対決ではあったが、我々が0点に終わった事もまた事実である。ジョーンズの当たりがホームランからヒットにされ、なおかつ結果的には西沢が下原にやられた事を考えると、相手にいいムードを与えてしまったのは否めない。この八回裏、大きな山場に

なりそうな予感がする。全ては酒井の右肩にかかっている。

この回スターズは九番からなので、下原を降板させ、代打を出してきた。代打の切り札マルティンだ。この外国人はいい打撃センスを持ちながら、守備に少々難がある為、代打に甘んじている選手だ。代打ながらホームランも12本放っており、あなどれない。

だが、酒井はこの難敵にもストリート主体で攻めの投球を見せた。遊び球は放らず、ストライクになる直球ばかりで勝負する。まるで先程の下原の投球に触発されたかのようなだった。そして勝負の一球、その剛球は見事にバットを折り、西沢のミットに収まった。

「ナイスピー」

と思わず西沢が駆け寄る程興奮していた。ベンチにいる我々もしびれた。そして徐々に「優勝」の二文字が脳裏に浮かび始めた。

酒井は続く一番西を投ゴロ、二番志水を三振に仕留め、見事にこの回を締めた。ベンチへ戻って来る選手達は皆、一様に沸き上がっていた。

「酒井、ナイスピッチ」

「最後も頼むぞ」

皆そんな声を掛けて、酒井を褒めちぎった。

九回表、スターズは桑畑を出してきた。相変わらずキレのいい力一ブの前にウチの打線は沈黙。五・六・七番と簡単に仕留められてしまった。

しかしムードは悪くない。最後の守備に入る前に、選手達は自主的に円陣を組み、気合いを入れた。

「いいか、この一年やってきた成果がこの回に掛かっているんだ。

絶対勝つぞ」

「おう」

真ん中でゲキを飛ばしたのは西沢。それに他の選手が応えた。そして皆一斉に私の方を向き脱帽して、

「監督、この一年間ありがとうございました。優勝を手土産に戻ってきます」

と言った。この光景を見せられて、私はぐっときた。自分はこんなにも選手に慕われる監督だったのかと、心底嬉しくなった。そして感極まって涙が溢れてきた。

「最高だ……、最高だよ君達は。私は絶対に君達の戦いを忘れない。この回、勝敗を気にせず思い切り自分達のプレイをしてきてくれ。私が言いたいのはそれだけだ」

「はいっ」

選手はいつものように揃った返事をして、グラウンドへ駆けて行った。

「いろいろ言ったが、今のは柄にもなく俺も感動したぜ」

潤んだ瞳でグラウンドの選手を見つめる私の背後から声を掛けてきたのは星本だった。

「やつぱりあんたに任せて正解だったかもな。いろいろと非礼をした。すまん」

「いや、気にしてないさ。それよりもまだ試合は終わってない、ちよつと気が早いよ」

「ああ、わかつてるよ」

「もつと気を引き締めた方がいい。スターズは最後まで何をしてくるかわからないから」

「うむ」

私の言葉に頷いて、星本は表情を厳しくした。

九回裏、スターズは三番衛藤からの攻撃。破壊力抜群のクリーンアップが相手だと考えると、二点は決して安心できるリードではない。それに迎える相手衛藤・ガンズ・清浜は三人共、大舞台に強く一発もある打者だ。逆転の可能性がない訳ではない。

対する酒井は投球練習を見る限りは万全の状態のようだ。ストリートも今まで通りに走っている。守る野手達も多少緊張の色は見えるが、いい具合に気持ちを昂揚させていた。

「プレイ」

主審の声と共に衛藤が打席に入った。酒井は振りかぶって剛球を

投げ込む。

「ストライーク」

その球は西沢のミットが壊れそうな程派手な音を立てた。球場のスピードガンによる球速は何と159 km/h。この土壇場に日本最高速が飛び出して場内はどよめき、そして称賛の声や拍手が揚げた。続く二球目も158 km/hをマーク。一気に衛藤を追い込んだ。

しかし、衛藤はダテにスターズの三番を張っていなかった。酒井は三球目も158 km/hのストレートを投げたが、衛藤はこれをファールした。ここからまたも意地の張り合いが始まった。この試合、投手と打者の真つ向勝負が実に多い。それは我々がノーサイン策を取っている事もあるだろうが、この大事な試合に両軍の選手達が己れの力を存分に発揮しようという強い意志の表れとも言えるだろう。

衛藤は粘った。酒井が150台後半の速球を投げ込んでいるというのに、何とかバットに当てていた。九回裏のこの息詰まる攻防に、再び球場内は静まり返った。

「まずいな……」

星本が呟く。

「何が？」

「酒井が肩で呼吸をし出した……」

「そういえば……」

確かに星本の言う通り、酒井に疲労感が浮かび始めていた。よくよく考えてみれば無理もない。いくら力があるとはいえ、彼はまだ一年目のルーキーなのだ。その上、優勝のかかったこんな大事な試合での1球は普段の5球にも匹敵する負担に繋がりがねない。疲れが見えてくるのも当然だ。

かといって、ここで彼を代える訳にもいかなかった。厳しいだろうが、ここは乗り切ってもらわねばならない。おそらく他のピッチャーを出したところで、プレッシャーに押し潰されてしまうだろう。

こんな息詰まる中、突然登板させられて平常心でいられるピッチャーはなかなかいない。しかもノーサインでやっている為、全て投手が組み立てを考えなくてはならない重荷もある。中継ぎ・抑えの増本や山田を出してもこの場面で力を出せるかどうか……。やはり酒井に頼るしかない。

疲れていても酒井の球のスピードは落ちていなかった。十球以上投げてても相変わらず155km/h平均の速球を投げていた。だが、対する衛藤が凄い。驚異的な粘りで三振を取らせない。敵ながら、大した集中力である。

連続ファールが続いて16球目、ついに快音が響いた。強烈なピッチャーライナーが酒井を襲う。

「うわああああ」

観客がどよめく。何と打球は酒井の左肩を直撃した。その場にうずくまる酒井。衛藤は労せずして一塁を手に入れた。

「酒井っ」

守備陣、そしてベンチの皆が酒井の元へ駆け寄る。左腕を押さえたまま俯いている彼の容体が気になり、私も真っ先に走った。

「だ、大丈夫です……」

酒井は顔をしかめつつ起き上がった。若干、身体が震えているのは痛みによるものだろう。

「それは大丈夫じゃないだろう？」

「いえ、やれます。ここで降りる訳にはいきません」

「しかしな……」

「なら見て下さい。投げてみますから」

と言うと、酒井は振りかぶって西沢に向かって投げた。

「む……」

私も星本も思わず唸った。先程までと遜色ないボールが西沢のミットに投げ込まれたからだ。

「どうです？」

得意気な顔で尋ねてくる酒井。

「痛くはないのか？」

「そりや多少は痛いですよ。でもそんな事言つてられませんよ、ここまできたら」

「酒井……」

「任せてくれますね？」

「よし、頼んだぞ」

私は彼の熱意に負けた。痛くないであろう右肩を軽く叩いて後を託した。

「お、おい……」

星本が心配そうな顔で言うが、
「任せよう、酒井に」

と私が言葉を遮った。すると星本も頷いた。彼もこの場の重要性をよくわかつている。こんな形で酒井を代えても次の投手が力を発揮出来ない事を。我々はベンチに戻った。

酒井が五球程投球練習をして、試合再開。手負いの彼に四番ガンズが襲い掛かる。酒井は痛みを押して速球を投げ込む。

「ストライーク」

何と初球の球速は156 km/h、それもど真ん中。ケガをまるで感じさせないスピードと勢いである。スタンドも一斉にどよめいた。酒井の表情は険しいが、球はまだ死んでいない、私はそう確信した。

続く二球目は155 km/hの高めの剛球。ゾーンを大きく外れたボール球だが、速さにつられてガンズは空振り。しかし西沢もそれを取れず、衛藤に二塁を盗られた。苦笑いして謝る酒井。

実は私は大きな間違いを起こしていた。ここで気付くべきだった。既に酒井は限界だったのだ……

三球目を投げた後の酒井の姿勢は大きく崩れた。痛みで身体を支えられなくなつたのだらう。そしてボールは吸い込まれるようにど真ん中へ行った。これを見逃すガンズではない。強振がボールを捕らえ、あっという間にレフトスタンドに突き刺さっていた。土壇場

九回裏で、試合は振り出しに戻ってしまった。

マウンドにがつくりと崩れ落ちる酒井。ついに彼は激痛で気絶してしまった。慌てて皆が駆け寄る。

「おい、酒井。しっかりしろ」

私は酒井の身体を揺り動かした。

「う……、あ……。ぼ、僕は……」

「もういい。ゆっくり休むんだ」

「打たれちゃったんですね……」

と言つて、酒井は哀しげな顔をする。目からは涙も溢れ出していった。

「ああ。仕方ないさ。君はよく頑張った」

「監督……すいません……」

「何を謝る必要がある。まだ試合は終わってない。君はやれるだけの事はやったんだ。胸を張ってベンチに戻ればいい」

「はい……」

「さあ、私の背に乗れ」

私は酒井を背負つてベンチまで戻った。

「監督……」

酒井の涙が私の背中にまで流れ落ちてくるのを感じた。

酒井を医務室まで運んだ後、私は投手交代を告げた。もはや抑えの切り札山田を出すしかなかった。

予想通り、山田は緊張の面持ちでブルペンから出てきた。正直言つてあまり期待できるとは思えなかった。

「山田、気楽にやるんだ。こんな場面、誰だって緊張するさ。打たれたって君の責任じゃない。私の責任だ」

「は、はい」

山田は私の言葉で少しは固さが取れたようだった。しかしこれでもようやくスタートラインに立った状態である。一点でも取ればサヨナラ勝ちのスターズ優位は動かないし、五番清浜は大舞台に強い「お祭り男」の異名を持つ強敵だ。球場内の雰囲気もスターズを後押

しする空気一色に染まり、完全アウェー状態のようになっていた。

初球、山田は決め球のシンカーをいきなり放った。ところが清浜はすくい上げるようにこれを打った。

「うおおおっ」

レフトスタンドのスターズファンが騒めき立つ。が、

「ファール」

三塁塁審が両腕をクロスさせる。レフトポールぎりぎりのところで打球は左に切れた。清浜の何という集中力か。普段このシンカーはまるで打てていないのだが、これを打つとは……。この大事な場面で彼の神経は凄まじいまでに研ぎ澄まされているのだろう。

この大ファールの影響は大きかった。山田は萎縮したようで、コントロールを乱して1-3と不利なカウントにしてしまった。

そして五球目、山田は再びシンカーを投げた。恐らく「歩かせてもいい」くらいの気持ちで投げたのだろう。だが、このシンカーが落ちなかった。ボールはストライクゾーンにはまり込んだ。

この瞬間、勝負は決まった。清浜のサヨナラホームランが飛び出し、スターズの優勝が決まった。がっくりと崩れ落ちるフェニックス守備陣。まるで彼らを路傍の石か何かのように見向きもせず、スターズが下川さんの胴上げを始める。私の目にはそれが夢でも見ているかのように映った。

フェニックスの一員は皆、放心状態だった。目の前で展開されるスターズの喜び騒ぎがとても現実とは思えなかった。ロツカールームへ引き上げるまでの間、何をして何を考えていたのかすら全く覚えていない程だ。

14回裏

まるで葬式のようなムードで試合後のミーティングは始まった。選手は皆静まり返りその大半が俯いて涙を流していた。

「みんな、ご苦労様」

私が沈黙を破って話し始めた。

「そんなに悔やむ事はないぞ、君達は本当によくやった」

「監督……」

「自分を責める必要はないぞ。悪いのは全部この私だ。こんな大事な試合にノーサインなどという策を取る事しか出来なかったんだからな。本当に申し訳ない」

私は選手全員に向かって深々と頭を下げた。

「監督、止めて下さい」

「そんな真似しないで下さい」

「悪いのは俺達です」

選手が口々にそう言うてくれたが、私は申し訳ない気持ちで一杯でなかなか頭を上げる事が出来なかった。

顔を上げた時、私は驚いた。その場にいた全員が泣いていたのだ。西沢も吉田も酒井もみんなが泣いていた。

「みんな……ありがとう。私はこの一年、このチームの監督が出来て本当に良かったよ」

「監督、俺もです。監督がいなかったら今年ここまでやれませんでした」

と西沢が言うと、

「俺も……監督がいたから……。今日は俺のせいでやられちゃったけど、優勝争いまで出来たのも監督の……」

酒井が言葉にならない言葉で続いた。

「You are great boss」

あのウイルソンまでが私を称賛してくれていた。

「監督が弱い精神を鍛えてくねなければ、試合にも出れませんでした」

と吉原が言う。

「俺は監督が……、王嶋茂治が監督だったからここまでやれました」と言っただのは吉田。

「監督がゴロ打ちを言うてくれはらなんだら、三割は打てまへんでしたわ」

丸山が言う。その後も選手が皆、私への己れの気持ちを語ってくれた。涙ながらに語る選手達を前に、私も涙腺が弛んできた。

「みんなの気持ちは本当に嬉しい。ありがとう。今日の悔しさをバネに、来年も頑張ってくれ」

「はいっ」

選手全員が返事をしたところでミーティングは終了した。おそろく選手に会つのもこれで最後だろう。いい思い出となるミーティングだった……

私は星本と二人、残っていた。彼と話すのもこれが最後のようない気がしたからだ。勿論星本の方はそんな事を思ってもいないだろうが。

「惜しかったな……」

先に口を開いたのは星本の方だった。

「ああ」

「あんたとはいろいろあったが、今年最後の試合でいいものを見せてもらったよ」

「本当にすまなかった。今日の試合は……」

「もういいって。済んだ事だ。それにどちらかといえば謝りたいのは俺の方だ」

「星本君……」

「あんたを信じられなかった自分が情けない。最後の試合、あんなにも懸命にやってくれたあんたに酷い事を言っただ……。申し訳ない」

「いや……」

私こそ心底謝りたかった。だが、まだ誰かに本当の事を話す勇氣はなかった。今日の試合が終わってすぐに告白出来る程、心の整理も着いていない。私の中では後日熊沢オーナーに告白し、裁断を仰ぐつもりでいた。

「来年は……勝とう」

「星本君、いろいろありがとう。来年は……」

私は言い掛けて立ち上がった。

「ん？」

「来年からは私の代わりに頼んだよ……」

私はそう言つと、逃げるように星本の前を立ち去った。

「おい、何を言つてんだ。おい……」

星本の追いすぎるような声が聞こえたが、私はそれを振り切るように去った。

最終回

この夜は一人ホテルに泊まった。家族は匿っているので、自宅には誰もいなかったからだ。今日の試合、負けはしたが、心の中に大きく刻み込まれる一戦であった。私のプロ野球人生最後の試合にふさわしいものであった。選手からもあれだけの賛辞をもらい、もう悔いはない。一人落ち着いて、性根を据えた。時間は午前二時を回っていた。そして意を決して電話を掛けた。

「貴様、今さらどの面下げて電話してきた？」

電話の相手、下川さんは出た直後から怒っていた。

「優勝おめでとうございます……」

「ふん。貴様がノーサインなどという愚策を取るものだから、予想以上に苦戦したわ。結果的には盛り上がったがな」

「それは何よりです」

「貴様、何を考えている？まだ球団の連中には何も報告してないぞ。今だったらスターズが優勝も出来た事だし、許してやらない事もないぞ」

「それにつきまして、一度下川さんに会いたいのですが？」

「よかるう。善は急げだ。明日九十九里の海岸で会おう。こんな冬も近い季節に海に行く奴も少ないだろうからな。詳しい場所は携帯で指示する」

「わかりました。お願いします」

私は電話を切った。どうやら下川さんは再度私が恭順の意を示すと思っっているようだ。その勘違いは好都合だった。とりあえず明日の会見の約束だけは取り付ける事が出来た。私は明日で下川さんとの決着を着けるつもりだった。

翌日、私は早起きして車を走らせた。曇り空の元、冬も近い荒れ狂う海を眺めながら海岸道路を飛ばした。指示された場所へ到着し

た時、下川さんは既に待っていた。本当に人っ子一人いない砂浜で、かつてのSO砲は対峙した。

「遅くなりました」

「おう」

下川さんは腕組みして厳しい顔でこちらを見ていた。

「優勝おめでとうございました」

「そんな事はどうでもいい。貴様、昨日の試合は何だ？」

「どうもこうもありませんよ。ちゃんとした試合がやりたかっただけですよ」

私は毅然とした態度でそう言い放った。

「ちゃんとした試合だと？そんな事をして、スターズの監督になりたくはないのか？」

「そんなもの、もうとづくに未練はありません。むしろやれるならフェニックスの監督を続けたい」

「貴様、自分が何を言ってるのか分かっているのか？」

と言いながら下川さんの表情は一層険しくなった。

「ええ、下川さん。あなたには現役時代とても世話になったが、この一年で大きく幻滅させられた」

「何いつ」

「私は全てを公表しますよ。球界を去る覚悟もある」

と私が言つと、下川さんの顔色は赤から青へと信号のように変わった。

「な、何を言う……」

「あなたは今は日本シリーズを控えた身だ。私にもそのくらいの分別はあります。全てはその後に言います」

「シゲ……、本気か？」

既に下川さんは顔面蒼白になっていた。寒空の下というのに、額から汗を滲ませている。

「本気です。もう全てを失う覚悟は出ています」

「じゃあ……」

そこで一度言葉を区切り、下川さんは指をパチンと鳴らした。

「その言葉通り全てを失ってもらうしかないな」

下川さんの言葉と共に黒服の男が三人、浜辺の小屋から現われた。いつか飲み屋でスパイ行為を促された時に、控えていた男達だ。

「シゲ、お前はいい奴だった。が、堅物過ぎた……。こんなに融通の効かない奴とは思わなかった。残念だよ……」

と下川さんが言うと、黒服の男達は足並みを揃えてその背後に位置取り腰から拳銃を抜いた。

「こんな人気のない海に呼んだのはそういうつもりだったからですか？」

私は銃を恐れつつも何とかそれだけ言った。

「殺そうなんてつもりはなかったが、お前の態度がそんなでは致し方ない。家族も何処かに隠しているようだし、自ら責任を取ってもらう他あるまい」

下川さんの背後の男達は銃を構えた。二死満塁に等しいピンチだ。その時、

「動くな、銃刀法違反で逮捕する」

と声が響いた。突然サイレンの音も鳴り渡り、寂しい雰囲気の海が一気に騒がしくなった。海岸沿いの道路から警官が多数飛び出してきて、銃を構えた男達を一瞬にして捕縛した。まさに逆転満塁ホームランが飛び出した。

「ど、どういう事だ？」

狼狽する下川さん。警官は下川さんにも近付いていく。

「待って下さい。この人は逮捕する必要はないです」

それを私が止めた。

「しかし殺人教唆罪では？」

「いえ、大丈夫ですから。ありがとうございました」

私がそう言うと、警官は黒服の男達だけを連れて去って行った。

「シゲ……、お前の仕業か？」

「ええ、命を狙われるような気はしてましたから、あらかじめ知り

合いの刑事に連絡しておいたんです」

「おのれ……何もかも裏切りおつて」

「裏切り？裏切ったのはそっちですよ」

私は本当に頭に来た。

「私はスターズ時代、あなたを尊敬していた。なのに引退した途端、その私の憧憬を覆すような事を次々にしてみせたのはあなたの方じゃないですか？」

「スターズという常勝軍団の中枢にいれば多少目をつむらなければならぬ事もある」

「常勝？そんなものは実力で勝ち取っていくものでしょう？不正をしてまで勝つて、何が常勝だ」

「どうしても公表すると言うのか？」

「ええ。その気持ちに変わりはありません。私は自分に嘘を吐くような生き方はしたくないですから」

「お、俺が自分に嘘を吐いていると言うのか？」

「さあ、それは……。しかし下川さん、あなたはそんな偽りの勝利を手にして満足なんですか？少なくとも現役時代のあなたはそんな人じゃなかった筈だ」

「うぬぬ……」

下川さんは苦虫を噛み潰したような表情をする。この人にも少しくらいは後悔の念があるのだろうか。

「私の言いたい事は全部言いました。じゃあ、これで失礼します。」

日本シリーズ頑張つて下さい」

と言つて私は下川さんに背を向けた。

「ま、待てシゲ。待つてくれ」

下川さんが背後から懇願するように叫んでいたが、私は振り向かなかった。もう話す事などなかったからだ。そして、それが下川さんの声を聞いた最後になった……

翌日の各紙の一面には一様に同じ記事が大きく載せられていた。

それは下川さんが日本シリーズを前に自殺したという記事だった。それも切腹したという……

遺書には「日本シリーズを前にこのような選択をした事を申し訳なく思う。今後スターズに何があるうとも全て私の責任であります」と書かれていたそうだ。

その日、野球界を始めとして、世間は騒然とした。日本一の人気球団、それも日本シリーズ出場を控えた常勝チームの監督の自殺である。切腹という死に方も時代外れで論議を呼んだ。理由のわからない不可解な死に、他殺説まで流れた程だ。

「下川さん……、あなたも男だったという事が……」

早朝、ホテルの部屋でその記事を見た私は衝撃を受けた。昨日、自分と会っていた男が己れの命を断つ、それは何とも不思議な気分だった。昨日の狼狽振りといい、下川さん自身も相当追い詰められていたのだろう。罪悪感とまではいかないが、私も一端の責任を感じた。勿論、自分が間違った事をしたとは思っていないし、悪いのは下川さんの方だと今でも思っている。ただ、死を選ばせてしまった事への後悔のような、もやもやとした気分が胸に溜まっていた。

そんな私が下川さんの葬儀に参加しない訳にはいかなかった。隠れたまま出ていかないのでどんな疑いを掛けられるかもわからないし、出席しないのは良心も痛む。少々重々しい気分では出掛けていった。

下川さんの自宅は明るさを失い、湿っぽい雰囲気包まれていた。多くの球界関係者が弔問に訪れ、その死を悲しみ、不思議に思っていた。

「なぜ下川さんが……」

「日本シリーズはどうなるんでしょうな……」

そんな声があちこちで囁かれていた。そうした中、私は誰からも離れて一人で下川さんの遺影を見つめていた。厳しい顔だ。勝利を追求し続けた男の顔だった。

「王嶋君じゃないか？」

人の群れに加わらず、端の方に外れていた私に声を掛ける者があった。スターズの渡部オーナーと氏屋球団社長だ。

「ご無沙汰……しています……」

私は頭を下げた。とはいえ、心からではない。この二人こそ悪の元凶なのだ。下川さんを殺した主犯格は私かもしれないが、精神的に追い詰めていたのは間違いなくスターズ首脳のこの二名だ。

「いやあ、今年は本当によくやってくれたね。だというのに、下川君が突然の自殺だ……。一体どうなっとるんだ？」

他人が近くにいないのをいい事に、渡部オーナーは密約の話を囁いてきた。

「さあ……」

私は知らぬ存ぜぬを貫き通した。どうやら下川さんの言った通り、首脳部は私の裏切りを知らないようだ。最終戦までうまく持っていて、見事にスターズを優勝させた功労者が何かのように思っているらしい。

「ま、来年も頼むよ。もう少し間を空けたら次は君の番だから」

言うだけ言って二人はそそくさと下川邸を去って行った。その仕事は何か尻尾でも捕まれるのを恐れてでもいるかのようだった。

私も葬儀に最後までいるつもりはなかった。ここにいるべき人間じゃないのはよく自覚しているつもりだ。報道陣にもノーコメントを通した（幸い、話す気分じゃないと受け取られたようで好都合だった）。顔だけ出して、奥さんに挨拶を済ませたら辞するつもりだった。

「お久しぶりです」

私は沈鬱な表情をしている奥さんの元へ近付き、声を掛けた。

「あ、王嶋さん……」

「この度は……」

私は言葉半ばに頭を下げた。奥さんに対しては本当に申し訳ないと思っていた。密約など何も知らないだろうに、突然夫が自殺したのだ。彼女自身、理由もわからず戸惑っているに違いない。

「私、本当にどうしたらいいか……。主人が何で死んだのか、全然わからないんです……」

と言う彼女は何だか老けて見えた。若々しい感じの方だったが、一気に歳を取ってしまったみたいだ。

「奥さん……」

私には何も言えなかった。何か言えばそれは故人の業績を汚す事になってしまう。

「王嶋さん、ちょっとこちらへ……」

哀しげな表情で奥さんが誘う。よくわからないが、手招かれるまま私はついていった。

連れて行かれたのは和室だった。

「ここは……」

「主人の死んだ部屋です」

「えっ」

言われて見れば畳に赤いシミのようなものが幾つかできていた。

下川さんがほんの少し前まで生きていた証だ。

「あの人はここで……」

と言いながら奥さんの目から涙が溢れ出す。

「どうして……どうして切腹なんか……」

「奥さん……」

「王嶋さん、何か理由はわかりませんか？」

「いや、私には何も……」

辛そうな奥さんを目の前にしても、真実は話せなかった。知りた気持ちにはよくわかる。私だって突然妻が自殺したら、その理由を追及しようと思うに違いない。しかしスターズがスパイ行為を推奨していて、下川さんがその渦の中心にいたなんて事は言えない。死んだ下川さんだって喋って欲しくないだろう。

「実は……こんなものが遺書と一緒にあつたんです……」

と言う奥さんの手には一通の書簡が握られていた。表には「王嶋茂治殿」と書かれていた。

「中は見えてません。遺書にも絶対に見るなと書いてありました」

「下川さん……」

奥さんに手渡され、私は中を開いた。

「シゲへ」

お前がこの手紙を読んでいる頃には、もう俺はこの世にいないだろう。死んで世間からの追及を逃れようとする俺を、お前は情けなく思っているかもしれない。でも俺にはこんな方法でしか責任は取れない。すまん。

思えば俺はいろいろな事をお前に教えてきた。しかし最後の最後に、俺の方が大事な事を教わった気がする。確かに俺は自分に正直に生きていなかった。あそこでお前にそう言われた時、物凄い衝撃を受けたよ。

信じてもらえないかもしれないが、俺も当初はああいう行為を働く事を躊躇していた。しかし勝てない事から焦りを感じ、次第に手を染めていった。そして味を占めてしまった。そしてそのまま勝利の亡者になっていったのだ。

シゲよ、本当に済まなかった。お前を脅し、家族の命まで奪おうとするなんて犬畜生にも劣る行為だった。許してもらえとは思わないが、俺には死んで詫びる事くらいしか出来ない。

切腹という古風な方法で死ぬのにも訳がある。シゲよ、武士の情け、告発するなら全て俺の責任にしてくれないか。確かにスターズは元凶だ。しかし、国民的球団のスターズを転覆させる事は、プロ野球界そのものの崩壊をも意味する。俺はそんな有様を見たくなかった。だからこそ、お前に全てを押しつけてもらう為、死を選んだ。

決してお前のせいだと言っているんじゃない。俺はむしろ感謝している。最後の最後に自分を取り戻せたような気がするからな。死んでいく事に何の後悔もない。願わくは最終戦のようなプロの戦いを来年以降も続けてくれ。今年、フェニックスをあそこまで育て上げたお前ならそれが出来る。俺というガンがいなくなれば、素晴らしいプロのプレーの数々も復活する筈だ。あの世からそれを期待し

ている。

下川 鉄春 ㇿ

「下川さん……」

手紙を読み終え、私は感動していた。下川さんが最後に自らを悔い改め、希望を抱いて死んでいった事がわかって嬉しかった。

戦国武将は謀略の限りを尽くして、生き残り勝ち抜いてきた。そんな彼らも死ぬ時は潔い者が多かったと言う。偉い外国の学者が日本人は「恥の文化」を重んじるなどと言ったのもそれに当たるだろう。下川さんも恥を知る武士だったのだ。最後の最後に潔さを見せて死んでいったに違いない。私はそう思う、いや思いたい。

「王嶋さん？」

いつまでも感慨に浸っていた私に奥さんが声を掛けてきた。

「ああ、奥さん、すみません。つい手紙に夢中になってしまい……」

「そんなに重要な手紙でしたの？」

「ええまあ。内容に関してはちよつと話せませんが、下川さんは決して後ろ向きな気持ちで自殺したんじゃないって事がよくわかりました」

「そうですか……」

奥さんは私の言葉を聞いても浮かない顔をしている。

「誤解しないで下さい、別に死んだ事が良かったなんて訳じゃありませんよ。ただ、下川さんは悩んでいた事の全てを解放した上で、死んでいったんです。それが手紙を読んでわかったんです」

「そんなに大きな悩みがありましたの？死ななければならぬ程の

……」

「奥さん、死ぬって事が全て悪い事とは限りません。確かに下川さんが死ぬという選択しか出来なかった事は悲しい……。でもそれによってあの人の心は救済されたんです。嘘じゃありません」

「王嶋さんがおっしゃるのならそうなのでしょう。あの人が私や世間以外に唯一残した書簡がそれですもの……。あの方は本当にあな

たを信頼してらしたんです」

「そうですね。改めてそれがよくわかりましたよ」

確かにそうだ。あんなにいがみ合っていたものの、根底では我々は繋がっていたのかもしれない。ただ、それは奥さんにはわからないものだろうが。

「奥さん、すみません。私の言っている事はよく理解出来ないかもしれないですね」

「ええ。でも王嶋さんにそう言ってもらえて少し安心しました。長年連れ添っていながら、何もあの人の事をわかっていなかったような気がして不安でした。理由はわからないにせよ、あの人が悩み苦しんだまま死んだのではないと聞けて良かった……」

言い終えると奥さんは嗚咽し出した。彼女も張り詰めていた気分から解放され、ようやく緊張が解けたのだろう。しばらく泣き明かすと、とてもすっきりとした表情になった。

「では、私はこれで……。失礼します」

奥さんの様子を見届け、私は辞去を申し出た。

「どうか、最後までいらして下さいまし」

「いえ、私もここにいられた身ではありません。今日のところはこれで……」

「そうですか……」

「下川さんのご冥福をお祈りします」

と言い残して、私は下川邸を去った。来て良かったと心から思えた。

私は下川さんとの約束を守り、日本シリーズが終わるまではホテルに籠もり切った。取材なども一切受けず、熊沢オーナーにはシリーズ後にシーズン終了報告に行くだけ告げておいた。世間は下川さんの死によるショックと受け取ってくれたようで、大して騒がれずに済んだ。

その日本シリーズは、スターズが下川さんへの追悼意識で強固な

まとまりを見せ、パワーリーグの覇者大阪バイソンスに圧勝して日本一となった。

日本シリーズも終わり、私は熊沢オーナーを訪問した。名目上はシーズン終了の報告という事になっているが、私の中ではそれとは違う思惑があった。

「お久しぶりです。今シーズン、最後は残念な結果になりましたが、本当に良くやって下さった」

熊沢オーナーは相変わらず豪快に明るく接してきた。

「最後の試合負けてしまい、本当に面目ないです」

「いえ、あれだけ盛り上がったシーズンを見られたのは久し振りでしたよ。ウチのチームがその主役を演じられたのですから、大いに楽しませてもらいました」

「恐縮です」

私は軽く頭を下げた。

「それで、当然来年もやっていただけるのでしょうか？」

「その件ですが……」

私は切り出し辛くて口籠もった。すぐに熊沢オーナーは察して「今年で辞められると言われるか？ひよっとして、来年から亡くなった下川さんの代わりを努められるのですか？」

と尋ねてきた。

「いえ、そういう理由ではありません」

「では、何故……」

「実は……野球そのものから手を引こうと思っています」

「何ですって？どうしてまたそんな事を……」

「熊沢オーナーすみませんでした」

と言うと、私は床に土下座して頭を下げた。

「い、一体どうしたのですか？全然話が見えて来ないが……」

「私は今シーズン、オーナーを、チームを裏切っていました」

私はついに切り出した。ここで熊沢オーナーに全てを告白し、裁

定を仰ぐのが最上の策だと思われた。

「裏切っていたとは？」

「実は……」

私は堰を切ったように全てを話した。監督就任してから下川さんに脅され、サインを流していた事・最初からスターズはスパイさせるつもりで私をフェニックスに送り出した事・下川さんの死の前日に会っていた事などを。話し出すまではかなり口が重い感じだったのだが、いざ言い出すと不思議とすらすら言葉が飛び出した。私自身、実は誰かに話したくて仕方がなかったのだと実感した。

「な、何と、そんな事があったとは……」

熊沢オーナーの驚き様も尋常ではなかった。そして私の話を聞き終えると、いつもは見せないような険しい表情をした。

「信頼して監督を任せていただきながらこの失態、本当に申し訳ありません。全部熊沢オーナーに処遇は任せます。警察へ突き出すならそうして下さい。全て従います……」

と私が言つと、熊沢オーナーは腕を組んだまましばらく黙っていた。裁判でなかなか判決が出ないような、嫌な沈黙だった。一分程して、ようやくオーナーが口を開いた。

「正直言つてチームを私物化されたようで腹は立っています。何故、言ってくれなかったのです？」

「そんな事……とても相談出来ませんでした。家族の命も掛かっていましたし……」

「ショックですよ、日本のプロ野球界にそんな裏があったなんて……」

「私もスターズにしながら全然わかりませんでした。自分の現役時代までも汚されたようで本当にたまらなかった……」

「スターズ常勝にそんな秘密があったとは……。なかなかウチが優勝出来ない訳だ」

「どんな事を言われても仕方ありません。熊沢オーナー、私は球界を去る覚悟は出来ています。御裁定を」

「うむ……。ではやはり罰は受けてもらいましょう。ただで済ます訳にはいきません」

「はい……」

私は俯いた。熊沢オーナーは睨むように私の顔を見据えていた。それを直視出来ない自分が恥ずかしかった。閻魔大王のように顔を赤らめたオーナーの判決が下されようとしていた。

「罰は……フェニックスの監督を続ける事です！」

「えっ？」

私は自分の耳を疑った。

「聞こえなかったんですか？監督を留任してもらいますからね」

「そ、そんな……」

「ひよつとしてやりたくないのですか？」

「いえ。しかし私は……」

「あなたは悪くない。家族を人質に取られていたのでは身動き取れないのも仕方ありませんよ。下川さんが死んだ今、サイン流しの事実を知る者もいません。我々が黙殺すればいいだけの事。どうです、もう一年やってくれませんか？」

「く、熊沢オーナー……」

私は泣いていた。こんな風にかばってもらい、更に来年の続投まで依頼され、熊沢オーナーの懐の深さに感動していた。

その時、突然部屋のドアが開いた。

「オーナーの言う通りだぜ。あいつら放って去って行くなんて俺が許さねえ」

入って来たのは星本だった。

「悪いが話は聞かせてもらった。このバツカ野郎！」

そう言っただけで彼は私を殴った。その星本の目からも涙が流れていた。

「星本君……」

「何で言ってくれなかったんだ。相談してくれれば助けようもあったのによ」

「すまない……」

「最終戦のノーサインの理由もやっとわかったよ。そういう事だったとは……」

「どうやっても私の罪は消えないよ。私のせいでフェニックス全体に……」

と言い掛けた私を

「バカ野郎！」

星本の怒声が遮った。

「それでもちゃんと優勝争いしたじゃねえか。最終戦だってあいつらノーサインで互角に戦ったじゃねえか。それは誰の力だよ？あんたの力がそうさせたんだぜ」

「そう、あなたの力なくしては今年の選手の成長はなかった。私だって見たいのですよ、彼らがもつともつと伸びていく姿を」

熊沢オーナーが私の肩を叩いて言う。

「オーナー……」

「やりたくない訳ではないんですよね？」

「やりたいです、フェニックスの監督を続けたい……です」

「じゃあやっていただけますな？」

「本当に……本当にいいんですか？」

「勿論です。こちらからお願いしたいくらいですよ。もし償いたいと言うのなら、来年こそ優勝して今年の分を取り返して下さい。」

今年の盛り上がりを見たでしょう？あなたはまだまだ球界に必要な人だ。球界を正常に戻す為にも」

「俺からも頼むぜ。あいつら、あんたじゃないと言う事聞かないかな」

オーナーの言葉に星本が続いた。

「オーナー、星本君……ありがとうございます。やらせて……いただきます」

私は決心した。もうこのチームからは離れまいと。こんなに良い理解者達に恵まれて、何という幸せ者だろう。私は今日のこの日を忘れない。どんなサヨナラ安打よりも、素晴らしい逆転勝ちを果た

したようなこの日を。

翌年、新潟フェニックスはリーグ優勝を成し遂げ、続く日本シリーズでも勝利して悲願の日本一を達成した。

最終回（後書き）

これにて最終回ですが、おまけがあるのでまだ終わりません。

次回更新で本当に終了です。

最終回（別Ver）（前書き）

作家（？）としてあるまじき事ですが、本作は最後までこの別バージョンの最終回とどちらを使うか迷いました。過去作の投稿ということで、あえて別バージョンの最終回も掲載します。以下、「14回裏」から続きます。

最終回（別Ver）

この夜は一人ホテルに泊まった。家族は匿っているので、自宅には誰もいなかったからだ。今日の試合、負けはしたが、私の心の中に大きく刻み込まれる一戦であった。私のプロ野球人生最後の試合にふさわしいものであった。選手からもあれだけの賛辞をもらい、もう悔いはない。一人落ち着いて、性根を据えた。時間は午前二時を回っていた。そして意を決して下川さんに電話を掛けた。

だが、下川さんは出なかった。優勝の余韻に浸ってまだ飲み歩いているのかもしれないし、サイン流しをしなかった私と話す気などないのかもしれない。これには正直困った。私は早々に下川さんとの決着を着けて、その上で熊沢オーナーに告白するつもりだった。しかし翌日も翌々日も下川さんは電話に出なかった。

さすがに私も焦ってきた。電話に出ない事にはそれなりの理由がありそうだし、ひょっとすると例の殺し屋を使って私や家族に危害を加えようと考えている可能性すらある。少なくともこのまま真実を誰にも告げずに死ぬのだけは避けたかった。

私は、当初の予定とは違うが熊沢オーナーに話す事にした。本当なら下川さんに覚悟を告げ、日本シリーズが終わった後に、熊沢オーナーの所へ行くつもりだった。だが、命にまで関わるとなればのんびりしてはいられない。

「よくぞいらつしやった。ささ、どうぞ」

オーナーは私を部屋に招き入れる。中に入り、ソファーに腰掛けた。

「今シーズン、ご苦勞様でした」

「いえ、期待に応えられず申し訳ありません」

「いやいや、十分期待には応えて下された。最後の優勝争いなど、年甲斐もなくハラハラして見てましたぞ」

「恐れいります……」

「それで……急遽会いたいとは、如何されましたか？シーズン報告という事ならわかりますが、どうもそうではなさそうですね」

「どうしても聞いていたきたい事がありました……」

「ふむ、何やら重要な話のようですね。うかがいましょう」

と言うと、熊沢オーナーは身を乗り出してきた。

「実は……」

私は堰を切ったように全てを話した。監督就任してから下川さんに脅され、サインを流していた事・最初からスターズはスパイさせるつもりで私をフェニックスに送り出した事などを。話し出すまではかなり口が重い感じだったのだが、いざ言い出すと不思議とすら言葉が飛び出した。私自身、誰かに話したくて仕方がなかったのだと実感した。

「な、何と、そんな事があったとは……」

熊沢オーナーの驚き様も尋常ではなかった。そして話を聞き終えると、いつもは見せないような険しい表情をした。

「信頼して監督を任せていただきながらこの失態、本当に申し訳ありません。全部オーナーに処遇は任せます。警察へ突き出すならそうして下さい。全て従います……」

私がそう言うと、熊沢オーナーは腕を組んだまましばらく黙っていた。裁判でなかなか判決がでないような、嫌な沈黙だった。一分程して、ようやくオーナーが口を開いた。

「本当にとんでもない事です……」

「面目次第ありません」

「ですが王嶋さん、この件は私に預けていただいただけまいか？私がうまく処理しますから」

熊沢オーナーの顔が一瞬にして柔和なものに変わった。

「オーナー……」

「あなたに非はありませんよ。脅されていたのですから」

「ですが、私はチームを……」

「ええ。それは確かに許されざる事だ。だからこの件に関して私は

徹底的に究明して暴くつもりです……」

ここでオーナーはコップの水を飲み干した。そしてまた口を開く。「ただ、問題がなければ私は来期もあなたに監督を要請するつもりです。あなたは脅迫されていたのだ。八百長を率先して行なっていた訳ではない。私はスターズの不正を暴くと共になるべくあなたが球界に居続けられるよう計りますよ」

「オーナー……」

私はありがたい申し出に感動していた。自然と涙も溢れてくる。

「任せてくれますね？」

「はい……」

私は頷いた。

「ならばこの事は他言無用です。後は私がうまくやりますから」

「ありがとうございます」

私は心からオーナーに感謝した。やはりこの人に全てを打ち明けて正解だった。

「あなたは安心して来期の事を考えていて下さい。また何かあれば連絡しますから」

「はい、本当にありがとうございます」

私は礼を言つてオーナーの前を辞去した。

助かった、正直言つてそんな気分だった。ある程度覚悟はしていたのに、まさかあんな風に庇い立てしてくれるとは思わなかった。オーナーの寛大な気持ちにただただ感謝するのみである。もう結果がどうなるかと悔いはない。球界を追われようと、それを甘んじて受け止めるつもりだ。

私はしばらくホテルに籠もり続けた。下手に表に出て、何か嗅ぎ付けられても困る。私の為に動いてくれている熊沢オーナーに迷惑は掛けたくなかった。マメに家族と連絡を取りつつ、部屋で読書に耽っていた。家族は「いつまで隠れていればいいのか」と不思議がっていたが、「とにかく危険だから」と無理矢理言い含めて納得さ

せておいた。

一週間が立った。その間、何の音沙汰もなく、まもなく日本シリーズが始まるうとしていた。そんな中、夜間に一本の電話が入った。「あ、あなた……大変です」

妻の亜紀子からだった。

「どうしたんだ？」

「い、家が……」

亜紀子の話では自宅が火事になり炎上しているとの事だった。近所の奥さんから連絡があったそうで、自分も子供達と共に向かっている最中だと言う。私も早速現場へ向かう事にした。

車で久しぶりの自宅へ戻ると確かに大きな炎が燃え盛っていた。それも自宅だけではない、近所一帯まで燃え広がった大火災に発展していた。辺りには大勢の人間が群がり騒然としていた。

「王嶋さん、大変よ。奥さんや子供達が火の中に……」

私の姿を見付けた近所の女性が声を掛けてきた。

「どうしてそんな……」

「あなたの栄光の記録が燃えるって……」

「何てバカな真似を……」

言いながら私は駆け出していた。炎の中、危険を顧みず突っ込んで行った。

確かに妻は私の過去の記録を大事にしてくれていた。元々私の大ファンで、ちょっとした縁がきっかけで交際も始まった。彼女こそ、私の一番のファンと言っても過言ではないかもしれないくらいだ。だからといって炎上する建物の中、何かを取りに行くなんて……

炎や煙に包まれて、自分のいる所が今までどんな所だったのかすらわからない。しかも全身から吹き出すように汗が出る程熱い。妻や子供達はこんな中、何処をどう探しているのか。崩れ落ちて落下してくる物体に注意しながら、私はあちこちを見回った。その時、
「きゃーっ……」

という悲鳴が聞こえたような気がした。私は声のした方に走った。

大げさではなく火の中をぐり抜けた。熱いなどと言っている場合ではない。命に替えても妻や子を救い出す覚悟である。

しかし眼前に広がった光景は私の決意を無意味なものにした。妻と子供達は全員横たわって無残な死体と為り変わっていた。全員胸もしくは頭部から血を流している。

「亜紀子っ……」

私の顔は汗か涙かわからないくらい、びっしょりと濡れていた。それを拭うでもなく、妻の名を叫んだ後は立ち尽くしてただ呆然としていた。熱気のせいもあってか、思考が働かない。突然、家族の死という不可解な事実を突き付けられて、信じられない、いや信じたくない気持ちで一杯だった。

だが、突然物音がして私は我に返った。そして音のした方へ振り向いた。

「お前が……やったのか？」

炎の中、銀の防火服に身を纏った男が立っていた。顔にもガスマスクのようなものをしており、何者かはうかがいしれない。

「お前が……」

もう一度詰め寄った私だが、男は有無を言わず撃ってきた。銃声のしない消音銃というやつか……

「ぐっ……」

腹を打たれて私は倒れた。男は気にも止めず、再度銃を構えて私の心臓に照準を合わせている。

「な、何者なんだ、貴様？」

こんな得体の知れない男に家族を殺され、自分も殺されてはたまらない。せめてその正体だけでも知りたかった。

「まあ訳もわからず死ぬのもかわいそうだな。顔くらい見せてやるぜ」

と言うと男はマスクを取った。その下にあっただのは実に意外な顔だった。

「ほ、星本……。何故君がこんな真似を……」

私は驚いて、腹部の痛み以上に頭がどうにかなりそうだった。

「痛々しいなあ。その腹の傷……」

と言つて星本は笑みを浮かべる。

「くっ……、な、何とか答える。どうしてこんな事を？」

「てめえの胸に聞いてみたらどうだ？」

「私がスターズにサインを流しているのを知ったのか……。それでこんな真似を？」

私にはそれしか考えられなかった。だが、星本の答えは実に意外なものだった。

「ふん、そんな事ハナっから知っていたさ」

「な、何だつて……」

「残念ながらあんたは裏の一部しかわかってないのさ。あんたがスターズにサインを流している事など、とつくの昔にお見通しだ」

「な、何を言っているんだ……君は？」

「あんた、せっかくだいいいポストを手にするチャンスがあつたのに、頭が固過ぎたな。正直者はバ力を見る、つてあんたに相應しい言葉だよ」

「星本、君は……」

「なあフェニックスつて何の為に存在すると思つ？」

星本は突然妙な事を言い出す。

「何の為？言っている事の意味がわからんが……」

「だろうな。俺も最初に聞いた時は啞然とした」

星本がそう言った時、近くの建物が燃え崩れて轟音を立てた。

「時間がねえな。防火服着てても危ねえな、これは……」

彼はこの場を去ろうとする。

「星本っ、教えてくれ。一体何なんだ？」

もう死ぬのはわかっていても、その理由くらい知りたかった。このままでは死んでも死にきれない。痛みをこらえて、彼の足にしがみ付いた。うつとおしい、といった表情をしながらも星本は口を開いた。

「仕様がねえなあ。どうせ死ぬんだから教えてやるよ。フェニックスはな……スターズの犬なんだ。元々、スターズを勝たせる為に作られたのさ。勿論、選手はそんな事知らねえがな」

「な、何だって……」

「優勝出来ねえのも当たり前……。いつも誰かがサインを流しているんだからな。あんた、スターズの恐ろしさをよく分かっていなかったようだ。俺だってコーチになった時、取り込まれていたんだよ。最初はシヨックだったさ。だけど脅迫された上に金積み重ねれば協力するしかねえぜ」

「そ、そんな……」

「今年の俺はあんたの監視役つてところかな。だから酒井の一軍入りや西沢のフォーム改造にも反対した。チームが強くなっても困るからな。あと、あんたがボ口を出さないよう厳しく追及したりした……」

「な、何という事だ……」

私は愕然とした。スターズの暗黒網がフェニックスをも支配しているとは、夢にも思わなかった。

「あんたやり過ぎたのさ。素直にスターズに従ってればこんな事にならなかったのによ。バカ正直にオーナーに告白なんてするから始末される事になっちまって……」

と星本が言った時、彼の真上の建物が一気に崩れ落ちた。星本はそれを間一髪でかわした。

「ふうーっ、危ねえ。俺はこんな所で死にたくねえからな。あばよ」
それだけ言うと、彼は去って行った。私にもう一発銃弾を撃ち込んで……

「ぐうっ……」

腹の辺りが濡れていて、傷口から大量に出血しているのがわかる。やはり私は『斉の韓信』だった。高祖たる熊沢オーナーによって『狡兎死して走狗煮られる』の故事通り、誅殺される運命だったのだ。全てはスターズの掌の上での出来事、私一人でどうにかなる問題で

はなかった……

それにしても私は何も知らなかった。まさかスターズが自分達の繁栄の為に球団まで創設していたとは……。フェニックスがその為に存在する球団であるとは思っても寄らなかった。西沢・吉田・酒井……、何も知らない選手達が憐れに思える。彼らは皆、そんな裏の顔を知らぬまま懸命にプレイして、永久に手にする事の出来ない優勝を目指しているのだ。

考えている内に回りを業火が取り囲む。暗黒球場でプレイする選手達の姿を思い浮かべながら、私の身体は炎に包まれていった。天国では天使と野球がしたい、もう悪魔に支配された球場でのプレイはこりこりだ……

最終回（別Ver）（後書き）

作品としては、これにて終わりです。次におまけとして登場人物等を整理したものを掲載して完全に終わります。

おまけ（前書き）

登場人物紹介等のおまけです。

おまけ

登場人物紹介

・王嶋茂治……人気球団東京スターズの中心選手にして、プロ野球界のカリスマ的選手。この話は引退を決意した彼の物語である。

・下川鉄春……現東京スターズ監督。現役時代は強打者で、王嶋と共にSO砲と呼ばれて活躍していた。厳格な指揮官。

・星本浩一……現新潟フェニックス投手コーチ。現役時からずっとフェニックスに所属しており、打倒スターズに燃える男。短気な性格。

・王嶋亜紀子……王嶋の妻。従順に夫を支える。

・王嶋一茂・美奈・克典……それぞれ王嶋の長男・長女・次男。父を尊敬している。

・渡部恒夫……東京スターズオーナー。金も口も出す。

・氏屋寿紀……東京スターズ球団社長。オーナーの渡部に頭が上がらない。

・熊沢武宏……新潟フェニックスオーナー。敵ながら王嶋に惚れ込んでおり、チームに来てもらう事を夢見ている。明朗快活な人物。

以下は本編に登場する主な選手

東京スターズ

・下原浩司……東京スターズのエース。伸び上がるような速球が武器。

・桑畑益己……カーブのキレは絶品のベテラン投手。

・レイ……外国人投手。荒れ球が持ち味。

・衛藤智……広島サーモンズからFA移籍してきた強打者。

・ガンズ……スターズが獲得した現役バリバリの大リーガー。パワーは凄い。

・清浜一博……『お祭り男』の異名を持つ、大舞台に強い打者。こ
一番の集中力は素晴らしいものがある。
・マルティン……守備に難がある為、代打要員だが一発もあるかな
りの実力者。

新潟フェニックス

・吉田大作……新潟フェニックスのエース。キレのいい速球を持つ
が気分屋なところがある。
・酒井弘康……即戦力との評判高い高卒ルーキー。そのストレート
は剛球とっていい程の威力を持つ。
・ウィルソン……大リーグから来たナックルボーラー。プライドが
高い。
・西沢裕……四番キャッチャーでフェニックスの主将を努める男。
選手の信頼も厚い。

・吉原康太……俊足好打の一番バッターだが、精神面に脆さを持つ。
・丸山由紀夫……俊足好打で守備もうまい。こてこての関西人で目
立ちたがり屋。

・ジョーンズ……ガンズやウィルソン程の実績はないが、大リーグ
でプレイしていた経験を持つ。陽気なパワーヒッター。

チーム紹介

センターリーグ

- ・東京スターズ
- ・新潟フェニックス
- ・大阪ナンバーズ
- ・名古屋シャチホコズ
- ・広島サーモンス
- ・横浜ドルフィンズ

パワーリーグ

- ・福岡イーグルス
- ・埼玉ライオネルズ
- ・神戸ビッグウェーブ
- ・日本ウイナーズ
- ・大阪バイソンズ
- ・千葉ガンマーズ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9590e/>

暗黒球場

2010年10月8日14時04分発行